鹿狸

早川孝太郎著

文一路社版

御
山健

凡例、その他

一　本書の内容はその悉くが、三河の東部を北から南へ流れて居る豊川の上流地帯を對象として居る。さうして大部が南設樂郡の横山（長篠村）を中心に語られて居た關係で、單に地名だけを斷つたものは何れも南設樂郡である。

一　地名を云ふ場合に、現在の行政區劃に從つた場合と、傳承の儘に、部落名を村として並べたものとあつて一樣でなかつた。

之は内容の性質上感じを尊重せんとした結果で、他意あるものではない。

一 話に出て來る年代は、今から何年前とあるものは、總べて此本がはじめて世に出た大正十五年を基準として居る。別に明治何年頃といふ類のものは、前後の事情から推定したのである。共に話の確實性を少しでも保持しやうとする意圖に發して居る。しかし後記にも書いたやうに、當らぬ場合も亦多からうと思ふ。

一 目次の標題は必ずしも内容に據つたものではなく、同型のものを連想的に纏めたに過ぎない。それと云ふのが爐邊話の形式を以て、極く寛ろいだ氣持を失はざらんことに努めたのである。

一 動物の話の一方に、家の歴史や人の事に觸れたのは、この物語が動物を

語るといふよりも、むしろ人と動物との交渉に自づから重點があつた爲である。從つて動物學的には、可なり警戒を要する點も尠くないが、それ等は敢て問ふ處ではなかつた。その點では動物を對象とせる村の生活誌でもあつた。

一 挿繪は話の理解を助ける目的で描いた。然し之は寫生に據つたものと、一方記憶に基いたものとある。以上の意味で、もつと多くの圖を必要とせぬでもなかつたが、時間、其他身邊の事情のゆるさぬものがあつたのは遺憾である。尚圖は全部此度新たに描き更め、描き加へたものばかりである。

一 卷頭にも述べたやうに、この本は去る大正十五年に岡村千秋氏の郷土研究社から叢書の一冊として世に送つたもので、當時出版に當つて岡村さ

んの並々ならぬ御配慮を煩つた。その事は後記にも聊か述べた處であるが
特にお名前を言ふ事がなかつたので、玆に更めて感謝の意を表して置きた
い。

一　この本は舊版本に對して、新に序を加へ挿繪を更めたばかりでなく、一
部の字句や文章を改めた點も尠くない。しかし內容はそのままで、要する
に理解を易からしめる爲に、表現に注意したに過ぎない。

一　猪、鹿、狸の話とともに、舊版刊行後、集まつたものを增補したい氣持
もあつたが、語る態度其他に氣分的に一致しないものがあるので中止した。
そんな譯で後記とあるのは舊版本の跋文である。

一　最後に本の標題であるが、之はこの本に續いて「鹿、猿、山犬」及び

「鳥の話」を刊行し、二部作或は三部作としたい氣持もあつて撰んだもの
であつた。實は書名に就いて、當時健在であられた芥川龍之助さんから、
自分は近く「梅、馬、鶯」といふ本を出す豫定であるので、あなたの本を
見て、その偶然に驚いたといふ意味を申送られたものであつた。

一　以來かれこれ二十年近く經つた今日、森下文一郎さんの好意で、本書が
再び世に出ることは、私としては特に感慨が深い。さうして去秋忽焉とし
て他界された岡村千秋さんを想ふ情の一層切なるものがある。

昭和十七年一月

早川孝太郎

目次

鹿

狸

圖版目次

序に代へて

大正十四年の初夏の頃[illegible]であるから、恰もこの本が初めて世に出た前年であつた。私は初秋の[illegible]に、同じ國の由利郡矢島の町に往き合せて、故老達から山の獣の話を聴いてゐた[illegible]鳥海へ入るのに、海岸線の金浦からぢかに山道を選んで、狐も出た[illegible]廣漠とした[illegible]師の原を横切つただけに、耳にする話が一しほ身に沁みるも無かつた。矢島は舊生駒家の城下で、子吉川を遡つて、鳥海山の東北麓一帯を占める笹子村、直根村等の、山の産物であるぜんまい、竹の子、茸等の集散地で、同時に山の獣の話の吹きだまりでもあつた。そんな訣で話を聴いた後に、笹子から、直根村の百宅の部落までも尋ねて廻つたものである。

そこで山の獣の話を聴いて居て、東海の山村に育つた私の耳に異様に感じたのは、

狼（山犬）や熊、鹿、羚羊の話がさかんに出るのに、猪の話と云ふものが、更に出て來ないことであつた。日本の山の獸と云へば、狼はもちろん熊、鹿、猿、羚羊等もあるが、猪は他の獸類に較べて遙かに多いと物にきめてゐただけに不思議でならなかつた。そこで試みに話の間を見て話頭を猪に向けて見たものである。ところが、それを聞いた一座の人々はケロンとしてゐる。而して正直さうな一人が、この邊では猪といふものの出た話はつひぞ聞かぬ——昔は居たかも知れぬが——と案外な口振りであつた。實はその折から氣づいたのであるが、こればかりは何處にも居ると定めて居た猪が、東北地方には分布が尠なかつたらしい。このことは東海の暖地に育つた私の大きな錯誤であつた。さうして將來日本のけもの風土記でも出來るとしたら、特筆せらるべき問題であらうも知れぬ。

動物分布の上から云ふと、寒地の青森縣に椿島があるやうに、適地を求めて巣等も棲んだのであらうから、思ひがけぬ場所に本據があつたかも知れない。しかし地理的に見ると、どうやら常陸の八溝山あたりを一つの境目にして、その足跡は到つて尠なかつたやうに思はれる。

福島縣の南會津や新潟縣の山地でも、狩りの目標になるのは鹿でなくば熊、羚羊、それに猿などで、猪も勿論、雪の中を走るが、何れかと云ふと、その性質からであらう、陽當りのよい疎林や萱立ちの場所を好む。陸前本吉郡の海岸寄りなどは地理的には遙かに北に寄つては居るが、さうした條件から出沒があつたものと考へられる。それに引かへ鳥海山麓などにも處々殘つてゐる山毛欅の大密林と云つたやうな處は、あまり好まなかつたらしい。

猪に較べると鹿の分布は案外に汎かつたやうである。現在を標準にしても南の島の宮古列島から、更に奥羽、北海道にも及んでゐる。鹿は何處か貴族的な感じで、その

生活力は猪に較べて一段と劣るかに思はれるが、大密林にも亦雪の中にも自在に生活を求めてゐる。その鹿が次第に影を匿して、今では全く棲息しない地方が多いのは、要するに人間が捕り盡したに過ぎない。この點で猪の場合とは少しばかり事情が違ふかと思はれる。事實常陸の八溝山一帶の地域でも、今はもうどちらも尠くはなつたが、猪よりは數に於て遙かに鹿の方が多かつたらしい。

今でも水戸市や太田の町などには、八溝山麓の人々は恐く狩りを渡世でもするかの如く思つてゐる人が尠くないが、それはもう四五十年も前の話であつた。然し話だけはどうやら聽くことが出來る。而して其處に出て來るのは矢張り鹿であつた。冬が來て下野の那須一帶の高原地が雪で埋まる頃になると、八溝一帶の山地へ移動して來たものである。鹿は熊や穴熊のやうに冬籠りをやらぬ動物だけに、雪を必ずしも厭ふ訣ではないが、地續きに暖地があれば、其處を求めて移動もやつたらしい。ことにあの見事な肢を持ち、つねに群を成して居たことも、一面には移動するための必要性であ

つたかも知れない。

○

常陸の八溝山（實は磐城・下野の三國に跨る）の麓にも、私が昭和元年の秋に訪れた時には、狩人はもう幾人も殘つては居なかつた。黑澤村（久慈郡）町附に一泊して、翌日字中郷に狩人の一人を尋ねて行つたが、屋敷の入口に直徑四尺もあらう大木を輪切りにした門柱があるのに、先づ度膽を拔かれた。中から出て來たのが、之亦見上げるやうな巨大漢で、一目見た瞬間、アイヌと頭に閃めいた程、瞳が落込んで顔中が髯に埋まつて居た。その翁の話しぶりが今も眼に瞭然と殘つてゐる。以前は熊も澤山に居たが、今はそれを物語る何一つの證據も無い。然し之からお前が行つて見ようとする福島縣東白川郡には入れば、何を措いても高木村の伊香を尋ねて見よ、今ではもう無いかも知れぬが、あそこの諏訪神社では、祭りの度に熊の頭を供へたもので、その

白骨が神社の前の某の家に累々と積んであつたと語つてくれた。

この翁に別れてから、私は更に宇上郷、磯神の部落に狩人を訪ふたものであつたが、やはり狩りの對象は熊でなくば鹿で、猪の話は到つて尠かつた。然し猪も必ずしも獲らない訣ではなく、その人々が狩りの際に穿つ沓が、磯神の狩人の家に吊してあつたが、之は猪の皮で出來て居る。様式から言つて古代服飾の綱拔きに近い。その狩人の話であつたが、猪の中には白猪坊といふ全身白毛を生じたものもあると老人から聽いた事を語つてゐた。猪の毛皮で縫つた沓は日光の奥の湯本附近の狩人も用ゐて居たやうで、どういふものかぶたぐつの名があつた。かうした事實から推しても猪があの地方に相當居たことだけは確かである。

○

西へ進むと猪の話は流石に多い。伊豆の天城山の御料場は、つひこの間まで狩猟頭たちの功名爭ひの場所で、山城の雲ヶ畑と共に、年々の新聞記事を賑はしてくれた。獲物の中には鹿もあつたが、噂に上るのは猪の方が常に多かつた。その他三河の伊良胡岬をはじめ、近江の伊吹山麓は言はずもがな、伊勢から紀伊にかけても、猪の話は多かつた。殊に大和の玉置山は猪鹿除けの御符を出すことで、秩父の三峯神社と共に世に知られてゐる。

澁澤子爵所藏の「猪狩り古秘傳」一卷は、民間の狩りの傳書として珍らしいものと思ふ。年代は何れ德川末期であらうが、惜しいことに場所が不明である。しかし、記事から判斷して大和から紀伊にかけての古傳を記したことは略ぼ誤りがない。中で興味を感じたのは、一度矢玉を負はせたものは、たとひ他領たり共追ひ込んで捕るといふ一條であつた。

中國筋でも猪の話は到る處で聞かれる。岡山の山村でも聞いたが、周防・長門等でも、今尚旺んに出沒があつた。もう何年か前になるが、石見那賀郡の温泉に泊つて、

一夕土地の故老から猪狩りの話を聞いた事がある。四國でも狩りの話と云へばもう猪が賓客であつた。

あれから海を越えて九州へ渡れば、猪の話が壓倒的で、鹿の方は極めて影が淡い。しかし、博多の沖の殘島では、鹿兒島縣の馬毛島から移した鹿が近年夥しく繁殖して、開墾地の農作は、その被害で成立たぬとさへ聞いた。島へ行つた歸りに、その日に獲たといふ見事な大鹿と同じ船に乘つたものであつた。しかし、これは一種の人工繁殖であるから例外の部である。

先年福岡に暮した頃には、豊後の玖珠の町や大野郡の三重の町から、町に賣つてゐる肉を買つて歸つた事も何度かある。南海部郡の因尾村は、東國の八溝山麓のやうに狩人と猪の話が多いらしい。獲物は三重の町あたりに捌くといふ。かうして生きた猪の出沒も多かつたが、殊にあの地方で聞くのは千匹猪の塚の話であつた。

千頭の猪を獲つた期を境に供養のために塚を築いて祭つたといふそれである。福岡

の佐々木滋寛さんの話では、その塚がそちこちにあると聞いたが、私は不注意にして巡り合ふ機會がなかつた。そんな訣で話だけは肥後の五箇の庄でも耳にした。それは仁多尾の村にあると敎へられたが、遂にたしかめずにしまつた。

○

同じ類の話は土佐にもあつて、そこでは專ら千匹猪と云ひ、塚を築くといふよりも千匹目に到つて不祥があるといふ。この種の傳說は必ずしも猪に限るものではない。他の獸の、殊に鹿にもあつたかと思はれ、その方がむしろ先型らしく、遠江の千頭山の地名傳說などはその一例かと思ふ。

鹿の頭を供へて祭りを行ふことは諏訪神社の次第にもあつたが、一方狩りを渡世にする者は、諏訪神社へ奉納する風があつた。奉納諏訪神社と記した名札を附けて街道傍に出して置くと、通りがかりの馬子などが次々に荷鞍に着けて運んだものといふ。之は三河の北設樂郡の話であるが、陸奧黑石在の六郷村のしゝが澤には、何の目的か

判らぬが澤山の鹿の頭が岩に彫つてあると、菅江眞澄の紀行には出てゐる。
千匹猪、千頭の鹿の傳說も、或は千といふ數字に意味があつて、例の人間を對手とする千人斬りの譚にも關係があるかと思ふ。その何れにしても之が猪狩りに關聯して狩人の間に語られて居たことには興味がある。さうして猪が旺んに出沒しない限り、その傳說も繼承さるべくもないのである。九州に於ける夥しい猪の棲息を物語るものに、別に柳田先生の「後狩詞記」一卷がある。該書は日向椎葉村（西臼杵郡）の猪狩りの次第作法を記錄せるものであつた。
沖繩では猪はヤマシシといふ。之は本島の山地ばかりでなく、遙かに八重山列島の石垣島にも棲息して居る。あそこの万年靑岳を中心として、あの島に於ける猪の本據であつた。さうしてつひこの間も、ヤマシシの被害で農作物の收穫が覺束ないとの訴へを聞いた。此處にも狩りを渡世とする者はゐて、之をインビキ（犬挽き）といふことは、沖繩本島の國頭地方と變りはない。

猪を防ぐ柵をイヌガキといひ、捕るには多く銃を用ゐる。石垣島で使用する銃の形式を、亡くなられた岩崎卓爾翁から伺つた事があつた。實物を見た訣でないから、確かな事は言へぬが、それは飛驒大野郡などの山地に傳はるものと多分に共通點がある。
沖繩の猪についての話として、國頭郡國頭村で聽いたことは、今もはつきり記憶にある。ことに前に述べた千匹猪の話に似たことが此處にもあつた。しかし、此處の話は千匹でなく、百匹であるとも傳へられて居る。說話者の談では、目的が供養であるか祭りであるか不明であるが、兎も角、澤山の猪を捕つた者が、緣者を招いて振舞ひをやつた。何分子供の頃ではつきりとせぬが、振舞ひと同時に仲間が集つて、旺んに的を射たといふから一種の儀式ではあつたらしい。
それと似た話を遙かに地を隔てた常陸の山村で聞いてゐる。或は前にも述べた久慈郡黑澤村で即ち八溝山の麓である。あの地方には明治の中期迄俗に百丸の願といふてとが、專ら狩人の間に行はれた。之は捕つた獲物が百に達した時を境に行ふのではな

くて、その名稱のやうに、豫め百といふ數を想定して、山の神に願掛けをする。丸(まる)といふのは心臟を謂ふ狩詞で、要するに百の心臟を神に献るとの誓約であつた。さうして現にその願を果した一人が、つい最近まで生きて居たといふのも、むしろ不思議の感がある。

今日のやうに、何事にまれ物質に走つて、價値や意義を言立てる時世になると、百丸の願の目的なども兎角理解が困難になるが、私が土地の狩人達から聞いた處では、現代風に解釋すれば一種の勵みで、謂はゞ自己鞭撻であつた。然し當の本人の心理は必ずしもさうではなかつたと思はれる。それは明らかに說明は能はぬにしても、一種の誇りと云ふか狩りに對する名譽感が働いて居たことが想像される。從つてそれは千圓の貯金といふやうなものと多分に隔りはあるが、一面に通ずる點もある。

その間の感情はスポーツなどに索めることがむしろ捷徑である。今では心身の鍛鍊などといふが、目的や意義を云立てるからさうした說明をした迄で、當事者の心を驅

り立てるものは、何處迄も誇らしい優越感であつた。斯樣に解釋すると、八溝山麓の狩人の胸にたぎり立つた感情も、どうやら昔の戰場で、斬つた首級の數を誇る武士の氣持にも通ふものがある。さうして亦臺灣の蕃人の首狩りの習俗も思はされる。

○

前にも一寸觸れた「猪狩古秘傳」には、狩人の名譽ある者を、壯夫(ますらを)又は薩夫(さつを)と呼んだことがある。壯夫は或は猿男(ましらをのこ)の訛語であつたかも知れぬが、一方薩夫の名のさつは、古語に謂ふ天の征弓(さつゆみ)のさつ、或は海の幸山の幸などのさちであらう。さつ、さちはただそれだけでは本質が何であるか、未だ明らかではないが、一種の威力旺んな靈威であらうことは、民間傳承の、殊に狩獵者の傳承を通して、想像することが出來る。天龍川奥地の狩人の社會には、シャチといふ靈威の存在が傳承されてゐて、狩りの成果も要するに獵具にシャチの憑依如何で決せられる。シャチ玉といひ、シャチ鐵

砲等の名がそれであつた。何かの動機でシャチが遊離すれば、その物の具は最早磨具に均しかつたことを說明する插話も段々にある。それ等は甞て「三遠山村手記」と題して雜誌「民族」に報告したから、ここには繰り返さない。このシャチが一方のさつ、さちの語と內容に關聯があることは證明し得る事で、決して語音の類似ばかりではなかつた。從つてその熾んなるシャチ、サツの靈威を肉體に享繼いで居れば、名譽の者である事は疑ひない。千匹猪、千匹鹿の故事に就いては何等語る資格はないが、八溝山麓の狩詞に謂ふ百丸の願は尠くも、さうした名譽威を幽かながら胸中に描いて、そこに達する爲の作法であつたかと思ふ。

特に百丸の願などと言はぬ迄で、豫め獲物の數を定めて狩場に臨むことは、以前の狩りの作法にはあり勝の事であつたらしい。「後狩詞記」にもあつて興味ある問題であるが、肥後や日向の狩獵者の間には、獲物を得る爲に海のおこぜを以て山の神を誘ふことがある。その次第に就いて同書には、狩りに臨む前に豫めおこぜを白紙に包み、猪を獲させすれば、この世の光りを見せ申す可しと誓約し、而して獲物があれば更に一枚の白紙を增し、今一つ與へ給はばこの世の光りを見せ申さんと、次々に白紙の數を增してゆくといふ。處が私などの聽いた話はそれとは逆で、豫め獲物の數を定めてその數程白紙を重ねて置き、獲物のある度に一枚づつ剝いでゆく。斯くしていよいよ最後の一枚を剝ぐ際には、山の嶺などの淸淨の地を選んで、其處におこぜを放つ。その瞬間鐵砲のやうな恐ろしい音がするなどと言ふ。これについて日向鞍岡村(西臼杵郡)で偶々知つた老狩人は、甞て仲間と共におこぜを手に入れたが、餘り慾張ることも何かしら空おそろしく、殊勝にも五枚の白紙を卷いた。處がその僅しか忽ち五頭の猪を獲たので、豫て聞いて居た儘に、山の嶺で干乾びたおこぜを放したが、その際は格別音の沙汰も無かつたと語つて居た。

○

千匹猪・百丸の願などに或は關聯があることかと思ふが、狩りの作法の一つとして豊後大野郡の狩人社會では、獲物があると先づ臟腑を割いてその心臟を取出し、豫て用意の白紙の中央に、その心臟卽ち梁等の所謂かうざきを以て、赤くまんまるく染める。出來上つた物は日本では何處でも見る例の日の御旗であつた。これを串に附けて地に挿し祀る。さうしてこのかうざきで染めた旗の翻へる處が總て神の所在で、見方に依ると一つの塚處でもあつた。少しく臆測に過ぐる嫌はあるが、われわれの常に仰ぐ日の御旗の趣向なども、斯樣な處に一つの傳統があつたやうに思ふ。血を日の神の象徵とすること、血と忌との關係なども、狩人の社會に傳承された事實から說くことは、必ずしも無稽のことではなかつたやうに思ふ。或は十二の染木などと稱して、獲物の血を以て串を染め、之を神の標として祀ることを、土佐の本川村（土佐郡）の狩人たちは行つて居た。

○

所謂狩獵ではないが、對馬の陶山庄右衛門に依つて企てられた猪狩りは、近世のわが國に於ける猪の歷史を通じて、比類ない慘虐であつた。元祿十三年に着手して前後九ヶ年の歲月を費し、捕つた猪の數は八萬數千に達した。しかも全島の人口は當時三萬二千といふから、略ぼ三倍に近い猪の數であつた。之では一大決戰を試みぬ限り人間の命が危なかつたであらう。そんな訣で「猪鹿追詰覺書」の中の、神主に讀ませる書付の案に

猪鹿年々作毛を害ひ、人民の食物を減らし——猪鹿の防に力費へて農業疎かなり、郡中に可ゝ生程の穀物を生じ得ざる事、神の知り玉へる所なれば——

とあるのもむしろ悲痛である。しかし之を猪の立場から言へば、一大災厄で、同時に最後を飾る惡夢であつた。それから僅々九ヶ年の間に、朝鮮の牧の島に特別の憐愍を以て放たれた若い一番ひを剩すだけで、他は悉く亡ぼし盡されたのである。

對馬の猪は人間共の挑戰に遇つて忽ちに亡びたが、實は人間の生活權の擴張に伴つ

て徐々に亡び去つた猪はけだし夥しいものであつたらう。之は他の鹿、熊、狐にも亦言ひ得ることであつた。人間の立場から言へば、同じく生きる爲であるから、止みがたい處置でもあつたが、扨對手の數がにはかに尠くなつて見ると、好敵手に去られた勇士のやうに、其處に一沫の無聊を感ぜざるを得ない。さうして少しづつ仲間を食ひつくして、最後に吾一人が取殘された佗しさもないではない。惜しと云ひ恨むといふのもむしろ親愛の表現で、事實われわれと動物との關係には、さういふ處が多分にある。陶山庄右衛門が一番ひを朝鮮の孤島に放したのも、淸盛が源家の遺孤を蛭ヶ島に見遁した故事にも通ずる。さうしてみんな寂しかつたのである。

○

われわれの歴史には、先住民族としての熊襲や、佐伯、八束脛、蝦夷等との爭鬪對立が常にくり返された事を擧げてゐるが、動物との交渉については殆ど記す處がないが、頻繁にくり返されて居た事だけは想像に難くない。それ等は今に殘る狩りの作法を通じても仄かに肯かれる。

狩場の還りは武士で言へば、正に凱旋の鼓舞であつた。それで九州の阿蘇や五箇庄の狩人たちも、獲物があれば先づ法螺を吹き鳴らして相圖をし、山の神への歌を一同で合唱しつつ山を降つた。其聲を聞いて、山口迄女子供までが迎へに出た。ほんとの坂迎へである。又南會津の檜枝岐（ひのえまた）等では、獲物を胴締めと稱して曲物の桶胴を臟腑を拔いた獲物に入れて生けるが如き姿とし、之を若者が負つて村人の出迎への中を行進した。その行列の中には前の狩りに獲た初矢（しよや）の譽れの巾着を腰の邊りに見せてゐる者もあつた。話を聞いただけでも光景が眼に浮ぶやうである。

或は、又獲物の上顎骨を飾つて置く風も、前に擧げた福島縣の伊香だけではなかつた。肥後の五箇庄の平盛氏の家には、座敷の長押に猪の上顎が、數にして略ぼ二百餘り、ずらりと並べて飾つてあつた。惜しい事に家が火災にかゝつて、悉く失つてしま

つた。どういふものか、野猪の上顎骨は、沖繩の狩人たちも大切にして家の門に飾る風があつた。中部日本などで、山犬即ち狼の上顎を魔除けとして腰に下げた等も、同じ線に繋がる風習であらうも知れぬ。

この國土から動物たちがにはかに姿を消した事に對して、動物學者の中には、かれ等の社會に强烈な疫病が流行した結果と說いた人もあるさうだ。明治三十年前後などと、見て來たやうな說も樹てられたが、實は恰度その頃が、われわれ民族の文化が一大轉機にあつて、昔ながらの生活傳統が、恰も傳染病に罹れるやうに、夫々に亡びつつある期であつた。動物も亡びたであらうが、動物との交渉も亦にはかに忘れられた事も否みがたい。

民間の說話の中にも、動物學者と節を合せるやうなものがあつた。たとへば陸中の遠野地方では、あの地方の御犬即ち狼が、幾百頭となく、群れて山の岨を過ぎて行つた。その事以來遽かに影が淡くなつたといふ。小學校がへりの子供達が、山の岨を通

りながら氣づくと、前から見ると犢程もあり、後に廻れば瘠せた犬のやうな恰好をした獸が、前肢を立て、頭を心持ち下げて坐つて居る。

さうして時折頭を下から持上げるやうにして吠へる。それが恰も林の後の切株を見るやうに山肌一面に立つて居た。その期を境に急にあの獸の姿を見なくなつたといふ。これと同じやうな話は他地方にもある。

亦、アイヌの傳說では、鹿の居なくなつた理由として、渠等が遙かに海を渡つて本土に渡つて行つた。先頭の鹿の尻の部分に次の鹿が頭を乘せて、後から後から、數珠のやうに繋がつて海を渡へたといふのである。

◎

話の型は少しく異ふが、肥後の五箇庄（八代郡）などにも、玆數十年前迄は夥しい猪や狼がゐた。日向との境に聳えた內大臣山の山續きには、それ等が大群を成して居

た。狩人たちが氣がつくと、猪の群を遠巻きにして一群の狼がゐる。それは恰も海で鰯の大群を圍んだ鯨の群のやうに、機を潤つては外側から蠶食して居る。猪の中には眞黒い毛を持つたもの、又は白と黑と斑毛のもの、全身が白毛に包まれたものも居た。さうして山から山を幾日もかゝつて移動して居た。あの夥しい猪の群は全體何處に落ちて行つたものか狼は――。それがふしぎでならないと、見た人達が語つたといふ。之は久連子村の平盛春永さんから聞いたが、同氏の父上は、五箇庄切つての狩りの名うてで、しかもその猪の群を實見した一人であるといふ。

かうして淨山に居た獸たちが、にはかに姿を消したことについては、傳染病說でなくば、アイヌ民族の傳說にあるやうに、數珠のやうに繫がつて、遙かに海を渡つて、何處ともなく去つたと說明する他なかつたかも知れない。しかし私などの想像する處では、惡疫の流行もあつたらうが、やはり人間たちが次々に捕つて亡ぼしてしまつたやうに思ふ。この點で多產の猪はさうでもないが、一年に一頭しか生まれぬ鹿の方は、忽ち姿を匿した事は想像に餘りある。それと同時に、夥しく居たといふのも、果して何處まで根據があるかわからないのである。

何れにしても、この國土から獸たちが姿を匿したことは、一沫の寂しさを感ぜずには居られない。人間の知識ばかりが徒らに高くなつては、もう共に在ることは出來ない。遠く袂を別つて去つてしまつたのも、どうすることも出來ぬ時の變遷であつた。

私が玆にものにした三河の豊川上流の獸の話も實はその間の過程を語る一挿話で、見方に依ると渠等の最後の姿であつた。或は足跡といふか、それとも餘香といふか、否それにも增して幽かなもので、さうしてもう永久に還らぬであらう後の語り草に過ぎなかつた。

一　狩人を尋ねて

もう三四年にもなるかと思ふが、狩の話が聽きたくて、以前狩人だつた男を尋ねた事がある。前から知らぬでもなかつたが、狩人だつた事は遂ひ少し前に初めて知つたのである。

生憎だつたが、今日は山田へ田繕しに行つたと、家人の言葉を聞いた時は、ちよつと、落膽したが、更に其田といふのを訊いて出掛けて行つた。

街道から山道にかゝつて二三町進むと、窪を隔てた彼方に、柴山をひどく切崩した址が見えて、直ぐそれと判つた。

新しく畔を築いて、幾段にも出來た新田の一つに、腰が弓のやうに曲つた白髪の男が、餘念なく土を飾つてゐる。傍には頑丈な手押車も置かれてあつた。旋て耳の遠い

事は聞いてゐたので、傍へ寄つてから大きな聲で來意を告げると、初めは何とも合點のゆかぬ顔付であつたが、段々と話す內、得心が着いたものかにやにやと顔の相恰が崩れた。續てびつくりする程巨きな聲で笑つてから、そんな事が何かの役に立つのかと言つて、さも愉快さうに語り出した。

十六の年から猪追ひをやつたさうである。さうして近間の山と云ふ山は悉くあるき盡して、時には遠く伊勢路迄入込んだ事もある。これもその話のつゞきであるが、或年奥郡（渥美郡伊良胡崎）に猪が浮山居る話を聞いて、朋輩と二人づれで出かけて往つた。赤羽根の海邊を鐵砲舁いで歩いて行くと、岸から僅か離れた岩の上に鵜が零れる程止つてゐた。そこで慰み半分に一發放して見ると、鳥は驚いて一時に翔び立つたが、其の中の一羽は海の中へ落ちた。そして波にぷかぷか浮んでゐるのだが、二人共山猿の悲しさにどうする事も出來なかつた。その儘見捨てゝ行かうとすると、近くの畑で始終の樣子を見てゐた男が走つて來て、でし殿あれはいらぬかいと斷つてから、ざんぶり海へ飛込んで拾つたさうである。でしとは此附近で專ら狩人を呼ぶ言葉であつた。

此話を聽いてゐると、春先き日のぽかぽか當つた海邊を、呑氣さうに歩いてゆく狩人の姿が見えるやうである。數ある狩人の中には、居廻りの山谷ばかり守る事をせず、獲物を求めては山から山を渡り歩いて、ほんの僅かの間しか家に還らぬ者もあつたのである。

今年七十七だと言ふが、十數年前四十幾年の殺生生活をふつゝりと斷つて、たゞの農夫に還つて、老先きを田地の改良などやつて居たのである。今こそ百姓をやつてゐるが、實は狩りほど面白い仕事は無かつたとくり返して居た。いくら八釜しく言はれても、若い頃には耕作などとても辛棒が出來るものでなかつたといふ。自身でさう告白して居るだけ、ひどく謙遜した回顧談であつたが、愉快な事にはその老人が、諦めたなどと言ひながら、話の間の手に此方が語る他國の狩りのことを、珍らしがつて聽

かうとする態度であつた。
その晩更に家へ訪ねると、一人で茶を汲んだり、菓子を出したりして歓待してくれた。そして若い頃獲た大鹿の皮で、自身が縫つたと云ふ皮裁付の、ぼろぼろに綻びたのを納戸の隅から捜し出して見せてくれた。大切な鐵砲もはや賣つてしまつて、殘る物とてはもうこれだけだと淋しさうに語つて居た。
斯うして猪狩の話も、納戸の隅に置忘れた裁付のやうに、既に過去の物語に成りつゝあつたが、一方對手方の猪は、未だ盛に出沒し跳梁して居たのである。現に此の老人の耕して居た田圃の稻も、秋の來る毎に荒されたのである。世の文化や猟具の進歩に比例して、必ずしもその出沒が尠くなるとは限らなかつた。

二　子猪を負うた狩人

これは私が未だ七つか八つの頃の事であつた。その日は何かの用事で父が遠出した留守で、母と幼い同胞達と一間へ塊まり合つて寢た。山村の事で早や薄ら寒い程の秋であつた。丁度一眠りしたと思ふ時分に、何者か門の戸口をコトコトと叩く音に目を醒した。先に氣づいてゐた母が先づ聲を掛けたが、外には聽えぬらしかつた。二三度續けて問返す中に、やつと隣村の狩人と判つてほつとした。用向を訊くと、今しがた奥の相知の入りで、子猪を一つ撃つたのだが、家迄運ぶ道具がない。それでショイタ（圖版參照）を借り度いと言ふのである。始終を聽いて母が土間の隅から取出して、戸口を開けて渡すと、其儘急いで立去つた。思ひ懸けぬ出來事に不安と興味がこんがらかつて、中々に眠りつかれない。ことにさうした夜間に、唯一人で山の中を歩いて居る狩人の姿が、私の幼ない興味をいたく唆るものがあつた。
暫くすると又もや戸口を叩く音がしてさきの狩人が歸つて來た。聲を聞く迄もなく直ぐ起出して母を促して一緒に外へ出た。流石に物珍らしく心を惹かれたのである。

夜目に瞭然とは見えないが、奥庭の暗がりにシヨイタを負つて立つた男の肩に、何やら突立つてゐるのが、猪の肢でもあるものか、逆さにして結へ着けてあるらしかつた。

話の様子では背待ちに行つて、田の畔の土手に踞んでゐたと言ふ。すると上の柴山からボソリボソリ草を踏んで降りて來たのが、星空に透して見ると、大小二つの紛れも無い猪であつた。大凡狙ひを附けて撃つと手應へがあつて、つい目の前へ草を分けて轉がつて來たさうで、親猪の方は遂ひ取逃した。其處は私の家の田圃の傍で、判然と記憶を呼びおこし得る場所であつた。

田の脇を小徑が通つてゐて、傍らに三つ叉の杉の古木が立つてゐた。田植ゑの折には、定つてその木蔭で晝飯を喰べた所である。狩人は一通り話し了ると、新たに煙草を喫ひつけて、幾度かシヨイタの禮を述べて前の坂道を降りて行つた。今考へると夢のやうな光景である。

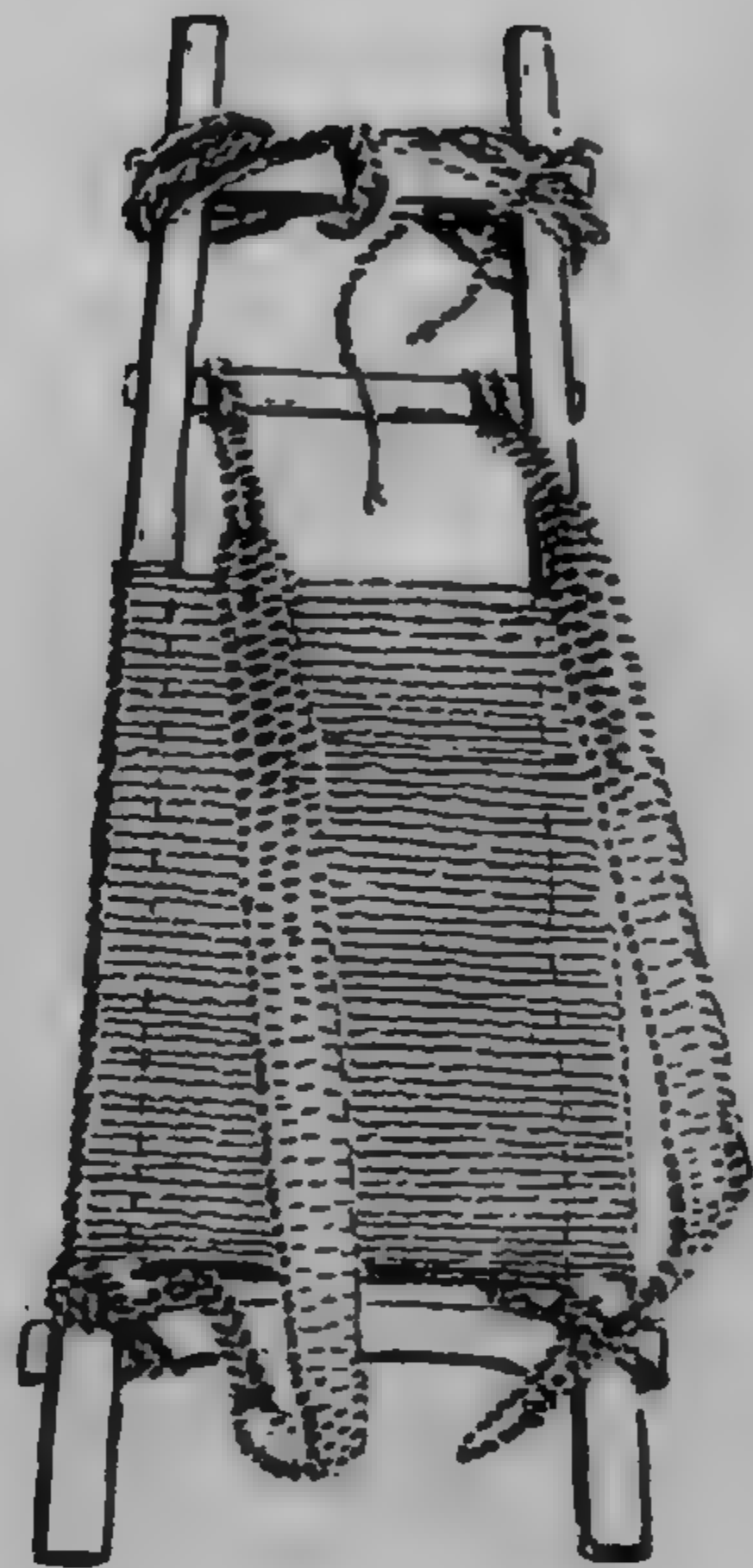
其男は亀さとか言ふ名前で、狩人仲間でも豪膽者だとは聞いてゐた。いつも相棒になる同じ村の若い男は、これは亦ひどい臆病者で、猪を見かけて逃げてばかりゐるのだが、この豪膽者のお蔭で何時も旨い目に遇ふとも聞いた。これもその亀さの話であるが、曾て村の某の老爺が、山田の猪小屋で鳴子の綱を引いてゐると、默つて入口の垂菰を持上げて覗きこみ「親父今夜は俺が番をせるぞへ」と聲をかけて、ひどくびつくりさせた事があつたといふ。以前からゐた強い狩人はみんな死んでしまつて、もう夜の夜中に一人山の中を歩き得るのは、彼の男一人だとも聞いてゐた。

それ程の豪膽男ではあるが、大切に飼つてゐた獵犬が、山で何物かに喰殺された時は、三日三晩も泣き通したさうである。それは赤毛の極く賢い犬で、主人が狩りに出ぬ日でも、一日に一度は必ず山へ入つて、兎か狸かを捕つて來る。それが或日山には入つた儘三日經つても姿を見せぬのに、近所の人達を頼んで彼方此方と捜すと、或る岩山の大きな石の蔭に、咽喉を喰破られて息切れてゐた。大方狸かなんぞの、劫を經

1

た物の仕業でもあらう、餘り澤山の獲物を捕つた報ひだとの噂もあつた。その事以來追が豪膽者もにはかに老込んでしまつたと聞いたが、今でも多分生きてゐるであらう、もう七十幾つかの年配の筈である。

三 猪の禍ひ

秋になつて稲が色づく頃には、山田を耕してゐる者は一晩でも安閑としては居られなかつた。僅か許りの冷田の作代であるが、文字通り猪の襲來がはげしくて、絶えず脅かされて居たのである。收穫間近かの獲られるやうな忙しい中を、日が落ちてからヤトウを幾十本となく焚いで、何でも今夜あたりが危ないなどと、暗がりを辿つて、猪の路へ立てに行つた。或時父の後から、隨いて行つた事がある。それは池代といふ

山田で、彼の岸から來るのだと敎へられて、眞黑に茂つた雜木山を、不安な目で仰いだものであつた。さうして柴山から田の畔へ續く崖の下へ、矢來のやうに隙間なくヤトウを立てた。これも其處での經驗であつたが、朝早く父に從いて見廻りにゆくと、ヤトウの一本に、黑い血が五寸程もにじみついてゐた。父が手にとつて眺めるのを、脇から心を躍らせて覗きこんだものである。

ヤトウは別にヤトとも謂つて、矢竹の稍太い物を三尺程の長さに切揃へ、穗先を鋭く尖らせた物であつた。表庭の端で麥稈など焚き、一本一本を火に焙つて、竹の脂肪を除つて鋭くしたのも、古くから續けて來た方法であるらしい。

ヤトウは本來陷穽の中に立てゝ、陷ちた猪を突刺す爲の物の具であつたが、別に崖の下や垣根の內側にも置いて、獲物を捕る事にも使つた。單に猪を嚇す爲の、防禦の具に用ひたのは、むしろせつない時の思付であつたかも知れぬ。さうしてヤトウの材料にする矢竹の茂みが、まだ山の其方此方に、忘れたやうに殘されてあつた。

猪に荒された後の稻は、誠に情け容赦も無い事であつた。わけて子持猪にでも出られたが最後、それは目も當てられぬ狼藉であつた。喰ふ以上に泥の中へ踏みにぢつて個々立つてゐる物も、稻扱にでも掛けたやうに、粒の悉くが扱り取つてあつた。猪は穗の幾つかを、一口に啣へて引きたぐるといふ。空穗がひよろひよろ風に吹かれて居るのを見て、思はず涙を零したなどの話も、度々聽かされてゐた。其上にも後の稻の始末が、之亦並大抵の面倒で無かつた。それと見た隣の田では、未だ青い穗面を、むざむざ刈取るもあつた。燒米にしても、猪に喰はれるより未だ增しだと、さうした話も屢々耳にしたものである。思へば憎い憎い猪であつた。日の暮方にちよつとした仕事の隙を見て、そつと狩人の家へ賴みに走つたのも、よくよく遣瀨なくての事であつた。

猪一つ捕つてくれるなら、酒の一升位出しても却つて有がたいと、遂ひ約束もしたのである。鳳來寺村長良の一つ家の話であつた。それからは狩人が猪を舁いで來る度に酒一升分の價を拂ひ拂ひしたが、屋敷廻りの猪は少しも減らない。だんだん樣子を探ると、實は酒代の欲しさに、飛んでもない遠方からわざわざ廻り道して舁いで來る事が判つて、慌てゝ約束を取消したといふ。

村の某の男であつた。屋敷の脇の甘藷畑へ、毎晩のやうに猪が出て片つ端から甘藷を掘る。果ては猪の方が圖々しくなつて宵の口から來て居る。それで或晩鐵砲を用意して待つて居て、中りもすまいと思つて放したのが、どうした間の惡さか遂ひ擊ち殺してしまつた。實は嚇すつもりの仕業であつたのだが、夜が明けて見て流石に當惑した。狐や兎などと異つて、三十貫もある物を、三人や四人の家族で、喰つて片附ける事も出來ない。ちよつと動かすにも男一人の手には餘る程で、賣る事は勿論、隣近所へ分けて與へる事も、鑑札を持つてゐる狩人達の思惑が案じられる。萬一警察へでも密告されたら、それこそ辛い目に遇ふに極つてゐる。現にさうした噂話も彼方此方で聞いて居た。散々頭痛に病んだ果に、女房の緣故を辿つて、近所の狩人に情を明して

引取つて貰つたといふが、それ迄二日二晩の間、猪の被に莚を掛けて、畑の隅に匿して置いた。その狩人から、幾千の代價を貰ひはしたが、そこに運ぶ迄の氣苦勞を考へると、滅多に猪も獲されぬと零してゐた。どつちに轉んでも農家にとつては厄介千萬な猪だつたのである。

四　猪垣の事

猪の出る路をウツと謂つた。猪は田や畑へ出るにも、必ずウツを通つたので、陷穽と云へば、定つてウツを目がけて設けたのである。私が子供の頃には、この猪の陷穽が、畑續きの木立の中に、半ば崩れかけて、未だ幾ヶ所も殘つてゐた。多く畑から數間若しくは十數間程入込んだ位置で、穴の直徑が六尺位、深さは二間もあつたらう。ある時朋輩の一人が、過つて其處に墜ちて救ひ出すに弱つた事がある。

陷穽は田畑を荒す猪を防ぐ爲に設けたのであるが、一方それを利用して猪を捕る狩人もあつた。上に細い横木を渡して、萓草などを敷いて置く。穽の底には前言うたヤトウを一面に立てゝ置いた。老人の話に據ると、同じ狩人の中でも腕に自慢の者が遣る業では無い。その上にも捕れた獲物も多くは子猪ばかりで、親猪は滅多に掛るものでなかつたと謂ふ。

子猪の事を別にウリンボウと云ふ。姿容ちが甜瓜を思はせる上に、肌に白く縞が出てゐた。それでウリンボウが旨くヤトウに掛つた處は、恰も盆の精靈送りに作る馬其儘であつた。次の話は祖母から聞いた話であるが、或時隣家の陷穽へ、巨猪が陷ちた事があつた。猪は身にヤトウを三本も負ひながら、倘旺んに荒れ狂つて始末に了へない。そこで近所の者が集つて石撲ちにしてやつと斃したさうである。その頃はどこの屋敷の近くにもきまつて陷穽が設けてあつた。

陷穽へは猪の他に、勿論他の獸も掛つたが、特に山犬の陷ちた話がそちこちに傳はつて居る。

もう四十五六年も前であるが、鳳來寺山麓の吉田屋某の裏手にある陷穽へ陷ちた事があつた。その時は村の者が多勢集つて、藤蔓で畚を作り、四隅に長い綱を附けて穴の底へ下げてやつた。山犬がそれに乘るのを見すまし引揚げて遣してやつた。翌日その穴へ大鹿が一匹落し込んであつたのは、言ふ迄もなくお禮心であつた。

山犬が陷穽へはまつた時は、中で盛に吠えると謂ふ。私の家の縁つゞきである某の男は、豪膽で聞えた狩人であつたといふが、その噂を裏書するいろいろの話が殘つてゐる。或時屋敷裏の陷穽へ山犬が掛つた事がある。普通なら藤蔓の畚でも下げる處であるが、某は恐れる色もなく、穽の中へ梯子を下して降りて行つた。さうしてその山犬を片手に抱いて上つて來てそのまゝ放してやると、犬は嬉しさうに尾を振つて其場を立去つたが、並居る村の者も某の豪膽にはさすがに魂消げてしまつた。その折山犬が何の抵抗もしなかつたのは、最初にムズを含めた爲だと聞いてゐるが、ムズとは何の事か判然とわからぬ。或は呪文の一種でもあらうか、亦さういふ說もある。明治維

新の少しく前の事で。翌朝一匹の大鹿が穽に投込んであつた一條は、前の話と變りはない。これも山犬の報恩譚の一例である。

話の枝が餘計な方へ伸びてしまつたが、猪の陷穽とは別に、田や畑を繞つて、深い堀が穿つてあつた。猪除けの目的であつた。今では段々に崩され埋められて、殘つてゐるのは極く稀になつた。一口にホリンボーなどと呼んだが、或は別の稱呼があつたかもしれぬ。外側には、高い垣が築かれて、之は多く石で積上げ、專ら猪除けの垣根と言うたが、別にシシガキとも亦ワチとも謂うた。

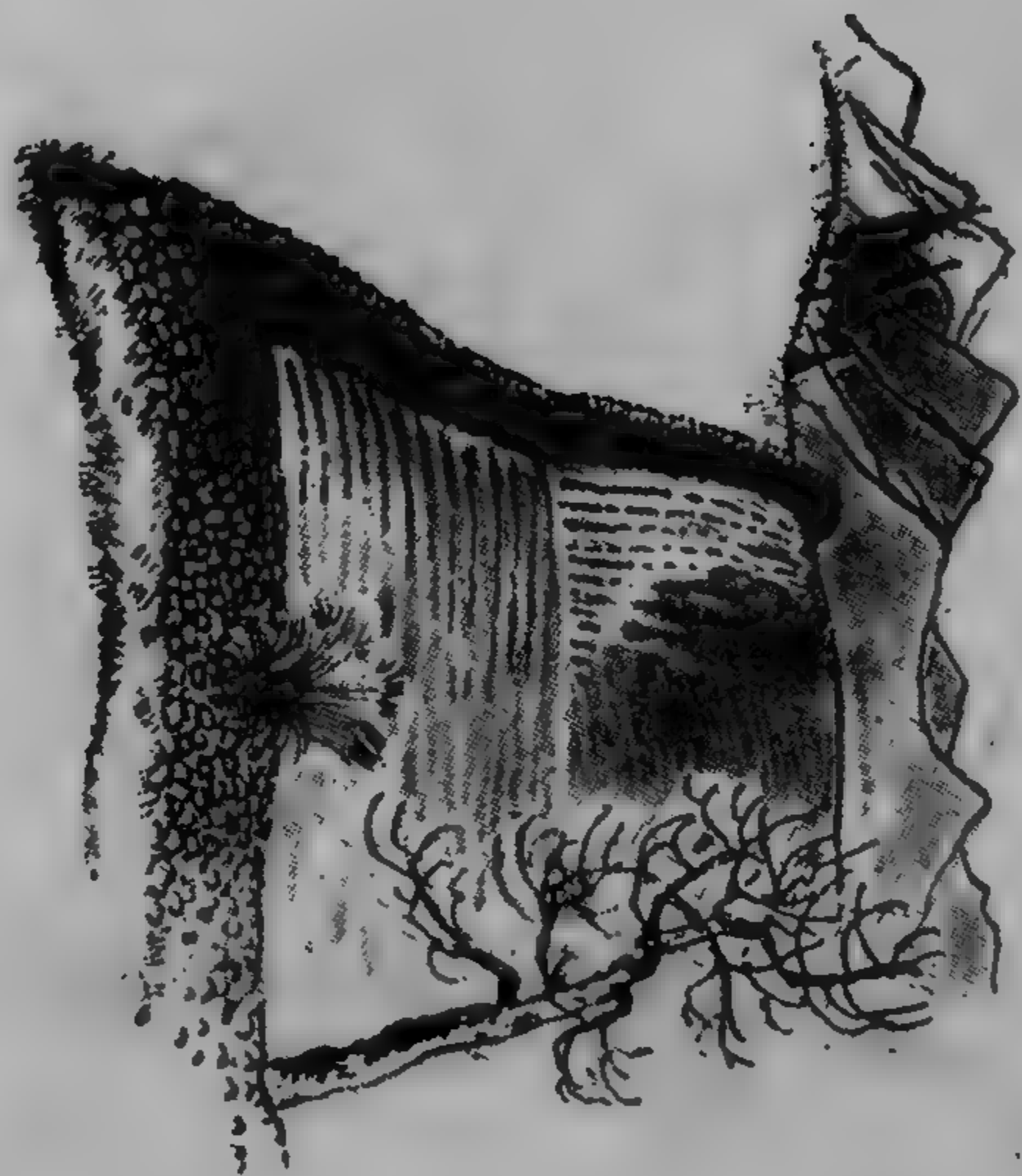
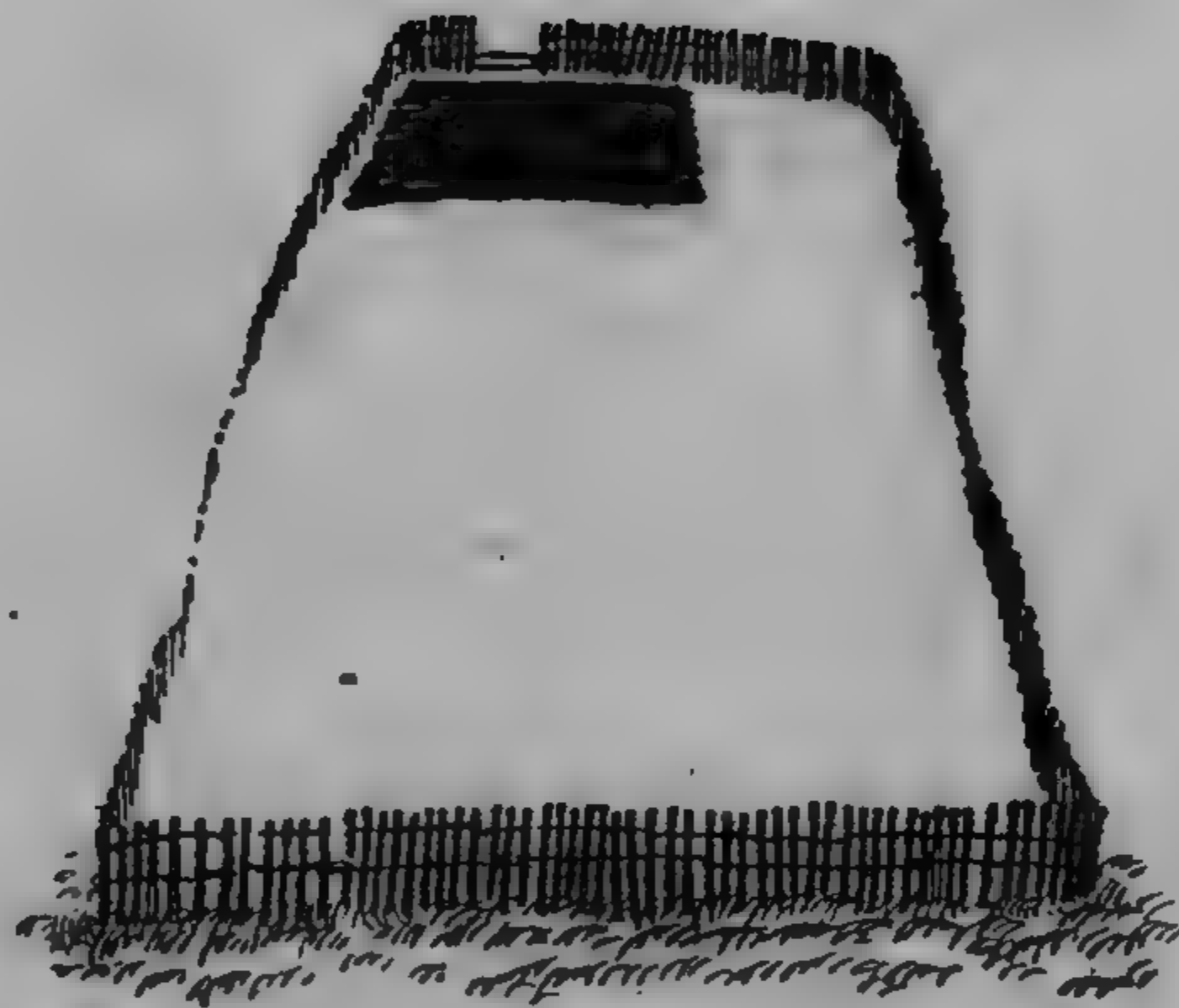
要するに堀と垣との一種の堡壘で、クネ又はヤヅカの類である。之を一口にワチと呼んだのは、實は誤りであるらしく、この地方で、一般にワチと謂ふのは、實は燒畑に繞らした垣であつた。杭を二本宛ならべて打ち、それを骨組にして、横木を互ひちがひに組んでゆく。(圖版參照)尤も燒畑にかぎらず、山の畑には、どこにもこのワチが繞らしてあつた。此方は燒畑のものとは異つて、頑丈な杭を隙間なく打つた半永久的

な構へで、柵とでも言つた感じである。材料は多く栗の角材であつた。損じた部分に次々に杭を補つてゆくので、處々色が變つてゐたりした。之を遠くから望むと、遥かな山の斜面に、年を經て眞白に晒らされたツナの中に、青い麥の畝が段々に續いてゐたりして、一種なつかしい風景であつた。鳳来寺村分垂の街道に立つと、嶺といふ部落の山畑に、この柵が長く續いて居たのが、今も目に殘つて居る。

五　猪の案山子

猪嚇しの案山子の事は、既に「三州横山話」にも書いたが、之を一つ一つ觀察すると、隨分變つたものがあつた。案山子は專らソメと呼んでゐた。氏神の祭禮に見出した一丈もある藁人形を、後に着物だけ剝いで山田へ持込んで立てたのもあつた。それは日露戰爭の凱旋の年で人形はロシヤ兵であつたと思ふ。顏を胡粉で彩色した念入りの物だけに、遠くから眺めると人間でも薄氣味が惡かつたといふから、効果は滿點で

6

5

あつたかもしれない。亦北設楽郡の田峯で實見した物は、藁で馬を拵へて之に人形を乘せてあつた。

鳥威しの案山子などもさうであるが、以前のやうに簑笠姿などはだんだんに見なくなつて、メリヤスのシャツを着せたり、經木細工の帽子を被らせたりする。さうかと思ふと或家では、昔からある古い袢の利用法として、取出して着せたと謂ふ。そんな譯で、唄の文句にも

女郎買ひして家の嫁見れば
三里やまをく猪のそめ

或は下の句を、布里や一色の猪のそめなどと言ふのがあつた。布里、一色は共に、この地方の代表的な山村だつたのである。何れにしても都市に住む唄の作者などには想ひも及ばぬ恰好であつた。

女の髪の毛を燒いて串に挾んで立てたり、或はオンナラを竿の先に吊して置いた類

と同一趣向で、昔からあつた物に、カベと謂ふ一種の火苞があつた。襤褸をば芯にして、上を藁や蓬で包んである。或は竹筒に入れて、側面に煙出しの穴を穿つたのもある。一方の端に火を附けて、畔毎に立て丶置いた。それの極く小さい物を、夏分蚊やブヨを除ける爲に、草刈女などが腰に下げた位だから、あのきな臭い煙で、猪を厭やがらせる目的であつた。カベはカコともいひ、東京などでいふきな臭い匂ひを専らカコ臭いとも言うた。或は又太い朽木の端に充分火を廻らせて、畔に轉がして置くのもあつた。どちらも少し位の雨には平氣で、二日三日位は續けて燻ぶつてゐたのである。

案山子では無いが、猪除けのワチの變形と思はれる物に、山續きの畔から畔へ、鐵條網を張廻したのがあつた。之などは新趣向の一つで、間接には戰爭などの影響であつた。然し結局昔通りの番小屋に、刈入れ迄番をするのが、確實でもあり、亦手輕でもあつた。それで吾も吾もと新に小屋を設けて、果は一目に見通される程の壟中に、思ひ思ひの藁小屋が、五棟も六棟も建つた事もあつた。たゞ昔と違つて來た事は、鳴子の綱を引く代りに、石油の空鑵を叩き、マセ木の代用に、屋根を葺く亜鉛板を持込んで叩いたりする事であつた。さうかと言うて老人のある家では、昔ながらにマセ木を打つて居たのもあつた。

マセ木は番小屋の中央を仕切て、横に渡した丸太の謂ひであつた。猪番をする者は爐にあたりながら、手頃の棒をとつて、時折タンタンと叩いては、眠い眠い夜を送つたのである。さうして合間合間に、ホイホイと呼ばつたのである。

子供あそびの尻取文句に、「ホイは山家の猪追ひさ」などと言ふのがあつたが、正にそのホイであつた。マセ木の代りに、板を打つのもあつたが、何れにしても寂とした秋の夜の山谷に、その音が谺する時は、憎い猪を嚇すに充分だつたのである。思へば猪追ふ術も昔が尚なつかしかつた。況して吾打つマセ木の音に聞惚れたなどの話もあつて、ほんとに懐かしい限りであつた。

私が子供の頃親しくした老人に、八十幾つ迄この番小屋泊りをやつた男がある。息子達がそれを氣にして、老人をあまりに酷使するやうで近所の思惑もあるからと、何遍やめてくれと頼んでも諾かうとしない。それで死ぬその年の秋迄マセ木を叩き通したさうである。話しだけだとあはれにかなしくもあるが、當の老人にすれば、實は猪番が何より樂しみであつたさうで、しかも老人には持つて來いの仕事であつた。かうした勞力の利用も以前の山村などでは屢々試みられてゐたのである。その老人は山口豊作といひ、ほんとに朴訥な性質であつた。今でもその顔を思ふ度に老人が手すさびに打つマセ木の音が、どこか耳の底から響いて來るやうである。

六　猪と文化

誰しもさう言うた事であるが、近頃の猪は以前のワナや陷穽時代に較べると、悧巧になつたばかりではなく、性質も猾くなつたと言ふ。猾くなつたと言ふのは、畢竟性質が單純でなくなつた事を意味する。僅かな物の響きにも、變つた物の香りにも、怖れ警戒して近づかうとしなかつた猪が、忽ちそれ等に慣れてしまふ。さうかと思ふと次第に出沒が巧妙になつて、一夜の間に十里十五里の山の遠國から、峯傳ひ溪傳ひに風のやうに渡つて來て、その夜の中に再び元の棲家へ還つてしまふとも信じられた。猪が出たと聞いて、附近の山を捜したのではもう遲いとは、專ら狩人達も言うてゐた。

軒端に積んだ稻束を襲ひ、屋敷廻りに設けた甘藷穴を掘返すなどは、五十年前を考へれば何の珍らしい事でも無かつたが、當時と比べると、猪の本據であつた筈の山がひどく明るくなつた後だけに、猪のみが猾くなつたやうにも思へたのである。殊に一頃盛んに山の木が伐られた時を境に、一度は殆ど跡を絶つた事實もあつたので、その後に出る猪は、全く別物のやうに考へられたのである。

山の姿が以前と較べてひどく變つた事は、私などの記憶から判斷しても、著しいも

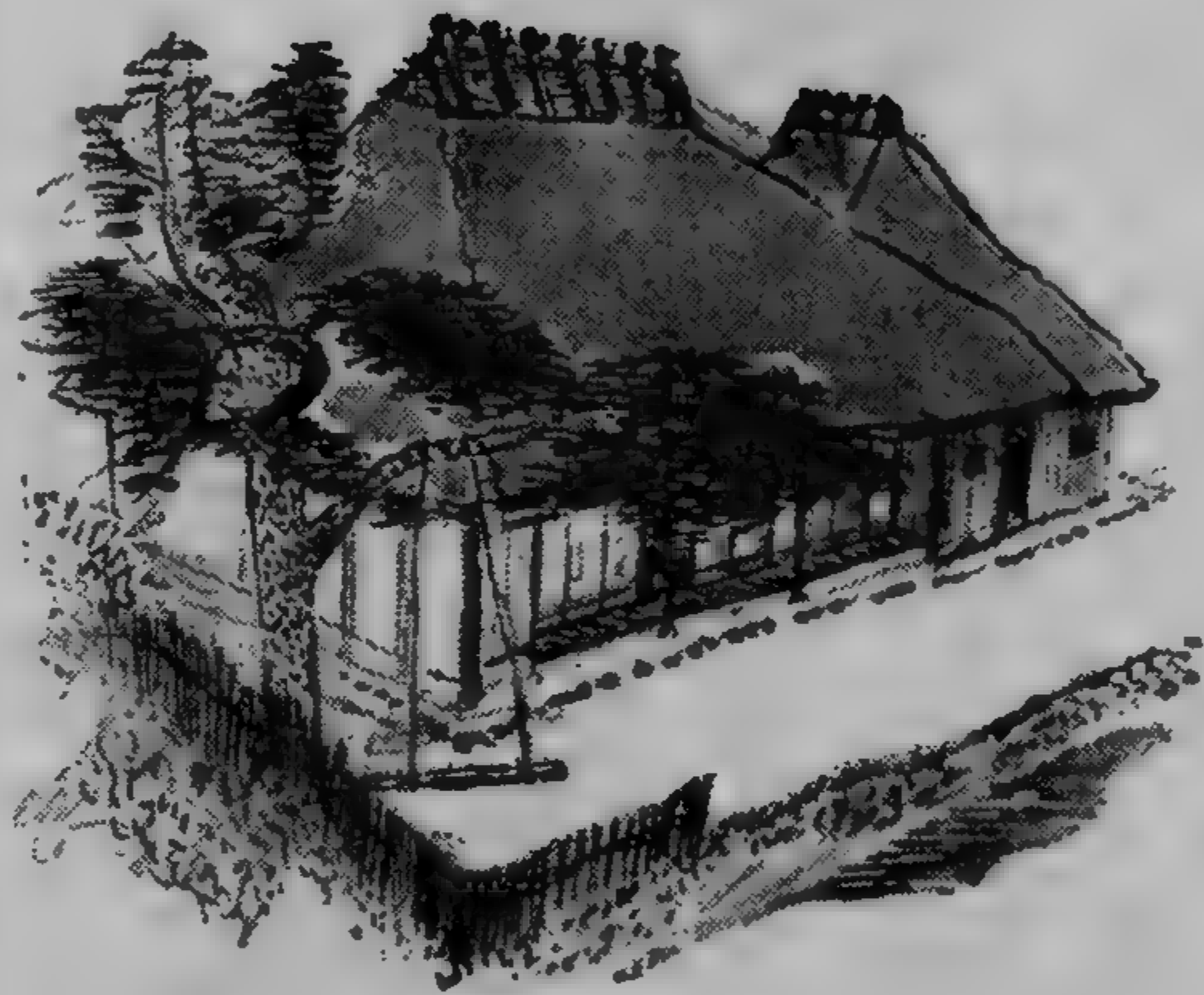
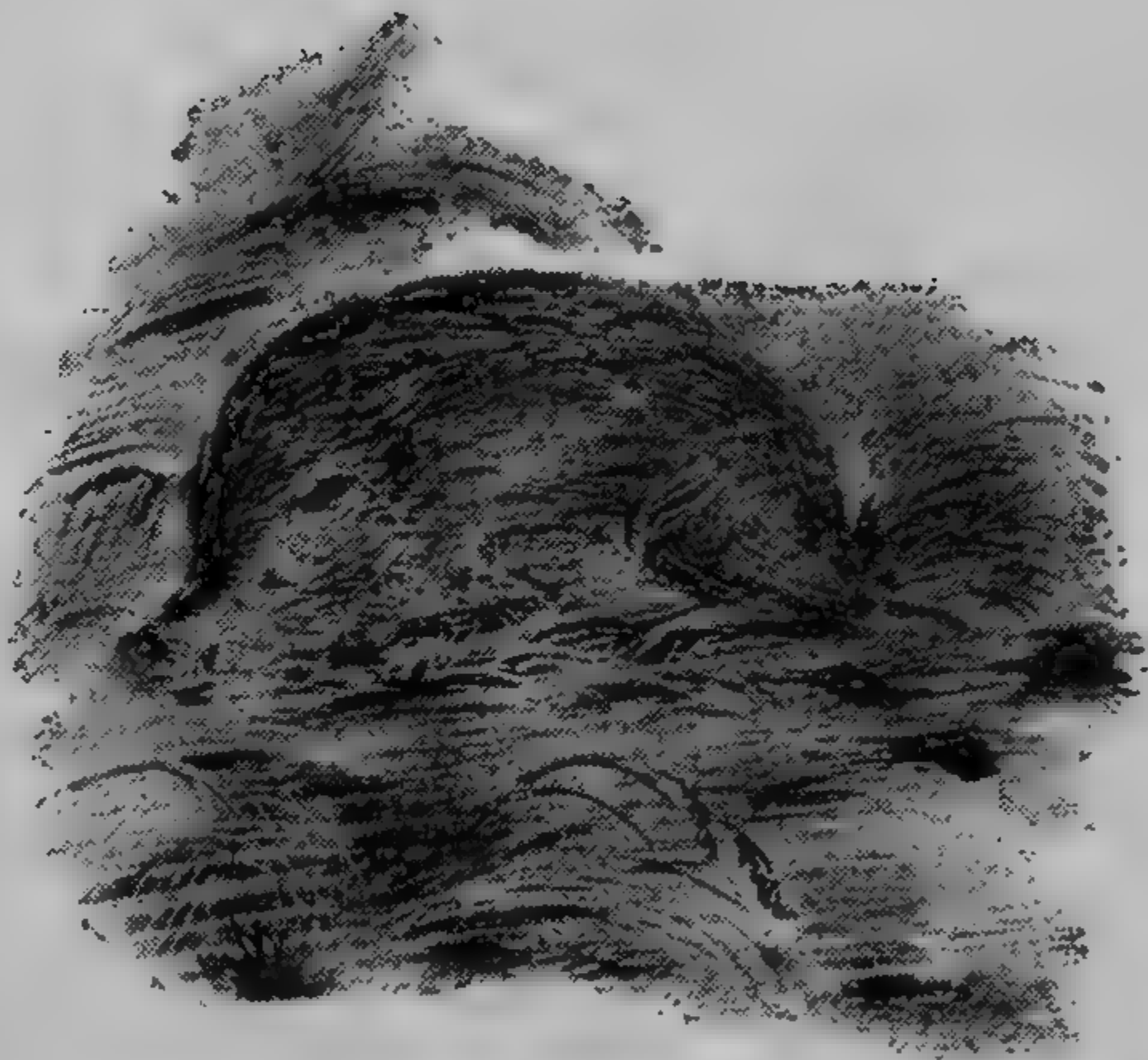
9

のがあつた。わが家の裏手の杉木立へ入れば、一丈もある齒朶の茂みが續いて、筧の徑に覆ひかゝつた奇怪な恰好の杉の古木には、毎年木鼠が巣喰づたのでも想像される。前の畑の畔には、夕方になると畑中を一面に影にするやうな榎の大木がそゝり立つてゐた。屋敷內にあつた櫸の大木の根際は、近づく事も出來ない程、蔓草類が絡み合つてゐた。さうしてその櫸の枝が、表の庭に迄覆ひかゝつた處は、その木一本でも充分山村の風趣があつた。これ等は私の家だけの事であるが、村全體を見渡しても、ほんとに山を分けてわずかに家が在つた感が深かつたのである。

猪が好んで出た山田の畔續きの草場や柴山には、きまつて合歡木が繁らせてあつてそれが何れも古木になつてゐた。夏分など濃い綠の草生の中から、白い木肌が立並んで、あの紅色の美しい花の咲く頃などは、山の美しさばかりでなく果しない山の奥深さがあつた。草場へ合歡木を立てる事は、草の爲に宜いと言傳へてゐたのであつたが、このごろではそんな事を信じる者はもう無かつた。何でも陽蔭を厭うて、蔭を作

11

10

12

るものは片端から伐つてしまつた。

齒朶の茂みは下刈りの度に淺くなり、萱場や藪叢は切開いて、猪の立寄る蔭も殆ど無かつたのである。況して昔は同じやうに出沒した鹿や山犬は、夙くに姿を匿してしまつて、夜でも汽車の笛を聞くやうな處へ、出て來る猪の氣心が知れなかつたのである。

猪嚇しの案山子にしても、之を追ふ方法にしても、あまりに雜然とした如何にも心無い遣方であつたが、實はもう居なくなる筈なのに、未だか未だかで、一日延しに日を送つてゐたせいもあつた。

別に說を爲す者は、奧地の御料林等が伐採される度に、其處を追はれた猪が、迷ひ出るのだとも謂うた。或はその邊の消息は事實であつたかも知れぬ。現に鳳來寺御料林が拂下げになつた年には、附近の村へ夥しい猪が出たさうである。

七　猪除けのお守

或る雨のそぼ降る晩であつたと言ふ。猪の番小屋のすぐ傍で、何やらボツリと變な音を聞いて、ふしぎに思つてそつと蓙莚の外を覗くと、畔に沿つた井溝の傍らに、何やら眞黒い怪物が昵と立つてゐる。初めは狩人でもあるかと思つたが、よくよく星空に透して見ると、それはまぎれもない一頭の大猪であつた。

如何に番をしてゐても、ちよつとの間でも油斷をすれば、もう猪が出て來たのである。

或家では人手が尠い爲に、夜通しカンテラを田圃の中に點して置いたが、皮肉にも猪はその廻りを選んで喰つて通つた。處がその隣りの田では、作主が忙しいまゝに、最早どうでもなれとて、幾日も構はずに放つて置いたが、それには一向寄付きもしなかつたと謂ふ。そんなこんなから、不運の者に限つて荒されるなどとも信じられた。

さうかと思ふと、たゞの一晩、風邪氣で番小屋泊りを休んだ處が、その夜に限つてひどく稻を喰はれたといふのもあつた。かうなると、屋敷に棲む鼠か猫などのやうに、そつと物蔭に立つて、此方の内證話や樣子を窺つてでもゐるやうに思へたのである。「あの人も運が惡いのん」などと、折角の稻を猪に喰はれた作主を、女達が同情して囁き合ふのを、小耳に挿んだ事もあつた。

今は昔話になつた遠江の山住さんの猪除けの御守札を、一人が思ひ出して迎へて來ると、初めの間は嘲つて見ても、何となしに不安になつて、吾も吾もと勸請に出かけて、田といふ田の畔毎にそれを立てた。

山住さんは山犬を祀ると信じられ、遠江周智郡奥山村に鎭座する神であつた。その山住さんの白いお札が矢串に挿されて、刈取りを終つた後の田に、畔から畔へ夥しく立つてゐた。或男はお迎へに出向いた時、此お札を立てれば果して猪が出ぬかと駄目を押したところ、お札で心許無くばあらはなお姿をお貸し申さうかと、取次の男に嚇

されて、いやそれには及びませぬと、早々に還つて來たといふ話もあつた。然し奇妙に其年一年だけは、猪が出なかつたさうである。さうは言ふものの、次の年は誰一人も勸請に行つた者は無かつたと言ふから、村の人々の心持も、猪以上に判らない。

山住さんのお姿を借りて來れば、猪でも鹿でも田へ近づく物は片端から喰殺して、其場へ轉してあるとも謂うた。又其期間中は、田圃近くの草の葉蔭や石の上に、見えるともなく凄いお姿が何かの拍子に顯はれるとも謂ふ。近頃村の空寺へ住持になつて來た山住一派の坊さんは、疑ふなら、喰殺させてお目にかけやうかと、恐ろしい事を言つたさうである。

私も一度、その坊さんを訪ねて見た事があるが、生憎不在で會へなかつた。それで留守居の婆さんにいろいろ訊いて還るほか無かつたが、須彌壇の本尊と並んで、榊を立て注縄を張り、白い幕が下つて山住さんが祀つてあつた。中に五寸許りの眞黒い箱があつて、それにお姿が納めてあるとの話で、たしか箱の表に右の字が一字記してあつた。

中が拜見したいと圖々しく頼んで見たら、雜作は無いが後で納めるのがむつかしいから、何なら住持の居る節にしてくれと、尤もらしい言訣であつた。箱から出すと同時に荒ばれて困るのださうである。さう言ふ間にも、婆さんの陰慘な顔付と右の字を書いた箱の神秘に魅せられるやうに思つたが、後で聞いた話では、村でも心ある者は住持の遣方に迷惑してゐるとの事である。一方坊さんには、山住さんがどうしても離れぬとも聞いた。その後寺の後の山へ、新しく祠を立てて祀つたとの事であるが、手近に山住の一派が來られても、猪は未だ盛に出沒するので、番小屋泊りも依然休まれぬといふ。

八　空想の猪

嘗て或る若い女房が、朝未だ仄暗い内に、村の相知の入りの山へ、刈干の草を背負

ひに行くと、行手に灰色した小豚程の獸が現はれて、前に立つて、コロコロ歩いて行く。其時獸の方では、後から人間の來る事などは、一向感付かぬ樣子であつた。女房も氣丈者で、平氣で後を隨いて、ものの三丁も行つた處で、獸は脇の草叢へ外れてしまつたさうである。家へ歸つてから其話をすると、老人からそれこそ猪だと聞かされた。それと聞いてびつくりするかと思ひの外、あんな物が猪だつたかと女は案外な顔付をして濟してゐたといふ。

話に聞いた許りでなく、あらはに田圃の稻を踏みにぢつたり、ノタを打ち、蚯蚓を掘つた跡を見せられて、その姿を想像して居た者が、一度び自然その儘の生態を見た場合には、此女房と同じ物足りなさも感じたのである。寔にあんな物が猪だつたのである。

私などの經驗から言つても、猪は恐ろしい物、强い獸と、物心つく頃から聽かされてゐたものであつた。處が或時、屋敷の奥の藪から、狩人に舁がれてゆく姿を初めて

見た時は、實の處同じ幻滅を感じたものである。それでゐながら又一方には、全然別の猪を想像してゐたのだから不思議でもある。

幼少の頃八名郡宇里の山里から來た杣が、家に幾日も泊つてゐた事がある。五十五六の極く實直らしい、話好きの男であつた。妙な事にその男の話が、何かと云へばすぐ狩りや獸の事に落ちてゆく。日數が經つて初めて判つたのだが、前身は狩人だつたのである。どうして斧(よき)を持つやうに成つたかはつひ聞く機會がなかつたが、凡そ一ヶ月程の間に、數限りなく狩りや獸の話をしてくれた。その中で今に忘れられぬ程の感動は、猪と鹿との性質の比較談であつた。山の肌などを遁げてゆく鹿を擊つ時、旨く急所に當ると、文字通り屛風を倒す如く轉がつて、何とも言はれぬ爽快であるが、猪の方だとさう簡單には參らない。如何に急所を擊たれても、決して鹿のやうな倒れ方はしなかつた。彈丸を受けてからも尙二三步肢を運んで、靜かに前屈みに突這(つくば)ひこむと言ふのである。その話を聽いて居ると、恰も身に數々の矢玉を受けた剛勇の士

の最後を見るやうで、猪の猪らしい態度が、名實共に適つた如く感じられたものであつた。

或は又恐ろしい手負猪の話もあつた。これに掛つたが最後命は無いのだと聽かされて、牙を剝いた物凄い姿を胸に描いて見た。その恐ろしい手負猪を、傍へ引寄せてから旨く引外して、後の谷へまつさか樣に、突こかしたと云ふ村の某の逸話に限りない快哉味を覺えて、何時迄も信じ且幾度か人にも語つたものであつた。

さうかと思ふと勇しく獵犬を追捲るといふ話を、恍惚として聽入つたものである。幾度聞いても厭かぬ興味を覺え、その度に空想の世界が、段々と枝を張つて伸びて行つたのである。

九　猪の跡

狩人の話では、猪は夏から秋の初めにかけて、カリに着くと謂ふ。カリは峯近い萱(かや)場や籔叢などの、稍平坦な地を撰んで作つた猪の寢床であつた。地面を長方形に穿つて、その中には落葉や枯草を敷き、上には稍丈の長い萱の類を橋渡しに覆うて置き、さうして出入りは一方の端からすると謂ふ。

カリは又山の中腹にもあつたが、窪合などの濕地は避けたのである。虻や蚊の襲來を防ぐ目的からだと謂ふたが、子も亦其處で育てたので、生れて間もない子猪が、カリの近くに蹌れて居る事がある。未だ肌に毛を生じない頃には、蚊や虻に刺殺されるのだと謂ふ。

萱場は文字通り萱立場で、屋根葺きの材料にする萱が六尺以上にも伸び密生して、足を踏入れる事も叶はぬやうな處である。

木と云つたら、栃や楢の類が疎らに立つて居る位で、殆ど他の植物は生える餘地がない。間々虎杖が混つて居た位のものである。籔叢(やぶ)は山にはよくある人間の手の未だ及ばぬ一廓で、茱萸、あけび、山葡萄、其他名も判らぬ蔓科の植物が、互ひに絡み合

つて、鬱然と塚のやうになつて、陽光も中へは碌々通さぬ程であつた。秋になるとそれ等蔓類の實が一時に色づいて、鳥の群なども自づと集つて來た。自然の惠みの豊かな處で、狸などの穴もさうした處に多い。かういふ場所がやはり猪の屈竟な隱れ場所であつた。

猪がノタ（ぬた）を打つた跡も、狩人は注意を怠らなかつた。猪のノタ場は窪合などの踏んでも直ぐ水の浸むやうな濕地で、グシャッタレといふ名があつた程、じめじめした處であつた。地形から言ふと澤谷の奥の行詰りなどに多かつた。何時であつたか村のネブップの山でそれを見た事がある。子供の頃で、判然と記憶にないが、何でも一ヶ所ひどくこね返して、田植ゑの植代を掻いた跡のやうに、上に澄んだ水が溜つて居た。その折聽いた話であつたが、猪は體の熱りを冷すために、時折遣つて來ては體を其處に漬けると云ふ。

山には又、猪がノタを打ちかけた跡と言ふのがあつた。兩方から谷が迫つた中の、僅かに徑を通じた處などで、一寸進む事も出來ぬ程に踏荒して、肢跡の一つ一つに水が溢れて居たりした。「まんだ昨夜出たばかりだに、其處いらに居るずら」などと言うた。肢跡の跡の先が尖つた物程若猪で、圓みが多い程古猪であるから、直ぐ大小の判別が出來るといふ。

或は又山の嶺などの、平坦な草刈場を畑のやうに掘返す事もあつた。蚯蚓や地蟲を搜した跡といふが、シャベルででも行つたやうに土が一塊りづつ掘返してあつた。

さうかと思ふと、木の根を掘り石を分けて、自然薯を掘つた。折角秋の頃に目標の蔓を播いて置いたのに、猪の奴に先を越されたなどと、自然薯掘りが口惜しがつた。山の栗などもさうであつた。猪の荒した後には、殆ど一つとして實のある物は殘つては居なかつた。悉く落葉を分けて搜し出してしまふ。時偶あつたと思へば、中の實だけが旨くゑぐり取つてあつた。

昔は床下の地蟲の類ひまで掘りに來たと言ふ。それで朝起きて見たら背戸口の土臺

がひどく掘返されてゐたなどと言うた。山澤に出て蟹を漁り、一方では蛇・蝮も食つたと言ふから、何でもござれ好まぬ物なしの猪であつた。

一〇　猪に遇つた話

猪が人間の近づいたのも知らずに、大鼾で寢てゐた話は、よく耳にした事である。七八年前、あけびを採りに行つて、猪に出くはしたと言ふ女から、當時の狀況を詳しく聽いた事がある。山國とは言つても、狩人以外で、生きた猪を間近に見た者は、至つて尠なかつたのである。

村のデベットーの山は、深い谷で谷の底に澤が一筋流れてゐた。その澤を跨いで繁つた藪叢の一叢に、あけびが鈴生りに下つて居たさうである。女は萱の葉を押分けて近づき、今一息であけびの下へ出られるとあせり氣味で、ひよいと脚許を見ると、一むら萱の葉が横ざまに倒れてゐるまん中に、眞黑い獸がどかりと寢て居た。はつと思つた瞬間ゴロゴロと猫のやうな鼾が聞へたさうである。一目見るなりあとはどんな恰好でどんな風に寢て居たかも一切夢中で逃げて來たといふ。

一圖にあけびの實に目を奪られて、傍へ行く迄氣がつかなかつたゞけに、その驚き方も劇しかつたのである。

それにしても、紫色に熟れ下つたあけびと、枯萱の中に眠る猪の對照は、思ひがけない一幅の繪であつた。その上にもあけびの蔓の絡んだ木の枝にいろいろの小鳥の群を配したなら、更に美しい畫面が展けた事であらう。繪にはならなかつたが、次の話も數尺の距離から猪を觀察した、耳新しい實驗談である。村の某の男であつた。鳳來寺村分垂の山中で、一人で炭を燒いて居ると、午過ぎ頃とも思ふ時分、何やら近くの齒朶を踏みしだいて山を降つて來る物がある。木間からそつと透して見ると、今しも一頭の巨猪が、靜かに炭竈の方へ近づきつゝある。突差の事で、逃げる間も隱れる隙も無い。飛掛つたらそれ迄のこと力の限り撲たうと肚を据ゑて、炭木をかたく握つて

身構へして居たさうである。然し猪は男を見ても格別驚いた様子もなく、靜かに岩窟の脇を通り抜けて、下へ向けて降つて行つた。事實は只之だけであるが、其の說明に據るとその猪は劫を經た恐ろしい古猪であつた。毛並は灰ぼ色といふよりも殆ど白くなつて、背から胸へかけて、松脂でも塗つて居るのか、宛然岩でも被つたやうであつたと言ふ。この話はどうやら講談に出て來る狒々のやうで、遽に信じ難い節もあるが、實驗者はかたく信じて疑はうとしなかつた。尤も猪が松脂を塗る話は他にも聞いた事がある。しかも此話には、その猪を只物でなくするに充分な傍證も絡んで居た。數日前から其方此方の山で、幾組もの狩人を惱まして、彈丸(たま)も三つ四つ喰つて居る筈なのに、どうしても捕へる事の出來ぬ出沒自在の古猪があつたが、多くの點がそれに符合して居たのである。

その後その猪は如何にしたか消息は遂に聞かなかつたが、恐らく擊たれたにしても、只の殺され方はしなかつたであらう。一方話の方は、實驗者が平素無口な實直者

だつた丈に、其儘に信じられて、次第に松脂のやうな箔を附けて、永く語り傳へられる事であらう。

山深い土地に住んで、猪とは絕えず交涉を有つた人達でも、冷靜な態度でその生態を觀察して居た者は至つて尠なかつた。自然のまゝの生態には、舁がれて行く骸などとは異つて、一種の威嚴と言ふのか兎に角犯し難い何物かを備へて居たことは事實である。多くの場合見た目以上に、語らうとした點も亦あつた。そんな事から獲物として以外に考へぬ筈の狩人の多くが、既にその傾向を多分に持つてゐたのである。

一二　猪狩りの笑話

之も私の知つてゐる一人であるが、初めて猪狩りの勢子になつた時、猪が恐ろしくて大縮尻をやつた話を何遍となく語つて聞かせた男がある。

話の筋はかうであつた。狩場に着いて只一人になると、猪が吾が方へばかり來るや

うに思へて不安でならない。總ての事に隣の藪でドンと一發筒音が響いて、ホーッと相圖の矢聲が聞えて來た。それを聞くと遽かに恐ろしくなつて、夢中で傍の栗の木へ駈け上るなり、今か今かと下ばかり覗いて居た。もう猪を撃たうなどの氣持は、とつくに何處かへ飛んでしまつたのである。

　すると、又もや近くで一發筒音がして、それと同時にすぐ後ろの叢(くさむら)からドサドサとえらい地響を立てゝ何やら躍り出したものがある。豫期しない場所に豫期しない事だけにびつくり飛上つた拍子に足を踏外して、根元へしたゝかに尻を打付けた。その瞬間だつたさうである。一方を追はれた猪が落延びて來て、男を尻目に掛け悠々と嶺(つるね)へ向けて走り去つた。段々と考へると、初め地響を立てゝ躍出したのは、實は其處に眠つてゐた子猪たちが、筒音に驚いて遁げ出したものであつた。お蔭で腰骨を打つた上仲間には笑はれたり怒られたりして、猪追ひにはもう懲々したといふのである。

　自慢話などゝ異つて、當の本人の失敗談だけに、聽く者の興味は深かつたが、實は同じ類の話を、他でも聞いた事がある。或は臆病者に附いて廻つた笑話の一つであつたかも知れない。私が初めて聽いた時の記憶では、未だ年が行かなかつた爲か、充分可笑味がのみこめなくて、反つて、傍に居た大供逹が、ゲラゲラ笑つて居たものである。

　男の名は鈴木戸作と言うて、本業は木挽であつた。元來話好きの男で、話の種を不思議な程澤山持つて居た。私の家で普請の時には、前後百日餘りも泊つて居たが、その間、いくらでも新しい話を供給してくれた。此話などもその中の一つで、面白可笑しく聽かせてくれたものであつた。

　男も好し腕もよし、その上愛想がよくてどうした因果で木挽が罷められぬだろなどゝ、自分から言うて居た程で、その頃もう四十五六であつたが、女房も持たず、近間の村から村を渡り歩いて居た。よくよくの呑氣者さなどゝ、蔭で笑つて居た者もあつた。又戸作の噓話かなどと、頭から貶してかゝる者もあつた。仕事を頼み度いにも、

何處に居るか判らぬなどと言うた程で、定まつた家とても無かつた。其頃私の家に古い三世相の本があつて、身の上を判斷してやると喜んで聞いて居た。數年前郷里へ歸つた時、何年振りかで途中で遇つたら、叮嚀な挨拶をして、貴方がいつぞや五十六になれば身が固まると言うて下すつたが、お陰で家を持ちましたと言はれて、聊か面喰つた事があつた。

極く呑氣さうに見へたが、身の上を聞くとさうでもなかつた。何でも親がひどく年老つてから出來た子供で、兄弟達から邪魔者にされ通して育つた。父親も他の兄弟達の手前家に置く訣に行かないので、七つか八つの時分に親類へ預けられ、そこで子守をさせられながら育つたと言ふ。ほんに俺程苦勞をした者は無からうと、案外な話を聞かされた事もあつた。

餘計な話が長くなつたが、前言つたやうな滑稽は、何も戶作の縮尻話ばかりではなかつた。實は多くの狩人に共通の經驗であつたかと思ふ。或村の物持の主人が猪狩りに興味を持つて、一遍やつて見たくて堪らず、わざわざ眞白い鹿皮の裁附を慥へて、凜々しい狩裝束に裝うて見ても、いざとなるといつも尻込みして遂ひ只の一回も現場を踏まずに終つた。この話なども對手が素人で物持の主人であるだけ、一段と興味を唆るものがあつた。

一二　昔の狩人

猪の話に直接關係は無いが、狩人の話の序に、珍らしくもない、昔話を一つ附加へる。或時、或處で一人者の狩人が、夜業に爐邊で翌日使ふ鐵砲丸を、茶釜の蓋でせつせと丸めて居た。すると向ひの爐緣に飼猫がちやんと座つて、昵と手附きを見入つて居る。丸が一つ出來上つて脇に置く度、前肢を上げて耳の後から前へ一回越させる。

翌朝狩人は早く起きて、狩りに行かうとして爐の茶釜の下を焚きつけたが、不思議な事に前夜使つた筈の茶釜の蓋がどうしても見付からない。然も其朝に限つて飼猫の

姿が見えなかつた。狩人はそのまゝ仕度をして未だ暗い内に家を出た。段々山へは入つて行くと、行手の岩の上にある松の大木から、何やら怪しい光物がするので、早速丸込めして狙ひ定めて放したが、一向に手應へが無い。

次から次へいくら撃つても手應へがなくて、たうとう有りつたけの丸を使ひ果し、最後の一發も放してしまつた。すると其時初めて何やらチャリンと金物の落ちる音がした。處が怪しい光物は未だするので、別に取つて置きの丸を込めて撃つと、今度は確かに手應へがあつた。近づいて見ると、一頭の猫が頭を撃抜かれて斃れてゐる。よく檢べると、それは朝方姿の見えなかつた飼猫であつた。然も傍には失つた茶釜の蓋が轉がつて居た。猫は茶釜の蓋で、前夜作られた丸の數だけ防いだが、取つておきの丸を知らずに蓋を捨てた處を、狩人は別の丸で撃つたのである。その丸は黄金であつて、その偉力で妖怪を亡ぼしたのだと說明する向きもあるが、要するに員數外の丸に意味があつたらしい。

實は何でもない化猫の話であるが、只私が此話に興味を持つのは、話の中にもある通り、私などの記憶にある頃にも、狩人の中には、茶釜の蓋で、鐵砲丸を拵へて居た者が未だあつた。木型に流しこんだ鉛を短く切つて、それを木の根株などで拵へた頑丈な臺の上にならべ、茶釜の蓋で壓へながら、ゴロゴロ丸藥でも作るやうにやつて居たものである。近くの家の主人が時折さうして造つてゐた。元込みの舊式な火繩銃を持つて居た。家が代々からの狩人で、若い頃には背戸の山で猪を擊つた事もあつたと言ふ。私などの知つてゐる頃は滅多に狩りに出るやうな事は無かつたが、只鑑札だけは毎年受けてゐたやうである。平素は農業熱心で、遊ぶ事が何より嫌ひだと噂された程の男であつたが、どうかすると、ぶらりと鐵砲を舁いで山へ出掛けたのである。さうして一日山を歩いて來ると、何となく氣が樂になると語つてゐた。

此男などの服裝が、やはり昔の狩人そのままであつた。鹿皮の裁附を穿き背に木綿のイヂコ袋を負ひ、腰には昔風の山刀を帶んで居た。遉がにもう藁の舟底などは被ら

なかつたが、常に火縄は手離さなかつた。

　専門に狩りをする者は、何れかといふと服装なども、段々新しくなる傾向があつたが、年に一度か二度しか出ぬやうな者が、反つて昔のまゝの物の具をそつくり使つて居たのである。實は狩りとは言ひ條氣晴しに行つたのだから、道具など何でも構はなかつたのであるが、さうした事から古俗が保存された事も興味ふかい。

　私の家などにも、火縄銃が一挺あつて、別に粗末な鞘に納めた山刀も一振あつた。やはり祖父の代迄は、時として氣晴しに山へ行く事もあつたさうである。

一三　山の神と狩人

　狩人が猪を撃つた時は、其場で頸の怒毛(いかりげ)を拔いて山の神に捧げるのが、古くからの作法であつた。その方法は先づ手頃の木を切つて皮を剝ぎ、尖を割つて串を作り、それに毛を挿んで此處と思ふ位置に立てるのである。別に其場で臓腑を拔いて祀る事もあつたが、猪の場合はもう稀であつた。(詳しくは鹿の項に讓る)その折の唱へ言なども、多くの狩人が忘れてゐた。唯實直な狩人の中には、人に物言ふ如くに、よう猪をお授け下された、と唱へる者もあつたと言ふ。

　山の神を祀る事は、狩りの前にも屢々行つた。幾日山を歩いても、更に獲物に遭遇せぬ時は、一旦家に還つて、出直したのである。さうして山口に地を選んで、手近の常綠樹(あをき)の小枝を二三折敷いて、其上に酒を灌ぎかけて祭つた。「山の神樣猪をシナシて下され」と唱へたと言ふが、之は何も猪狩りに限つた作法とは限らなかつた。シナシて下されは狩言葉で、獲物に巡り合せ給への意であつた。或は又獲物を目前に見て祭る事もあつた。多くは巨大な古猪などの場合で、首尾の懸念される折であつた。方法も前と大して變りなく、一同殘りの酒を汲交して出掛けたのである。

　山の神は女性であるとは、專ら言傳へられた事で、山の木の葉一枚も惜まれると謂うたが、或は一目一本脚の巨漢(おほをとこ)であるとも謂うた。鳳來寺の山中で之に遭遇した者が

あつたと聞いたが、久しい前で、然も詳しい事は傳はらない。さうかと思ふと、同じ山中で永年狩りを渡世にして居た丸山某は、四里四方に亙ると言ふ森林中を殆ど到らぬ隈なく跋渉して、人跡稀な山中に夜を明した事も幾度か測り知れぬが、たゞの一度も遭遇した事がないから、昔の人の嘘だと斷言した。しかし獲物を取匿される事だけはあつたと言ふ。何物の所爲か判らぬが、確かに斃したにも拘らず、谷を渡つて近づいて見ると、もう影も形も見えぬ事があつた。

中には程經てから山犬などに荒されて居るのを見出す事もある。さうかと思ふと、幾度も搜索して、確かに無かつた筈の處に、早や半分腐つて居るのを後に發見する事もあつた。何れにしても目の迷ひなどとは信じられぬ、山の不思議はたしかにあつた。それで結局は山の神に匿されたとも言ふのである。

同じ山の西麓、玖老勢(くろぜ)村の某の狩人は、斃した猪の行衞を索めあぐんで、諦めて還りかけると、誰やら後で呼ぶ者がある。振返つて見ると、全身毛だらけの大男が立つて居た。最早遁げるに遁げられず其處に立竦んで居ると、大男は靜かに傍へ寄つて何やら問ひかけた。よくよく聽いて見ると、頻りに何處の者だと訊ねてゐるのである。段々話して見ると、實は三十年前に家出した、同じ村の豆腐屋某の伜である事が判つた。どうして山で暮して居ると訊ねると、初めは木の實を拾つたり、木のあま皮を剝いで飢を凌いだが、今では何でも捕つて食ふやうになつた。さうかうする中に、何時か體中に毛が伸びてしまつたと語つたさうである。大男は別れる時、俺に遇つた事は、決して喋つて與れるなとかたく念を押した。その一部始終を其狩人が臨終の際にはじめて傍の者に語つたさうである。一方見失つた猪の行衞はどうなつたか、山の男と關係があるやうにも思はれるが、それに就いては何等傳はつて居ない。

私にその話を語つたのは、今年七十幾歳になる老媼であつた。子供の頃に母親から聽かされたさうであるが、恐ろしい事に思はれて以來誰にも語る事がなかつたといふ。

13

一四　猪買と狩人

擊取つた猪は、その場で臓腑を拔く事もやつたが、多くは池や澤のほとりへ舁ぎ出したのである。今でもはつきり目に殘つて居るが、日の暮方にがやがや話聲を前觸にして、泥まみれになつた狩人達が、屋敷の奥の窪から出て來た事がある。中には體の前半分が泥になつて、びつこを引いた者もあつた。その中に肢をしつかり棒に結へ着けられて、逆さに吊された猪が、二人の狩人に舁がれてゐた。傍を犬たちが元氣よく走つてゆく。一匹の赤毛の犬は、牙に掛けられたのか横腹が破れて腸が少しくはみ出して居た。そら猪が通ると言うて、吾勝ちに駈出して見たものである。

猪の臓腑を拔いて、猪買ひの來る迄川水に浸けて置く場所があつた。其處を猪漬てと謂うた。村の籔下と言ふ家は、代々狩人で、窪合の日も碌々射さぬやうな屋敷であつたが、よく狩人たちが集つてゐた。入口に太い柿の木が幾株もあつて、その下を小

川が流れて、其處が猪漬てになつてゐた。私が子供の頃はもう名稱だけであつた。兩側を石垣で圍んだちよつとした淵で、蒼く澄んだ水の底に、鰭の紅い鮠が幾つか泳いで居た。以前は日が暮れてから、毎日のやうに松明を點して狩人たちが立騷いでゐたものであつたといふ。次の話はもう五十年も前であるが、暮方多勢の狩人が集つて臓腑を拔いて居ると、犬たちが向ふ岸から、頻りに鼻を鳴して居た。それと見た狩人の一人が、ホラと言うて臓腑の一片を其處に投げてやつた。と、その瞬間であつた。何時何處から來て居たのか、傍の柿の枝から鷹が翔ひ下つて、アッといふ間に宙に攫つて行つた。これには居合せた一同も呆れたといふ。かうした光景なども、獸がゐなくなつた今日では、もう想像も能はぬことである。

その頃は冬になると、何時行つても、猪の二つ三つは漬けてあつた。或時村の某の狩人が、珍らしい巨猪を擊つて、臓腑拔き三十五貫もあるのを其處に漬けて置いた。それを新城の町から來た猪買ひが、えらい事をやつたのうと言ひながら、岸に蹲んで

指頭で突ついて見て居た。その中後肢を摑んだと思ふと、片手でずるずると譯も無く水から提出した時は、居合した狩人も魂消たと言ふ。それは金槌と言ふ力士上りの男で、江戸の本場所で三段目迄取上げた事のある力持で評判の男であつた。

その頃は、捕つた猪は其のまゝ賣つてしまつて、肉を食つたり切賣りにするやうな事は無い。さうして獲物のあつた夜は、山の神祭りをやるが、之を日待といつて、臓腑を煮て喰つたのである。肉を喰ふ時には、諏訪神社から迎へて來た箸を使ふ。諏訪神社の箸を使へば穢れがないと謂ふのである。前に言うた猪濱ての傍の屋敷は、狩人の先達とかで仲間がよく集つて日待を行つたものである。そんな訣からして、何彼と人出入が多くて、何時行つても、一人や二人は乾度遊んで居たものである。

猪の臓腑を拔く時、第一に目指すのは、その膽であつた。猪の膽と言うて、萬病に靈驗ありと信じられた。村でも物持と言はれる程の家には必ず購つて貯へてあつた。亦狩人自身も貯へて居た。糸で結へて陰乾しにして置いて、必要に應じて小刻みに刻

んで用ゐたのである。然し多くは肉と一緒に、猪買ひの手に購はれて行つた。それで時とすると肉全部よりも一個の膽の方が高く賣れたさうである。明治になつた後でも膽が一個七十五錢であるのに、肝心の猪の價は二十五錢位の事もあつたと言ふ。

これは珍らしいと言はれるやうな大猪の膽であれば、物持へでも持込んで、米の三俵や五俵に代へるのは造作も無かつたと、狩人の一人は語つてゐた。今考へると、嘘のやうな話である。

一五　猪の膽

之も猪の膽の話でつひ近頃の事である。水力發電所の用水路へ、開設初めの年に、猪が幾頭も陷込んだ事があつた。朝になつて水門口に掛つて居るのを番人が發見したのである。陷ちた猪は所員達が役得として肉を喰つたり人に遣つたりしたが、その中に一人土地出身の者が居た。

勿論肉の分前にも與つたが、竊かに膽を取つて、他の連中が知らぬ儘に、これだけは一人占めにした。社宅の縁側の庇に吊して置いて、子供が腹が痛むなどと言ふと、少しづゝ刻んで呑ませてゐた。その爲か、他の連中が揃つて下痢をやつた際も、此一軒だけは醫者にも掛ることなく濟ましてゐた。或時所員の一人が其家へ遊びに來て、座敷に寢轉んで世間話をしてゐた。仰向いて居る間に、見るともなく庇に吊した黒い乾干びた物を見つけた。これは全體何だと言ふやうな事から、家人もやむなく事情を語ると、始終を聞いてひどく口惜しがつたさうである。

萬病の靈藥と言ふものの、實際に効驗があるのは、腹痛位であるとも謂ふ。今から考へると、明治三十六七年頃迄は、猪の膽に對する一般の信望が、近在の醫者殿などより遙かに上であつた。急病人がある折など、第一ばんに猪の膽を與へたか否かを確めた位で、之を與へても題の表はれぬ場合は、よくよくの重病か不運として諦めたのである。

之も猪の膽の効驗譚であるが、或時茸の毒に中てられた男が、座敷中を轉がつて苦しがつた末に、ヤつと落ついたと思つたら、今度は堅く齒を喰ひしばつて、そのまゝ應答も無くなつた。其處へヤつと猪の膽が屆いたのに、早速釘拔の柄で齒をこじ開けて、水に浮かせた蒼黒い塊を注ぎ込むと、忽ち正氣附いたと謂ふ。或は亦二日二晩苦しみ通した病人が、ひどい熱で、どうやら朝までは危ないと、遽かに夜更けに身寄りの者へ飛脚を出す騒ぎになつた。ところがほんの一足違ひに、猪の膽を持つて馳付けた者があつた。それで大急ぎで呑ませると、飛脚の來が村端れの峠へ、ヤつと差掛つたかどうかと思ふ時分に、もうおそろしい迄の通じがあつて、其儘けろりとしたといふ。もう飛脚の要もあるまいと、慌てゝ喚返すための又飛脚を出す騒ぎであつた。さうして夜の白々明けには、それ等の飛脚衆が笑ひながら還つて來たと謂ふ話もある。

山國のことで、猪の膽など如何程でも手に入りさうに思はれるが、以前の村の生活では、必ずしもさう簡單には運ばない。そこに靈藥の尊さがあつた。そんな訣で平常

から貯へて置くなどは、物持と謂はれる人たちでもない限り、叶はぬものとされてゐた。私の知つて居る或女は、深夜に狩人の家を叩き起して、僅かばかり紙にひねつて渡されたのを、しつかり掌の内に握り締めて、山路二十町を一飛びに飛んで還つたものであつたが、その時程心強い事はなかつたといふ。恰度五月田植ゑの最中で、明日はいよいよ植代を掻くといふその晩方から、遽かに亭主が腹を病み出してえらい苦しみやうである。それを一心に介抱しながらも、一方の田植ゑも氣がかりで、兎や角と仕事の手順を考へて見た。萬一このまゝで明日植代が掻けぬとなると、後の手順が全く狂つて、近所隣りの見舞ひもうけねばならぬ。それは辛い事だ朝迄には此人を快くせねばならぬと健氣にも覺悟を決めた。それには猪の膽の力を借りる以外に方法はないと、病人の少し落つく氣合を見てとつて、隣村の狩人の家へ走つて行つた。

さうして猪の膽を手に入れて還つて、扨病人の枕許に座つて、小皿に浮かせた黑い小さな塊を押戴いた時の氣持は、譬へやうなくあり難かつたと言ふ。

然し後になつて、其代を拂ふには、他人に話されもせぬ程、女の身でえらい難儀をしたと語つて聞かせた。僅か七十五錢の金だつたさうであるが、それを仕拂ふのに、朝まだ他人の眠つてゐる間に、一里近くもある隣村まで背負つて行つて、一把二錢何厘に賣り賣りした薪の代を貯へて濟ませた。その間かれこれ夏中かゝつたが、男はよもやそんな苦心は知るまいと、口惜し氣味に附加へた。これなどは猪の膽をめぐるかなしい挿話の一つである。

一六　手負ひ猪に追はれて

何というても猪の話では、猪狩りの逸話が最も華やかであり爽快でもあつた。舊幕府時代から鳳來寺三禰宜の一人として、山麓の門谷の舊家に生れた平澤利右衞門と云ふ男は、六十年も前に既に故人であつたが、今に噂に殘る狩好きで兼て猪狩りの名人で通つてゐる。體格も勝れ人品も備はつて、若い頃は本朝二十四孝の勝賴を見るやう

15

であつたと謂ふから、其武者振りも自づと想像される。しかも豪膽此上もなかつたと言ふから、狩人には申分のない男で、いつも下男を供に伴れて出掛ける慣ひであつたといふ。そしてまた如何な猛猪に遇つても必ず擊止めて、曾て後ろを見せた事は無かつた。ところが、此の主人とは逆にお伴の下男の方は、お定りのひどい腰拔男であつた。いつも狩りの供と聞くと、亦今日もかと言うては零すのが癖であつた。

その剛膽者で通つた主人の利右衛門が、生涯にたつた一度手負猪に追ひかけられてひどい目に遇はされた事があつた。しかも田圃へ續く柴山を、轉がるやうにして遁げたと云ふのだから、正に一生の不覺であつた。その話といふのは門谷の高德の山の出來事であつた。一頭の巨猪を擊損じて、その猪が手負ひになつて、凄い勢ひで追ひかかつて來た。それと見た下男は逸早く逃げて無事であつたが、一方主人は柴山から、田の脇の路を一散に走つて遁げた。手負猪はそれを何處迄もと追かかつて、正に背中へ牙が及ばうとまで迫つた時、恰も目の前に、根元に馬頭觀音の石像を祀つた四手の

16

17

大木が立つて居たのに身を交し、やつと根元を廻つて牙を避けた。さうして遁げるのを猪は何もと追掛る。かうして人と猪とが大木をくるくる獨樂のやうに廻つて、つひに七廻り迄廻つて遁げたと云ふから、隨分劇しい働きであつた。その中利右衛門は何時どうして火繩の手捌きをやつたものか、物の見事に後から一發、流石の巨猪を斃した。後から一發はその際ちと訝しいが、實は劇しく廻つて遁げる間に、人の方が猪を追かけるやうな態勢になつたと言ふのである。之はどうやら爽快の域を通り越して、話になつたのは惜しくもあるが、實はその働振りを、下男が遠くから見物して居たのださうである。

利右衛門は家柄もよく身分も亦人に崇められる禰宜殿であつたが、生來の殺生好で、夏分は毎晩のやうに、下男を伴れて川へ網打ちに行くのが仕事であつたと言ふ。自分の村には網を入れる程の川が無いので、山路一里半も越えて、狹峽川へ出かけたのである。

この網打ちにも豪膽を物語る逸話があつた。それは或晩の事横山の寄木の淵にかゝると、岩の間に溺死人が引掛つて居るのを知らずに踏付けた。しかし、格別驚いた様子もなく「何だ溺死人か」と一言つぶやきながら二度迄胴中を踏んで見て、その儘川を降つて常に變らず網を入れたといふ。

現在生殘つて居る老人連の話に據ると、年をとるに從つて、狩りの自信ばかりが强くて困つたと言ふ。他人が折角擊つた物迄、獲物と見れば、何でも俺が擊つたものだと、言張つて仕様がなかつたさうである。筒音を聞くと定つて出かけて來て、俺が擊つて置いたが、よく運んでくれたなどと、呆けるのか、眞にさう思ひ込んで居るのか、無態な事を言出して始末に負へなかつた。對手が對手だけに、泣き出しさうになつた狩人もあつた。その頃は、髯も髮も眞白い凄いやうな老人ぶりであつたさうである。かうした比類ない豪膽な狩人のあつた一方には、常に他人の笑ひ話の種になる程、意氣地のない狩人もあつた。

これも鳳來寺村玖老勢の話であるが、遠山某と言ふ代官上りの男は、大建の山で手負猪に掛けられて、臀の肉をひどく喰はれて、半死半生の目に遇ひ、それが因で遂に命をも縮めたと言ふ。猪が人間を喰つた話は信じられぬから、畢竟嚙まれたとか、牙にかけられた類の話を誤り傳へたものと思はれる。明治初年の事で、平素から村の者に餘り好感を持たれない男だつたゞけに、殊更興味深く笑話の種にされたのは氣の毒でもあつた。

一七 代々の猪擊ち

人品骨柄は或はどうであつたか知らぬが、伊那街道と鳳來寺道の追分に、澤潟屋の名で代々旅人宿を營んで居た某の男なども、猪擊ちにかけては、前の平澤禰宜に勝るとも劣らぬ剛の者であつた。四手の大木を七廻りしたなどの、華やかな逸話こそ無かつたが、近郷に響りひびいた猪擊ちの名うてであつた。臂力は飽く迄强く、剛情一天

限りの我武者羅漢で、鐵砲は敢て上手と言ふ程でないが、狩場に臨んでも好んで難場に當る。何でも人並以上の事を爲ないでは物足りぬ性分であつたといふ。それで時折思ひ出して農作の手傳ひなどをしても、力があり餘つて、道具なども叩き毀す方が多かつた。

先代は更に輪を掛けた我武者羅だつたさうである。冬の夜など屋敷近くで山犬が吠えたりすると、如何な深夜でもむつくり起き、厩の馬栓棒を把つて、暗がりを追ひかけて出る程の無法者であつた。其もその血を享けただけに、物に畏れる等の氣持は微塵も無かつた。手負猪を谷底へ突飛ばして殺した話もある程だから、自づと懼憚される程で、當時を知つて居る者は悉くさう言うてゐる。

村の宮淵の橋普請の折、二丈幾尺の巨大な橋桁が崖に落ちかゝつて、危ない危ないと多勢の村人が立騒ぐのを尻目にかけて、唯一人で鳶口を一つ打込んで、俺一人で支へて居るから、者共全部下へ廻つて足場を組めと頑張つた事もあつた。其時ばかりは馬鹿とも無法者とも言ひやうはなかつた。然も近郷の狩人達が、手剛い猪に出遇うた度に、酒を買つて山の神を祀る一方、必ず此男の許へ加勢を頼みに往つたと言ふから必ずしも話しだけの猛者ではなかつたのである。亡くなつたのは未だ昔でもない明治初年で、働き盛りの三十幾つであつた。山が生んだ最後の人とでも言ふやうな、特異な性格が禍ひしてか、晩年の家庭生活は悲慘であつた。ふとした氣紛れから、子供迄あつた女房を去らせて、どこやらの町から酌婦の女を身請して連れて來たが、それが又無類の惡女だつたさうである。毎日酒を煽つて寢て居る事と、子供を折檻する外には能がなかつた。然も後には明日の命も知れぬ重態の夫を、家財も悉く賣拂つた空屋同然の家に殘し、何處ともなく姿を晦ましてしまつた。其時ばかりは遉が剛情我慢な男も、口惜し涙を流して過ちを悔いたと言ふ。

二人の男子があつて、何れも父の血を繼いだものか、腕力は恐ろしく強かつた。只幼い頃からひどい艱難の中に育つた所爲か、父親には似もつかず背丈は子供のやうに

小柄であつた。兄の方は先祖の後を繼いで、以前の屋敷跡に、名ばかりの家を構へて居たが、弟は物心つく頃から、村の寺へ弟子に遣られたさうである。その間に何かの事から生みの親の居所を耳にして、僅か數へ年の十二だつたと言ふが、沙彌の着る衣一枚着たまま寺を脱け出して、何處をどう聞いて行つたか、三河から甲斐の鰍澤へ、母を慕つて行つたといふ悲しい話もある。

これが猪狩りの名うての家の末路と思ふと哀れにも悲しい。今ではもう夢のやうな昔語りになつて、家を繼いだ兄ももはや頭に霜を戴く年配に達してゐる。さうして私の知る限りでは、今に昔ながらの狩人の持つ山刀を一振り、貧しいながら持傳へて居る。

一八　不思議な狩人

山で狩りなどして居た者の中には、平地の人々が想像も及ばぬやうな、異常な感覺と性質を持合せた人物がある。つひ近頃聞いた男などもその一人である。實は不獵續きに弱り込んだ村の狩人達が、何處からか聞き出して頼みこんで來たのが機縁で、評判になつたのである。年は未だ四十臺の體が小締りに締つたと言ふ外、格別變つても居なかつた。不思議な事には、その男が山へは入つたと思ふと、恰も犬ででもあるやうに、猪の居る居ないが、立所に判るのださうである。

鼻で嗅ぎ出すのだとも言うたが、話に聞いた處ではそれ許りでも無かつたやうである。さうした事に就て、某の狩人は次のやうな事を語つた。猪の後を求めて幽谷を分けて行く時など、今の先き此處を通つたといふやうな事が、ふつと胸に浮んで來る。一種の勘でそれが殆ど間違ひない。さうした官能の働きであるのか、猪の所在を知るのが驚く程的確であるといふ。

さうしてその男が山を跋渉する事の自由自在で、少しも倦む事を知らぬのには、一緒に狩りをする者が共に舌を捲いたと言ふ。心持上半身を前屈みにした中腰の構へで

頭を前に出して小股に歩いて行く様子が、何かしら尋常でない處があつた。如何な茨の下や藪叢の中でも、忽ちくゞり抜けるには、とても眞似など出來ない。犬千代と渾名があると言ふから、千代何とかの名前らしい。北設樂郡川手の出身とだけは聞いた。獸のことや獵の作法など、何から何まで氣持のよい程識つて居たさうである。お蔭で頼んだ狩人達は、思ひの外獲物があつたといふ。

生家といふのは村でも可成りな家柄ださうである。相當教育もあつて、村長位は勤るなどと言うた者もある。唯持つて生れた病と言ふのか、狩りをしたり、魚を捕る事が好きな爲に、家にも居附かれないで、方々を渡り歩いて居る。世の常の仕事は至つて嫌ひな質で、宿屋に泊つて居ても、一間に閉ぢ籠つて朝から酒ばかり飲んで居た。宿錢が溜まつた時分に、釣の道具を持つて、ふいと出て行つたと思ふと、晩方にはびつくりする程、鰻を捕つて來る。それで拂ひを濟ますと、又暫くは遊んで居る。魚に不自由な、山の中の宿屋などでは重寶がつた。只長く居つかぬので困ると言ふ。鰻などども、何處から提げて來るかと思ふ程、速く捕つて來たと言ふが、どうして捕るかなどと質問すると、ふつと無口になつて話さうともしない。鰻も鯉も餌を以て釣る事だけは確かだと言ふ。聊か信じがたい節もあるが、時とすると山には未だこんな人が居たのである。

猪とは縁がないが、以前狂言の振付をして、村から村を廻つて居た相模屋某と名乘る男なども變つた性格の持主であつた。村に地狂言が無くなつてからは、浄瑠璃を語つて村々を廻つて居た。勿論それだけでは渡世が成りかねるので、冬の間は小鳥を捕り、夏分は鰻を釣つて生活の資を獲て居た。鰻など捕る事は實に巧いもので、今日は何百目欲しいと註文すると、晩方にはきまつて、それだけの魚を提げて來たものださうである。

一九　巨猪の話

巨猪を獲た話は、かりにも狩人と名のつく程の者は定つて一つ位は有つて居た。しかもその巨きさが申し合せたやうに四十貫と言ふのも偶然であつた。猪としては、四十貫どころが或は限度であつたらしい。然もその程度の猪は珍しいとは言ひ條、未だ未だ居たらしいのである。某の狩人がさう言うて居た。或時出澤村の入りの陰山で、仲間と二人で發見した肢跡は、曾て見たこともない巨きなものであつた。こんな肢を有つ猪だつたら、牛程もあらうと語り合つて、山の神を祀るやら、應援を賴みに行くやらえらい騒ぎをやつた。さうして撃ち止めて見たら、成程巨きいには違ひないがやはり四十貫そこそこであつた。その猪は肢の跡だけが體に似合はず巨きかつたのである。數ある中にはさういふ變り種も亦あつた。撃止めたからそれだけで濟んだが、そんな猪を萬一取遁しでもしたら、それこそ七十貫や八十貫の巨猪に忽ち成つたかも知れない。捕つた猪であれば、舁いで處理した代物だけに、馬鹿馬鹿しい誇張は無かつたのである。

鳳來寺村行者越の、丸山豊作といふ狩人は、その五十幾年の狩りの生活の間に唯一人で撃ちとめた猪の數が、七百頭にも剩ると言はれた程の腕の者であつたが、四十貫を超す程の獲物は、たゞの一頭しか無かつたと語つた。然もその一頭が六十貫に餘る巨大なものであつたと言ふから、ほんととすれば先づ界限では未聞と云ふべきであつた。

それは彼これ四十年も以前の事で、細かい點は明らかに記憶が無いが、何としても稀代の逸物であつた事と、その猪を撃つ前日に、偶然山の高地から望み見た光景だけは、今もありあり目に殘つてゐるとて次のやうに附加へた。

恰度秋も末頃であつた。駒立（北設樂郡）の奥の山へ、遊牝猪を撃ちに入込んだ時であつた。嶺に立つて、遙かに前方の谷を眺めると、枯草に覆はれた山の裾が何處迄も續いてゐる。その枯草をわけて、凡そ四五十頭も居るかと思はれる猪の大群が、一頭の巨猪を先立ちにして、一齊に谷に向つて走つて行つた。不思議に思つたのは先立

ちの猪が餘りにも巨きくて、他の猪がまるで子猪のやうに見へたことである。永い狩りの生活の中でその時程の壯觀は、後にも前にも見た事がなかつたと語つてゐた。翌日あつけ無く擊止めた猪が實は前日の先立ちの猪であつたらしく、比類ない巨猪であつた。一人で黑川の村迄背負ひ出して、美濃の岩村の猪買ひに賣つたが、臓腑を拔いて五十五貫あつたと言ふ。因にこの男は異常な膂力の持主で、百貫の荷を負うて如何なる嶮岨にも堪へ得る程の者であつた。

臓腑ぬき五十五貫といふのは、類ひ無い巨猪の筈であつたが、同じ男の語る處では北設樂郡古戸の山では、七十五貫、時には九十貫の猪を擊つた事實を、話には聽いた事がある。尤も之は實際に見た訣ではないから、何とも保證は出來ぬと語つてゐた。

果してそんな巨猪が、居たかどうかは判らぬが、同じ北設樂郡內でも、段戸山や彥坊山の栂の植林地には、丈餘に伸びた萱の葉陰に、多數の猪が群れ狂うて居るのを見ると、これは山仕事に入込んだ杣や木挽の話しであつた。御料林の事で、彼處ばかりは猪も放し飼だなどと、語つてゐるのを脇から聞いた事もある。山又山を分けては入れば、さうした猪の世界もまだ遺されてゐたのである。

巨猪とは異ふが、猪の一種に、虱猪と言ふのがあつて、之は體一面に虱がたかつてゐる。種類が違ふものかどうか分らぬが、折角獲つても肉が臭くて喰べられるものでないと言ふ。果してそんな猪が居るものか、これも未だ確める機會がないが、猪に虱が附くことだけはたしかで、病ひ猪などには殊にそれが多かつたさうである。

鹿

一　淵に逃げ込んだ鹿

鹿を撃つた狩人はみんなさう言つた。鹿は如何に驀地に遁げてゆく時でも、矢聲を潤つて、ホーッと一聲矢聲を掛けると、ふつと肢を緩めて聲の方を振返ると、そこの呼吸で引金を引いたさうである。矢聲はなる可く短く歯切れのよいのを上乗とした。ポポッと投げつけるやうに掛ける程、効果があつたと言ふ。習性とすれば哀れにもいぢらしかつたが、狩人の狙ひ處にされたのは情けない。

も一つ、これも鹿に限つての習性で、狩人には都合の好い事であつた。それは一度手負ひになると、だんだん山を出て、里近い明るみへ姿を現はして來る事である。ひどい深山なら知らぬ事、私などが聞く話は悉くさうであつた。もう三十年も前になるが、舊正月二日の事ださうである。伊那街道筋の追分で、或家で朝早く起きて蔀を明

けると、其處へ上の方からばたばたと街道を驅けて來た物がある。女房がはつと思つて見返した時は、もう五六間先へ驅拔けて居たが、それは一匹の鹿で、後肢が片つ方傷ついて引摺つて居たさうである。

直ぐ後から犬や狩人が追掛けて行つた。そこには前夜降つたらしいうす霰がほんのり敷かれて、それを紅い血の滴りが何處迄も染めて居た。鹿はそこから二丁程下つた村端れのめくら淵に跳び込んで殺されたさうである。その淵は街道から覗くと、すぐ目の下に蒼く澄んで見えた。淵の主は巨きな牛だとも謂うて、晴れた日には陽光の工合で時折背中が見えると聞いた。めくら、かいくら、せとが淵と言はれた名高い淵の一つで、界隈でも傳說の淵として通つてゐた。龍宮へ續いて居るとも言はれ、昔からよく鹿の追込まれる處でもあつたさうである。

その鹿は間もなくもと來た道を舁がれて行つた。何でも朝未だ暗い内に、鳳來寺街道を五六町登つた處の分垂のキノアテで肢を擊たれて、一氣に街道を走つて來たのださうである。その時の狩人の一人の話では、三歲の雄鹿であつたと言ふ。

子供の頃、村の入りの山から追出された鹿が、畑を横ぎつて街道へ出て、船着場へ續く坂を降つて、最後に跳び込んだ場所も矢張り淵であつた。宮淵と言うて、大海村の鎭守の森が向ふ岸に繁つて居た。兩岸が高い岩に圍まれて、川幅五十間もあらうといふ物凄い場所であつた。もう二十七八年も前のことで、その頃は、そこから川下の豐橋迄七里の間船が通つたのである。手負鹿が、淵に跳び込んだ話は他にも聞いた事がある。出澤の村のフジウの峯から追出した時には、鹿が岩の上を走つて下の鵜の頸の淵へ跳び込んださうである。

亦某の狩人が、八名郡舟著村小川の、シユツケツ峯で擊つた鹿は、峯續きのカマツルを、ツンデ（嶺を後に反づた處）に向ふと思はれたのが、肢を傷ついた儘、斫り立つたやうな山の腰を轉がるやうに降つて、一氣に黃楊川の淵に跳び込んだ。

傷ついて跳び込んだのは、川沿ひの淵ばかりでは無い。山中などの用水池を目がけ

た話もある。そんな訣で私の家近くの、方が窪の小さな池にも追込んで獲つた事があると聞いた。

大海の村の山つゞきにある二ツ池は、山の窪に同じやうな池が並んで、遠くからその蒼い水が望まれるが、矢張りその池へも追込んで殺した事があつたといふ。

鹿は手負ひになると、定つて池や川を目がける。密林から里近い疎木立へ出て、畑や街道を走つたのは未だしも、あの蒼く澄んだ池や渕を目がけたのは、單に偶然ばかりでは無い、何かしらさうさせるものがあつたやうに思ふ。

二　鹿の跡を尋ねて

猪と違つて鹿の方は、界隈ではもう何處の山にも姿を見せなくなつた。數年前迄は鳳來寺山にたつた一頭居ると聞いてゐたが、それも誰かが獲つてしまつて、よくよく

居なくなつたとは、狩人たちが一様に語る處である。

それ程尠くなつた鹿が、こゝ三四十年前迄は、今から思ふと嘘のやうに澤山居たのである。狩人に追はれて、人家の軒や畑を走る姿を見る事も珍しくなかつた。之は私が未だほんの頑是ない時の事だつたさうである。軒端に莚を敷いて、祖母と日向ぼつこをして居る處へ、狩人に追はれた鹿が、前の畑から屋敷へ上る坂路を駈けて來て、私の座つて居た莚の端を蹴散らして、背戸の山へ馳け抜けて去つた。頭の角をぺつたりと背に擔いで、肌に光る汗が見られる程であつた。その時アッと言つて、私を抱へる暇も無かつたと、後になつて祖母が笑つて話したものであつた。

家の縁側から見ると、南の方遙かに舟着の連山がつゞいて、雨上りの後などは紫色に煙つた山の腰に、白く瀧の落ちるのが望まれる。あそこが舟着の百俵窪で、昔から一窪で米が百俵取れると言はれてゐた。その手前の、僅かばかりの盆地に、大海だの有海だの、幾つかの部落が展けて居て、晴れた日には人家の甍から陽炎が上るのが

見える。

鐵道が通じて大海の村へ長篠驛が出來てから、やれこれ三十年になるが、それより數年前迄は驛の所在地から數町離れた墓場續きの林に、未だ鹿の居た話がある。まさか鹿はゐまいと、狩人もついうつかりして居ただけに面喰つて、とり逃してしまつたといふ。

大海の南隣、有海の篠原は、今でこそ見渡す限り桑園になつて、長篠戰記に勇名を遺した鳥居勝商が憤死の跡なども、その中に埋もれてしまつた程であるが、以前は西隣の川路の原と共に、又とない鹿の狩場であつた。どんな不猟の時でも、そこへ行けば必ず一つ二つは獲物があつたものである。其處は何れを見ても低い赤禿山のつゞきで、何處に鹿が居たかと不思議に感ずる程であるが、事實居たことは間違ひない。實はそれどころではない。そこにつゞく大蔭の谷で、山犬が子を産んだ話も、つい昨日のやうに語られてゐた。その折に赤飯を焚いて、近所の女房達に從いて、産見舞ひに

18

行つたと言ふ女が、九十幾つではあつたが未だ達者で居たのもふしぎである。それとこれ考へると、村をめぐる山の姿は私などが想像も及ばぬ程著しい變化があつたのである。

有海から東へ川を渡つた處が前に言うた舟着山で、その腰に沿うて展けた部落を一口に七村と言ふ。大平、栗衣、市川、日吉、吉川、久間、乘本と、何れも少さな部落で、山の腰に北を向いて展けて家が並んで居た。それ等は界隈から、何時も惡口の的にされた僻村だつただけに、鹿は至る處に出た。

その中でも最も山奥の、大平、栗衣などでは、狩人が鐵砲を舁いで通る姿を見ると、村の衆が出て來て慇懃にお辭儀をしてから、お狩人樣どうか鹿の奴を擊つて下されと頼んだものであると言ふ。勿論半分は惡口であつたらうが、頼まれたのも事實であつた。狩人が鹿を舁いで、お頼う申しますと云へば、何處の家でも酒一升を出すのが不文律になつてゐたといふ。これ等の部落は、何れもひどい山谷ばかりを耕しては居た

が、何れかといふと畑の尠ない田處で、然も植付けたばかりの稲を、鹿が出る度に片つ端から抜取つて喰つてしまつたのだから、さうした慣例が出來たのかもしれない。

三　引鹿の群

前に猪の話にも出た追分では、二十年前迄は座敷に座つてゐて、鹿の鳴音が聞かれた。もうその頃は、近間では何處の山にも、聞かれなくなつた後であるだけに珍らしい。街道筋でこそあるが、どちらを向いても山ばかりで、家數も五六軒しか無い淋しい村である。前を寒峽川が流れて、流れに臨んで山が押被さるやうに聳えて居た。毎年秋になると、日の暮々をはかつて、その山の峯で鹿が盛んに鳴いたのである。闇を透してキョーとあの鋭い聲音が谺すると、馴れぬ泊り客などは、飛上る程びつくりしたさうで、話以上に鋭いものであつた。鹿の鳴音の鋭く凄いことを物語る事實として

曾て段戸山の山小屋に居た杣は、山犬の聲と鹿違ひして、一晩中恐ろしさに慄へ通したといふ。最もそれは鹿が遊牝の時に限つて、稀れに唸るやうな聲をあげる、それであつたと言ふから、無理もない話である。鹿の聲は普通に鳴く場合でも、一定の距離を置かぬと、村の人々が口眞似するやうに、カンヨーと妙へなる音には響かなかつたのである。

今でこそ追分の向ひの山は、杉檜が植林されて、雜木なども從つて伸び放題であるが、以前は見渡す限りの山が、悉く近郷の刈敷場で、峯に處々形の面白い松が繁つてゐた外は、木と言うては殆ど無かつた。冬の夜はそこで山犬も亦、盛に吠えたのである。

梅雨が明けて山の緑が一段と濃くなつた頃には、朝早く其處を幾組かの引鹿が通つた。引鹿とは、夜の間里近くに出て餌をあさつたのが、夜明けと共に山奥へ引揚げるそれを謂ふのである。恰も、その頃は鹿が毛替りして、例の赤毛の美しい盛りであつ

た。それが朝露を置いた緑の草生を行くだけに、殊に目を惹いたのである。五つ六つ或は十五六頭も列をなして、山の彼方此方を引いて行く光景は、例へやうもなく見事で、中には子鹿を連れて居るのもあつた。其の子鹿の歩き振りが、まるで子馬の走るのを見るやうで可愛らしいものであつた。

或時など、次々に引いてゆく鹿を全體どれだけ居るかと、目に入るだけを數へ立てたら、四十幾つにも及んだ事がある。毎朝の事ではあつたが、門に立つて全部が引揚げる迄、眺め暮したもので、中には朝日が紅く峯を染めてから、悠々と引いて行くものもあつた。それが未だ昨日の事のやうだと、老人の一人は語つて居た。

さうかと思ふと寒中風のヒューヒュー吹捲る日に、峯から三つの猟犬に追はれて、崩れるやうに山を降つて來て、川の中へ跳び込んで、犬と鹿と四つが真黒になつて、互に縺れ合つて居た。それで後を追つて來た狩人たちも、鐵砲を向けたまゝ狙ふ事が出來なくてまごまごして居た事もあつた。その一方には未だ日のある内に、山犬に追はれて一散に岩の上を走る鹿を、畑に耕作しながら、見物した日もあつたと言ふ。

もう五十年も前になるが、牛方相手の宿をしてゐた中根某が、或日前の寒峡川の河原から、山犬が喰剩して砂原に埋めて置いた鹿を拾つて來た事がある。よい拾ひものとばかりに肉を近所隣へも振舞つて、自分も煮て喰つた處が、その晩夜更けになつてから、門口へ鹿の主の山犬が來て、恐ろしく吠立てたものである。おかしかつたのはその男が驚いてしまひ、家の中から散々佗言をする聲が、軒を隔てた隣の家迄も聞えた。某は翌朝起きると早々に鹽を桝に入れて、昨夜は辛い目に遇つたと云ひ云ひ、前の河原へ置きに行つたと言ふ。山犬の獲物を拾つて來る時は、代償に鹽を置くものとは、この地方で一般に言慣はされて居たのである。

四　鹿の角の話

私の家に、鹿の角の附根を輪切りにして、それに笹に[illegible]の形を彫刻した印籠の根附

があつた。忘れたやうな時分に、家の何處かしらに轉がつて居たものである。祖父が若い頃手細工にやつた仕業だと聞いてゐたが、何でも仕事からふいと歸つて來たと思つたのに、何處へ往つたか一向に姿が見えない、方々探すと、土間の向座敷を締切つて、その中でコツコツ何か頻りにやつて居る。その間二日か三日、ろくに飯を喰はないで、えらい骨折りであるらしかつたといふが、さうして出來たのがその根附であつた。それと今一つ、これは何でも無い只の三つ又の角があつた。何時からとは無しに背戸の庇に吊してあつた。時折笊などが引掛けてあつたが、吊紐が切れてからは、押入の隅などに放つてある中に、何時か失つてしまつた。その角は家の誰やらが、山から拾つて來たのださうである。私の家にはその他には、鹿の角のあつた事を記憶せぬが、隣家へ行くと、竈家の軒に、五本も六本も吊して、それに悉く簑や笠が掛けてあつた。

以前は何處の家でも、軒に鹿の角を吊して簑掛けにしたのである。さうかと思ふと

土間の厩の脇の小暗い處に吊して、拵へ立ての藁草履などを引掛けて置いた。眞黑に煤けた柱の脇に、枝の一つ一つに、種袋を結びつけたのもあつた。同じやうな恰好の物を兩方に下げて掛竿を渡し、それに手拭や足袋を引掛けた家もあつた。

かうした角は、何時から吊してあつたかもうみんな忘れてゐた。家が以前狩人であつた關係で持つて居たり、傳手を求めて手に入れたのもあつた。或は亦山仕事に行つて、そこから拾つて來たものもあつたのである。

或家の女房は、正月に薪を伐りに行つて、其處で拾つた事があると語つてゐた。初め木の枝に引かゝつて居るのを見附けた時は、さすがにびつくりしたさうである。どういふものかその日に限つて、體中が溶けるやうに懈るかつたなど語つた處から想像すると、鹿の角を拾ふことは、如何に深山鹿がゐた頃でも尋常事とは思はなかつたのである。亦或男は、夏の頃山へ五倍子の實を採りには入つて拾つたことがあると語つた。その折山の嶺に出て一休みしやうと、煙草に火をつけた時、その脚許に今し

がた誰かゞ置いてでも行つたやうに、三つ叉の見事な角が落ちて居たさうである。

某の男は、秋タツ茸を採りに行つて、それは寒い日陰山の雑木の下で、落葉を引掻き廻す内、何年か落葉に埋もれて、化石のやうになつたのを拾つた。それはまだ若鹿の二叉角であつたと言ふ。

かうして拾つて來た角は、何本でも軒に吊して、前言ふやうに簔掛けに使つたのである。一度吊せば吊繩の腐ちぬ限り、幾年經つても其處に下つて居た。雨の日など、外から歸るとぐつしより濡れた重い簔を、先づその角に掛けてから、さうして入口の敷居を跨いだのである。

それ等の角が、今はもう何處の家にも見當らない。角買ひに賣つたのもあつた。春秋の大掃除に外して、子供が玩具にする間に、何時か失つたのもあつた。殊に未だ角に枝の咲かない若鹿の角でも、一端に繩を通して、草履の緒立てや筵の仕上げに用ゐた物などは、つひ昨日迄土間の壁に下げてあつたやうに思ふのだが、それすらも見えなかつた。時たま鹿の角が座敷に吊してあれば、熱さましになるなどと言うて、一方の端をひどく削つてある物くらゐであつた。そんなものでもない限り、もう何處の家からも、鹿が亡びさると前後して、その角も亦姿をかくしてしまつたのである。

五　鹿皮の裁付

鹿の角が忽ち家々から姿を消したのも、實は角買ひ男が盛んに入込んで、買集めたのが抑々大きな原因であつた。

或家では、以前狩人であつた事にも依るが、主人が昔風を改め得ない性分も手傳つて、何處の家にも無くなつてから、軒や土間の隅に幾本も吊してあつた。事實さうしてあれば何彼につけて都合もよかつたのである。

それがつひ近頃になつて、角買ひが目をつけ出した。賣れ賣れと執こく言寄るのに

遂に斷り切れなくなつて、若主人が全部引外して、纏めて賣つてしまつた。家中を探し集めたら、十七八本もあつたさうである。その金を唯の貨幣として使つてしまふのも惜しいとあつて、いろいろ考へた末に、先祖代々の位牌を拵へたと言ふ。

　鹿の角が無くなつても、格別不自由はしなかつたが、只蓑などの置場が無くなつて埒もなく共處いらへ丸めたり、載せたりして、何彼ど秩序がなくなつた。かういふとも、以前にくらべて農家としては大きな生活の變化であつた。

　角と共に鹿が村へ遺して行つたと言える物に、鹿の皮の裁附があつた。一口に皮裁附と言ひ、白の鞣皮で作るのである。秋から冬にかけて村を歩くと、これを着けた男を時折見かけた。麥畑に耕作して居たり、山から薪を負つて出て來たりする。多くはその裁附と同じやうな老人であつた。この皮裁附は畑などに穿くと、雨に濡れたりして、忽ち色が惡くなるが、それを着けて晴れた日に一日山を歩いて來ると、木の枝や茨で洗濯されて、元のやうに美しく眞白になる。

　家々を尋ねて廻ると、どの家でも申合せたやうに、以前はあつたがもう無いと答へる。老人が死んでから、久しく物置に投げ込んで置く中、いつか蟲が附いて居たのに慌てゝ谷へ捨てたのもあつた。襤褸と一緒に、褌手拭などに賣つたのもあつた。女達が少しづゝ剪つて、針止めや針山を作り作りする中、紐ばかりになつたのもあつた。よくよく丹念な心掛けの皆い家庭か、老人でもある家の外は無くなつてしまつたのである。律義者で通つた某の老人は、親類への年始廻りには、必ず着けたものと言ふが今の若い人達には、その恰好から餘り好かれなかつたのである。

　以前は裁附屋と言ふ專門の職人が、時折村に廻つて來た事もあつたが、多くは大鹿を獲つた度に、狩人自身が拵へたのである。昔から裁附は、大鹿の皮二頭分が要ると言はれてゐる。前に言うた鳳來寺三禰宜の一人だつた平澤某は、之を作るに妙を得て居たとかで、方々から頼まれたものと言ふが、その裁附を未だ大切に藏つてある家もある。

いろいろの話を綜合して、鹿皮の裁附がこの地方の狩人に流行しはじめたのは、餘り古い昔では無かつたらしい。その上拵へが面倒でもあつたのか、以前は物持でもない限り、滅多に着けなかつた。山で遽かに雨に遭つた時など、狩人達が獲物に出遭つた以上に慌てゝ大急ぎで脱いで丸めたものと言ふから、よくよく貴重な狩衣であつたのである。

六　鹿の毛祀り

狩人が鹿を撃つた時は、其場で標毛を拔いて山の神を祀つた。その作法は猪狩りの際の毛祀りと殆ど變る處がない。只鹿に限つての作法として、其場で臓腑を拔いて、胃袋の傍にある何やら名も知らぬ、直徑一寸長さ五六寸の眞黒い色をした一物を、山の神への供へ物として、毛祀りと一緒に串に挿したり、或は木の枝に掛けて祀る。これをヤトウ祀りと言ふ。ヤトウは前にも言うたが、一種の串の名であつた。その眞黒

20

い物とは抑々何であつたか、狩人の悉くが名を知らぬのも不思議である。膵臟だらうと言ふ人もあるから、或はさうかも知れぬ。ずつと以前は、ヤトウ祀りといへば兩耳を切つて挾んだと言ふが、近頃ではその代りであらうか、耳の毛だけを剪つて濟ます者もあるといふ。然も後には臟腑を割く事をも略して、只毛祀りだけで濟ますやうにもなつたのである。

狩人としては、一度び傷を負はした獲物は、たとへ二日が三日を費しても、後を尋めて倦む事を知らぬのが嗜みであつた。謂はば狩人氣質で、次の話はその氣質を想はせる譚の一つである。

某の狩人は、或朝早く、出澤の村のこやん窪で、一頭の鹿を追出したといふ。その鹿は驀地に峯へ向けて遁げ去るのを、何處迄もと追縋つて、或時は山續きの谷下の村を上から下に追ひ通し、再び元の山に引返して村の東に當る藤生の峯に追ひ込み、更に峯を越してその日の午過ぎには、川を渡つて隣りの瀧川の村に出た。そこから又も

や山に追込んで、段々山深くは入り、日の暮方には瀧川から二里半山奥の、赤目立の林に追ひつめた。さうして又もや峯一ツ越えて作手の荒原村の手前の窪で、やつと仕止めたが、その間距離にして十二三里殆ど飯を食ふ暇もなく走り通しであつた。十六の年から狩りをしたが、此の時程の骨折りは先づ無かつたと言ふ。

同じ男の話であるが、或時舟著山麓の七村で、大鹿を追出した時は、その鹿が峯から谷、谷から村と終日目まぐろしい程遁げ廻るのを、何處迄もと追縋つてゆく中に、行く先々でその鹿を目がけて鐵砲を放つ者があつた。大方他の狩人達も、目がけて居るとは豫期して居たが、最後に大平の奥に追詰めて斃した時に、其處へ集つて來た狩人を數へると、何んと總勢で三十六人あつた。然もその狩人が撃つた丸は全部で十三發で、その十三發が一つ殘らず鹿の軀に中つて居たには何れも呆れ返つた。三十幾人の狩人が何の連絡もなしに、一つの鹿を一日追廻すなどと、こんな馬鹿馬鹿しい事は嘗て話にも聞いた事が無いと、みんなして大笑ひに笑つたさうである。

さうかと思ふと、狩人は一人で、獲物ばかりが多くて、弱らされた事もある。或時出澤の茨窪の人家の背戸へ一四の鹿を追込むと思ひがけなく行手の木立から、雄鹿ばかり七つ、もやもやと角を揃へて走り出したのに、狙ひつける的に迷つて、悉く逸してしまつた事があつた。その場の狩りの首尾は別として、雄鹿が七つも角を揃へて馳け出した處は、實に賑やかなもので、見た目だけでも山の豊榮であつたと言ふ。

前の話などもさうであるが、狩人たちの解釋ではかうした尋常でない出來事を、すべて山の神の手心に依るものと謂うてゐる。

七　山の不思議

山の神の手心から、獲物を匿される事は、前の猪の話にも述べた處である。ところがそれとは異つて、現在捕つて其處に置いた筈の獲物が、ちよつとの間、水を呑みに

谷へ下つたり、對手を呼びに行つた隙に、影も無くなる事があつた。四邊に人影も無い深山の中であれば、之は不思議と言ふより外なかつた。鳳來寺山中などで、時折さうした目に遇つた。山犬の所爲とも言うたが、或は山男のなす業とも信じられた。狩人はさうした時の用意に、獲物の傍を離れる時は、鐵砲と山刀を上に十字に組んで置いたのである。

鳳來寺山は、全山九十九谷と言傳へて、地續きの牧原御料林を合せて、殆ど四里四方に亙る一大密林であつた。山中の地獄谷と稱する所などは、密林中に高く瀧が落ちかかつて、はなしに聞いたかくれ里のやうな所で、風景が又なく美しかつたが、一度び奥へ入込めば、山が深くて再び還る事は叶はぬとさへ言はれてゐる。その爲一部の狩人の外は消息を知る者も無い。偶々鮎釣りには入つた者の談に依ると、思ひの外に谿川の樣が秀麗で、嘗て釣りを試みた者もあるらしいと語つてゐた。隨分久しい前の事と聞いてゐるが、八名郡能登瀬村の某家では、この牧原御料林から、不思議な裸體の青年を二人捕へて來て、農事を手傳はせてゐたといふ。力が強くて正直で主人の命令をよく守つたが、何分言葉が更に通じないのには困つた。或は山男の類ひでないかとも噂したが、それ以上詳しくは未だ聽く機會がない。

鳳來寺山から東に當つて、三輪川を隔てた八名郡山吉田村の阿寺の山に、七瀧と言ふ名所があつた。その水源を成してゐる栃の窪からはだなしの山へかけての山中は、昔から不思議の多い地域と云はれ、狩人たちが獲物を奪られる事が屢々ある。現に經驗したといふ話はもう聞かなかつたが、實はその山に住む姫女郎の仕業であると謂ふ。その一方、山の主は美しい片脚の上﨟で、紙緒の草履を穿いてゆくと、必ず片つ方を奪られると謂ふ。

人里の遠い山中にわざわざ紙緒草履を穿いて入込む者も無かつたとも思はれるが、之には別の話が絡んで居たのである。實は狩りとは何の關係も有たぬ餘計な事かも知れぬが、話の序に姫女郎の傳說の結末をつけておく。

前に言うた七瀧の近くは、土地の所謂子抱き石の産地であつた。子抱き石とは、石の中に更に別の小石を抱いたものである。子供の無い婦人が其處から一つを拾つて懐にして還れば、必ず懐姙するとの言傳へがあつた。それで女連れでわざわざ出かける者も尠なくなかつたが、その場合にやはり紙緒草履を穿いて居ると、何時の間にか片方を失ふと言ふ。現に草履を奪られて、知らぬ間に片裸足にされたといふ女もあつた。

これもすべて姫女郎の仕業であるといふのである。

八　鹿に見えた砥石

姫女郎の仕業かどうかはわからないが、鳳來寺山行者越への丸山某が、明治二十五年頃、鳳來寺の山續きの、長篠村柿平の山で、仲間二人と追出して撃つた鹿は、確かに右の後肢を傷つけたにも拘らず、鹿は後肢を引摺りながら、山から谷へ、雪の眞白に降積つた上を走つて遁げた。さうして村の卵塔場を拔けてゆく姿も明らかに見屆けた。それにも拘らず後には肢跡こそあれ一滴の血液も零れては居なかつた。

かやうな事は、脂肪の多い猪には間々ある事だが、鹿には嘗て無い不思議な現象であつた。流石に仲間の一人はそれに怖氣づいて、再び追ふ事を肯かぬので、遂ひに見遁したさうである。然しどうしても諦められず、翌日更に狩出して、こん度は見事胴中を撃つて仕止めた。さうして前日の傷口を調べると、膝の骨をひどく打碎いて居たが、更に血の流れた様子は無かつたと言ふ。

同じ男が或年の暮、八名郡七郷村名號の山で撃つた鹿は、僅か七貫目に足らぬ雌鹿であつたが、時ならぬに雪よりも白い斑が肌に現はれて居た。これも見方に依ると山のふしぎであつたが、實は何でも無い只の病ひ鹿で、夏毛のまゝ毛替りせぬ迄であると言ふ。丸山某は、近在でも名代のがむしやら者だつたのである。

之も敢て不思議でも何でも無いが、某の男が鳳來寺村の淸澤の谷で撃つた鹿は、二匹が二匹とも揃つて、見事な四つ叉の角を戴いて居た。鹿の角は一般に三つ叉を限度

としてある。形こそ變つた物はあつても、完全に四つ叉に岐れた物は、まことに珍らしかつたのである。

それと話はまるで異つて居るが、山の不思議を一段と具體化した話が、本宮山の信仰をめぐつて口碑に遺されてゐる。

本宮山は鳳來寺の西南方に當つて、豊川の西岸に聳えて居る高山である。頂上に國幣小社砥鹿神社の奧宮があつた。祭神は大己貴命であるが、別に天狗だとも謂うた。或時麓に住む狩人の一人が、鹿を追うて山中にわけ入つて、鹿は遂に見失なつたが、別に谷を隔てゝ一頭の大鹿が眠てゐる姿を見出した。

直に矢を番へて放したが更に手應へは無い。幾度くり返しても變りがないので、不審に思つて近づいて見ると、實は鹿と見たのは巨きな一塊の砥石であつた。それを見て忽ち神意を感じ、之を神として祀つたことから砥鹿明神の名があるといふ。或は鹿に化けて居た天狗の話（拙著「三州横山話」參照）などと、關聯ある譚と思はれる。

本宮山には、以前は澤山の鹿が居つたもので、而も此處に棲む鹿は、他地方のものに較べて遙かに巨きかつた。專ら本宮鹿の名で通つてゐて、三つ叉の鹿であれば普通十七八貫はあつた。それで一番と言へば先づ二十貫處が標準であつた。山が肥沃で食餌の良い關係で斯く優れて居たのである。それは角振りと言ひ姿と言ひ、申分の無い鹿であつたといふ。

九　鹿撃つ狩人

もう五十年も前に死んだが、東郷村出澤の鈴木小助と言ふ男は、名代の鐵砲上手であつた。そんな訣で小助の家の前の柿の木には、冬分なら何時でも鹿の二つ三つは吊してあつた。小助は或時家の縁先に居て、二頭の鹿を一發で擊ちとめた事があつた。朝未だ床の中にうとうとして居ると、前に起きた女房がしきりに呼んでゐる。「おつ

とう早や向ふの道を引鹿が通るぞえ――」といふ聲に、むつくり起上るが否や枕許の鐵砲を取つて縁先へ出た。見ると如何にも見事な雄鹿が二つ、後になり先になりして谷向ふを谷下(ヤゲ)村へ越す道を登つて行く。そこで鹿が二つ重なり合つた處を狙つて撃つと、見事に手前から後の鹿を筒抜けに斃す事が出來た。

小助は名の如く體は至つて小さかつたが、鐵砲は名人であつたと言うて、今に噂が殘つて居る。猪鹿買ひが獲物拂底の折は、必ず小助の家へやつて來て、上り端へ寝込んださうである。すると小助は澁々支度をして出かけるのが常で、出かけ端に、若し鐵砲が鳴つたら、その方へ迎ひにお出でと言ふのが癖であつた。さうして曾て一度も其言葉に誤りは無かつたといふ。小助も鐵砲上手に違ひなかつたが獲物も亦餘計に居た事も事實であつた。

小助が鐵砲上手の話はまだあつた。その頃村の梅の窪と言ふ處に、性惡るの狐が棲んで居て、時々村の者を惱ました。その狐が、小助の鐵砲なら狙ひが定つてゐるからちつとも怖くはないと常々言うたさうである。狐は後に小助の老母に取憑いて、どうしても離れないのに、これには流石の小助も弱つてしまつた。

そこで或時鐵砲に紙丸を詰めて、一發天井に向けて放して置いてから、さあ今度は眞丸(ほんだま)で撃つぞと嚇すと、これには狐の方が參つてしまつた。さうして明日の朝は間違ひなく出て行くからと約束した。それなら確かな證(しるし)を見せよと掛合つて、行掛けに屋敷向ひの谷下村へ越す坂道で、片肢上げて相圖をさせることにした。その代り撃つてくれるなと、狐も念を押したさうである。委細承知して朝になるのを待つて居た。翌朝早く起きて見て居ると、如何にも谷下村へ越す坂を、狐が一匹ブラリブラリ登つて行く。その狐が恰度屋敷の正面邊りへ來たと思ふと、如何にも片肢上げて相圖をした。其處をドンと一發欺し撃ちに撃取つたと言ふ。

此小助の兄弟であつたか、或は親類であつたか判然記憶せぬが、長篠村淺畑(あさはた)に、某晋五郎と言ふ狩人が居つた。鹿狩りには矢張り名代の剛の者であつたと言ふ。格別逸

話としては聞かなかつたが、或朝起きて戸を明けると、家の前に巨きな一頭の山犬が坐つて、口を開いて何やら嘆願する樣子であつた。剛氣な音五郎は怖れ氣なく傍へ寄つて口中を檢めると、太い骨が咽喉に立つて居た。手をさしのべて除いてやると、さも嬉しさうに山犬は尾を振つて立去つた。翌朝見事な大鹿が一つ門口に置いてあつたのは、山犬が前日の恩に酬ひたものであつた。

一〇　十二歳の初狩

鳳來寺山行者越の一つ家に、五十幾年の狩人生活を送つて、名代のがむしやら者などと言はれた丸山某は現に生きて居る。行者越は鳳來寺の裏參道で、以前は鳳來寺から遠江の秋葉山へ通ふ道者路に當つて居た。むかし役の小角が開いたと謂ふ傳說の地で、或は小角が此處より奥に登る事能はず、引返した跡とも言ひ、別に行者返りの名もあつた。鳳來寺へ一里、麓の湯谷へ一里、文字通りの一つ家であつた。

會つて話して居る間にも、昔の狩人はかうもあらうかと思はれる程、一本氣の氣儘さがある。さうして何物の力をも信じない冷酷さが、言葉の端々に迄感じられる。話をする間にも、てんで此方の言ふ事など耳に入れない樣子で、己が言ひ度い放題を甲高い聲で喋舌りつゞけて居た。生れたのは更に山奥の、北設樂郡黑川在で、今の家へは養子に來たのださうである。

生家も代々の狩人であつた。初の狩りは十二の年の秋で、燒畑の傍で見出した鹿であつた。最初の丸は尻に中つて惜しくも急所を外れたが、續いて逃げるあとを追つてゆくと、遙かの山の虬で犬が止めて居た。そこで傍にあるあはぶきの大樹に身を凭せて第二發を送ると、鹿は谷に向けて轉がり落ちたさうである。直ぐ後を探し求めて、藤蔓を取つて横に背負ひ上げようとしたが、重いのと谷が險しくて、上る事が出來ない。仕方が無いので、鹿の體に着てゐた上衣を脫いで掛け、自身は谷を傳つて歸つて來た。そして遙かに我家を望む地點迄來た時に立木に上つて枝を叩いて相圖をした。

その折家に下男同様に使つて居た乞食とも何ともつかぬ男があつて、その者が迎ひに來て二人して運んだ。十六貫七百目あつたさうである。

その鹿をば更に五里隔つた津具村の鹿買ひの處へ、一人で負つて往くと、折よく途中で鹿買ひに遇つてはなしが出來て、二兩二分二朱に賣つた。

未だいたいけな十二の年に、十六貫餘の鹿を負つて歩くだけに、子供の頃から不敵者で、十七の春にはもう家を飛出した。さうして山から山と渡り歩く内、今の家へ見込まれて養子になつたのだといふ。若い頃から獲物を追つて、何處とも知らぬ山中に夜を明した事も幾度であつたか知れぬが、それで居て更に疲れる事は知らぬ、强靭無類の體軀の持主であつた。そんな訣で鳳來寺山麓の門谷の人々は、此男が山中で百貫にも餘ると思はれる巨大な朽木を負うて行くのを、時折見かけた。會つて話した感じでは、瘦形のもう六十幾つといふ年配で、異常な膂力を備へて居ようなどとは思はれなかつた。

この男が一代の間に捕つた獲物の數は、鹿だけでも幾百を數へ、多い時は一冬に六十二の鹿を捕つた年もあつたと言ふ。それはもう三十年も前の事で、その頃は亦獵犬も良いのが居た。タカにチジにフジと、幾度か犬の名を繰り返して聽かせた。中でもチジと謂ふ犬は、一冬に九貫目以下ではあつたが七つの鹿を捕つた俐巧者であつた。山で獲物を見かけて一度傷を負はして置けば、後はそれ等の犬が追かけて肢を噛切つてくれた。熊も七つ捕つたがその中の一頭は、大木の高い空洞に居るのを、たゞ一人で登つて行つて、山刀で前肢を叩き切つて斃した。之が生涯の自慢話の隨一であつた。その折の光景を旅廻りの繪師に描かせて置いた。是非見てくれと言うて、粗末な一幅の繪を取出して來た。惡いから默つて何の批評も爲なかつたが、それは勇ましい功名談とは似もつかぬ、氣の毒な程貧弱な熊と狩人が描かれてゐた。

一一　一つ家の末路、

丸山某の養家であつた行者越の一つ家は、旅籠渡世もしたが、實は代々の狩人であつた。養父といふのは狩人とそして居たが、實はえらい劍術使ひで、由ある者の成れ果だらうとの噂もあつた。それで家には鎗長卷の類が幾本も藏つてあつた。脊は四尺幾寸しか無くて、一眼のちつとも引立たぬ面構へであつたが、劍を把つては並ぶ者は無い。行者の又藏と言へば、その名は遠國迄響いて居たものと言ふ。

どうした事情で代々こんな處に棲んで狩人をして居たかは知らぬが、家は草葺きの大きな構へであつた。明治維新の際には、此邊にも長州兵が幕府方の後を追うて入込んで來た。拔身を提げた荒くれの武士が十六人、袴の股立をとつて鳳來寺道をやつて來た時は、街道筋の者は全部雨戸を締め切つて隱れて居た。その連中が行者越の家の前へかゝつた時、軒に吊してある草鞋を拔身で指して、値は幾何かと訊いた事から、店に坐つて居た又藏老人と喧嘩になつた。さうしてあはや十六人が一人の又藏に飛びかかるかと思はれた時、又藏は落つき拂つて名を名乘ると、聞いた武士がびつくり道ひつくばつて無禮を詫びたといふ。別れ際に老人が、誰やらにも行者の又藏から宜しくと言ふと、へゝつと叮嚀に挨拶して去つたともいふ。狩人としての逸話はあまり聞かなかつたが、劍術使ひとしての話は他にもあつた。

或時旅の劍客と術比べをやつた。その武士が座敷に突立つて居て、ヤッと叫んだ時はもう天井を一回蹴つて居た。これに反して又藏の方は同じくヤッと叫ぶ間に、二回宛蹴つて事もなく勝つたさうである。又近くの者が多勢集つた席で、誰でも宜いから俺を押へて見よと言うて、疊の下を潛つて歩いたさうであるが、それがまるで土鼠のやうに速くて、どうしても押へる事が出來なかつた。然しそれ程の又藏も、生涯にたつた一度失敗した事があつた。横山の親方とは特別に昵近でよく遊びに行つた。さうして何かの折に其處の下男に向つて、隙があつたら何時でも俺を打込んで來いと約束した。然しどうしてもその隙が無かつた。ところが或日のこと又藏は主人と麥畑で立話をして居た。下男は知らぬ顏して、傍で肥柄杓をもつて麥に肥料を掛けて居たさう

である。肥料の入つた柄杓をもつて畝にかけかけ歩いて行つて、又藏の足許へ柄杓の尖端が近づいた時、肥料のは入つた儘パッと脚を打つと、これには流石の又藏も避ける暇がなくて、着物の裾をしたゝか汚したと言ふ。其時許りは又藏も辟易して、俺の方に油斷があつたからだと頭を掻いたさうである。又藏の娘が前言うた男を養子に迎へたのであるが、之が亦女に似氣ない氣丈者であつた。或時一人で留守をして居ると、夜中に門を叩く者があつて、大野から來たが一宿賴み度いと言ふ。その言葉に怪しい節があるので、そつと二階に上つて外を覗くと、黒裝束の男が九人、手に手に拔身を持つて立つて居た。

始終を見てとつた女房は夫の鐵砲を片手に握つて、只今開けますと言ひながら、大戸の掛金を外すと同時に、ドドンと二つ丸を放した。之には怪しい男達が仰天して、一目散に前の坂を駈降りて遁げて行つた。中に一人腰を拔かした奴があつた。それを後から又仲間が引返して來て、引摺つて去つたさうである。

その女房も、夙くに死んでしまつて、たつた一人血統を繼いだ男の子があつた。もう久しい前であるが雜誌少年世界の記者の目にとまり、健氣な少年として誌上に紹介された事がある。小學校を卒業すると間もなく八名郡大野町の商家へ奉公に出て、その翌年かに、主人の子供が川に溺れたのを救助に跳び込んで、共に溺れて死んでしまつた。昔を知る老人達の中には、ひどく惜んで居る者もあるが、然しもう何とも仕様はなかつた。數年前その一つ家の建物も取毀されて、跡はもう唯の山に還つてしまつた。

一二 鹿の玉

行者越の一つ家が潰れたのも、實は鳳來寺の衰微が大いに關係したのである。山内に藥師と東照宮を祀り、舊幕時代には天台眞言の兩學頭が並び立つて、千三百五十石の寺封を與へられて全盛を極めたものが、明治の改廢と數度の出火に遇つて、昔の面影は全く無かつたのである。

22

その風來寺が未だ全盛の頃には、山内十二坊中の一つである岩本院で、正月十四日の田樂祭りに、七種の寶物の開帳があつた。七種の寶物といふのは、開祖利修仙人が百濟から將來したと傳へる瑠璃の壺、それに龍の玉、熊の角、鹿の玉、一寸八分の杈、淨瑠璃姫委見の鏡、東照公佩用の鎧兜で、一人十二文づつの料金を取つて拜觀させたものである。

名前を聞くと何れも珍寶揃ひであつた。これ等の寶物はその後如何になつたか消息を知らぬが、その中の鹿の玉だけは、岩本院沒落の後も、附近の家に秘藏されて居る。

全く偶然の機會から私も一度見た事があつた。鷄卵大の稍々淡紅色を帶んだ玉で、肌の如何にも滑らかなそれは紛れも無い鹿の玉であつた。此類のものは、未だ他にも竊かに藏つてある家があつて、實は前にも見た事があつたのである。秘藏者は前から岩本院に緣故のある者であつた。いよいよ沒落の際、方丈がその者を前に呼んで、言

つたさうである。この品だけは此土地に遺して置くからと。

しかしそれは後の話で、一方では、どさくさ紛れに盗み出したなどと、陰口を言ふ者もあつたが、何れにしても傳へ遺したのは目出度い事である。

かゝる物が、如何にして鹿の肉體中に生じたかは別問題として、土地の言傳へに依ると、澤山の鹿が群れ集つて、その玉を角に戴き、角から角に渡しかけて興ずる事がある。これを鹿の玉遊びと謂うて、鹿としては無上の豊楽であると謂ふ。あんな玉を角から角へ渡すのは、容易であるまいなどの理窟は一切觸れぬ事にして、扨て其玉を家に秘藏すれば、金銀財寶が自づから集り來ると謂ふ。私の聞いてゐた話にも、舊家で物持だと言へば、彼處には鹿の玉があるげな等と言ふ程、物持とは縁の深い品であつた。

狩りを渡世にした者でも、滅多には手に入らぬ、よくよくの老鹿でないと獲られ無いと言ふ。それで一度び手に入れゝば、随分と高價にも賣れたさうである。前に言う

23

た行者越の狩人なども、昔て手に入れた事があると語つてゐた。

或はそれに生玉死玉の區別があつて、如何に見事な品でも、鹿を殺して獲た物では何の効驗も無い。群鹿が例の玉遊びに興じて居るそれを奪つたのでなくては靈能が薄いと言ふのである。鳳來寺の岩本院にあつたのが實はそれなのだと、之を秘藏する老人は改めて掌に取つて見せた。生玉の證據にはかう握りつめて居ると自づと濕りがあつて、幽かに脈が打つて來ると言うて、昵と目を瞑りながら暫く抱いて見せたものである。後で叮嚀に紫の袱紗に包んでから、奥まつた部屋へ藏ひに立つた。

この玉を秘藏して居る者は、黃金かなにかのやうに秘密にして、玉があることなどは、更におくびにも出さぬのが常である。そんな訣でこつそり秘藏して居る者も、案外其方此方の村にあつたらしい。

一三　浄瑠璃御前と鹿

鳳來寺の傳說では、光明皇后は鹿の胎內より生れ給ふた事になつて居る。開祖利修仙人が、昔て西北方にある煙巖山の岩窟に修法中、一日山上に出でゝ四方を觀望する內偶々尿を催して、傍の薄の葉に放したる處、折柄一匹の雌鹿が來つて其の薄を舐め忽ち孕むとある。月滿ちて玉の如き女子を產みおとしたが、仙人修法中とて其處置に窮し、ひそかに其子を人に托して郷里奈良に遣はし、あるやんごとなき邸の門前に捨てしめた。その女子後に成人して光明皇后となり給ふ。然るにもと鹿の胎內に宿り給ひし故、生れながらにしてその足の指は二つに裂け、恰も鹿の跂に似てゐた。皇后之を嘆き給ひ、宿業滅亡の爲鳳來寺の藥師如來に祈願を籠め、兼て御染筆の扁額を納め給ふと言ふのである。これは鳳來寺寺記の說であるが、別に元祿時代に書いた同寺所藏の掃塵夜話と言ふ寫本には、その事を實際化して、利修仙人無聊のあまり、夜々西方山麓の里に通ひ、賤の女と契り遂に一女を儲けたるならん、それを後に鹿にこじつけしものなるべしなどと、さも尤もらしく說明してゐる。

然し私などが子供の頃から耳で聽いた處は、之とは稍々趣を異にして、淨瑠璃姬の話になつて居た。淨瑠璃姬の傳說は十二段草子にもくわしい處で、東海道矢作(やはぎ)の宿の兼高長者が、子のない事を嘆いて、藥師堂に三七日の參籠をし、子種を一つ授け給へと祈つた處、恰も滿願の夜の夢に、藥師は大なる白鹿と顯じ、汝の願ひ切なるものあれ共、遂に汝に授くべき子種の無ければとて、一個の丸を授かると見て胎むといふ。しかし土地の傳承では、藥師が白髮の翁となつて現はれ、鹿の子を授くべしと告げ消失せ給ふたと謂ふ。軈て月滿ちて生れた子は、まことに輝やく如く美しかつたが、鹿に似て足の指が二つに裂けて居た。これを長者が悲しんで、それを隱す爲に布を以てその足を纒うたのが、後の足袋の濫觴であつた。

今から三、四十年前迄は、淨瑠璃姬一代の譚として、その次第を語つて渡世にした者もあつたと聽いたが、最早、如何にしてもその文句を聽く事は出來なかつた。亦附近の二三の家には、姬の姿を描いた小さな掛物を秘藏して居るとも言ふ。

鹿が女子を產んだ傳說は、それからそれと糸を引いて、妹背山の入鹿の話に迄つゞいてゐた。

鳳來寺の東方山麓に、東門谷と言ふ山に圍まれた小さな部落がある。そこの某彌右衞門といふ者の屋敷の背戶に、形ばかりの赤錆の浮いた池があつたが、之を俗にゐるかゞ池といふ。鹿が入鹿大臣を產んだ處といふ一方では、いるかが人の子を生んだとも傳へてゐる。或は狩人がこの池の水を鹿笛に濕して吹けば、如何なる鹿でも誘はれて來ると言うたが、果して今も跡があるかどうか未だ確かめてゐない。

尙この東門谷から峯一つ越へた鳳來寺村峯の地內に產田(うぶた)といふ田がある。之は前に言うた鹿が皇后を產んだ地と傳へ、玆十年前迄は注連を張つて不淨を戒しめてゐた。

一四 親鹿の髓

開創の始めから、鹿とは格別に因緣の深い鳳來寺であつたが、世が明治に改まつた

のを機會に、もう何も彼も忘れて、鹿を弄り殺しにした話がある。

前にも言うた岩本院は、本堂の西方寄り、俗に大難所と呼ぶ高い岩壁を背にして、白木造りの立派な建物であつた。いつの頃からか、その岩壁の上を、毎朝きまつて通る五六匹の引鹿があつた。寺男の一人が、夙うからそれを知つて居たが、何分山内の事で、如何に明治の時世と雖もどうする事も出來ない。いろいろ考へた果に旨く生捕りにして山内を引出してしまへばよいと、勝手な理窟をつけた。それで寺男は或日麓の門谷に下つて、無法者の若者逹を語らつて生捕りの相談を決めた。先づ青竹を籠目に組んで、鹿が踏込んだら動きの取れぬやうな罠を拵らへたのである。さうして之を鹿の通る路に掛けて來た。翌朝行つて見ると、果して十四五貫もあらう雄鹿が一頭掛つて居た。それを多勢して寄つて集つて頸から肢に滅茶苦茶に繩を掛け、口には馬にするやうな轡を嵌めてしまつた。二人の男が鼻綱を把つて、多勢の若者が後から鹿の尻を打ち打ち、九百幾段に及ぶ御坂を引下して門谷の町へ牽き出して來た。軒毎にそ

の鹿を見せびらかしながら、正月初駒を曳くやうな氣分で、引張り廻した。鹿は如何にも觀念したやうに、もはや抵抗もしなかつたさうである。町の有力者の庄田某が、遉に見兼ねて、その鹿は助けてやつてくれと、幾干の金包みを若者逹に取らせたといふ。然し若者逹は、其場だけを承知して、軈て村端れから再び山の中へ引込んで、そこで殺して煮て喰つてしまつたとは酷い話である。これを聞いた者はよくよく鳳來寺も沒落の時節が來たとひそかに語り合つたといふ。その事實といふのは、鳳來寺の權威も地に墜ちて、一山が引くり返るやうな騷ぎをした、明治四年の事だつたさうである。

まるきり弄り物では無かつたが、狩人の中には、生れて間も無い小鹿を囮にして、親鹿を捕る者があつた。狩人が夏山を稼げば、時たま崖の下や山崩の跡などに、滑り込んで居る子鹿を拾ふ事があつた。さうした時は、親鹿が近くに居る事は判つて居るので、直ぐ殺さず近間の木などに繋いでおく。さうして時折、ギーと鳴かせて親鹿を

誘び出す囮りにしたのである。親鹿は子鹿の姿が見へる間は、幾日でも其場を去らぬ習性がある。それで何處かしらから眤と見て居るものである。若し人が居れば何よりもその臆に注意する。双方の瞳と瞳とが遇ふと、はじめて遁げて姿を匿すのである。そんな訣で此猟法は、餘程の技巧を要するが、何度も失敗を重ねると、遂ひこちらも意地になつて、一日位其場に寢込んで待つ事もあつた。しかしさうなつては、決して擊てるものではないと猟師の一人は語つて居た。

かうして子が捕えられゝば、親は見えがくれに之を見守つて居るが、それと逆に親鹿を擊つと、子鹿が其軀を慕つて離れようとしない。犬でも居れば直ぐ嚙殺すから造作はないが、さもない時は、親鹿を舁いで來る後から、とぼとぼと隨いて來る。そのいぢらしい姿には荒くれの狩人も遉がに双はあてられなかつたといふ。なほ、子鹿の事をコボウ又はコンボウとも謂うた。

子鹿に對して二歳鹿の角に股の無い場合を、ソロ又はソロツボウと言うてゐる。

一五　鹿の胎兒

肢腰の發達が未だ不充分で、山の岨から滑り落るやうな子鹿は、時に親鹿一つ捕る囮りにもならなかつたが、それが未だ親の胎内にある間は、狩人にとつては別に一匹の鹿を捕るよりも巨きな利得になつたのである。

鹿の胎兒をサゴとも亦胎籠りとも謂うて、その黑燒は產後の肥立の惡い者などに、此上の妙藥は無いとした。今日ではさう見かけ無くなつたが、以前は何處の村へ行つても、蒼い血の氣の無い顏をした女を、一人二人は見かけたもので、從つて需要も多かつたのである。

明治初年頃、普通の鹿一頭が五十錢か七十錢程度の時代に、サゴ一頭が七十五錢から一圓にも賣れたと言ふから、狩人が何を捨てゝも孕み鹿に目をつけたのは當然であつた。その爲一年に一頭しか殖へぬ鹿の命數を、縮める事など考へる餘裕は渠等には

なかつたのである。

サゴは舊暦の春三月、親鹿が肢に脛巾を穿いた季節が最も効験があると謂ふ。脛巾を穿くとは畢竟鹿の毛替りを形容した言葉であつた。鹿は春先き木の芽の吹き初める頃から、冬の間の黑味を帶んだ毛が抜けはじめる。さうして初夏田植ゑの盛り頃にはすつかり赤毛に替つて、眞白い斑が現はれた。この季節の鹿を、俗に五月の中鹿と謂ひ、所謂鹿の子を着たのである。鹿の毛替りは肢の蹄の附根から始まつて、段々上へ及ぼすので、恰も膝迄替つた時が、即ち脛巾を穿いた期であつた。此時期に遠くから望むと、如何にも柿色の脛巾を着けたやうに見へる。月で言ふと、その時サゴは五月目であつた。鼠よりも心持ち大きかつたが、肌にははや美しい鹿の子の斑が表はれてゐる。サゴの最も効験ある時期として、親鹿の腹を割いて取出した時、箸に載せて眺める程度が良いとも謂ふ。

晩春花が散り盡した頃は、サゴは早や猫程に成長して、もう誕生に間もなかつた。

さうなると効験が薄いとされて高價には賣れなかつた。そこで猾い狩人などは、今一度皮を剝いで形を少さくした。眞赤な肉の塊りのやうな物を、流石に氣が咎めるか、遠い見知らぬ土地へ持出して賣つたのである。

鹿の肉も藥だと言うたが、角も熱さましになるとて、小刀などで少しづゝ削つて持藥に用ゐる者もあつた。

一六 鹿捕る罠

冬の終りから春先へかけて、鹿はよく人家の小便壺に附いた。鳳來寺山麓の門谷などでも、以前は夜遲く用足しに出ると、二つ三つ位揃つて、暗がりへこそこそ影を消す姿を見る事は珍らしく無かつた。山犬などもさうであるが、鹿は殊に此季節に生理的に隨分の不足を感じたのである。山中などでも、人が用足しした後を索めて遠くから集つて來ると言ふ。

24

狩人がハネワと言ふ罠で、鹿を捕つたのもその季節であつた。ハネワは即ち跳罠で焼畑近くなどの、大體鹿の集りさうな地を選んで仕かけたのである。その方法は、先づ鹿を吊し上げるに充分な立木を見立てて、その前に落葉を堆く掻き集め、落葉の周りを枯枝の類で柵を結つて圍ふ。而して一方に口を明けて置き、そこに跳罠を仕掛けたのである。之には最初に見立てた立木を曲げて來て、それに藤蔓で輪を拵へて吊り下げる。一方別の藤蔓を以てバネ仕掛けを作り、之を以て木を撓めて置くのである。さうして圍ひの中の落葉へ尿をして置く。鹿がやつて來て落葉にかゝつた尿を舐めようとする時、頸がバネに觸れて外れて、曲木が舊に跳返る勢ひで、藤蔓の輪が頸を括り上げるのである。說明が少しやゝこしいが、要するに尿を舐めにかゝる鹿の頸を、曲木の跳返る力で括り上げるのである。

一人がハネワで鹿を捕ると、吾も吾もと其の傍へ仕掛けたさうである。一ヶ所に同じやうな罠が、三つ四つ位竝ぶ事は珍しくなかつた。然し後から眞似た罠には不思議

に掛らない。之は北設楽郡黒川在での話であるが、ハネワが三つも四つも竝んだ中で、同じ罠にばかり、三日も續けて掛つた事もあつたと言ふ。

不思議な事にハネワに掛るのは雌鹿ばかりで、雄鹿は曾て掛つた事がないと言ふ。或は雄鹿だと角が邪魔になつて、旨く輪が頸に絡まぬ爲かと思ふが、狩人の一人はさうは說明しなかつた。雌鹿の殊に子持鹿が尿を好くからだと言ふのである。さうすると人の尿に附いたのは、獨り傳說の雌鹿ばかりでは無かつたのである。別の狩人の話であつたが、その頃の鹿は朝早く、枯草に置いた霜を舐めて居るのを見ると言ふ。

鹿を捕る方法には、ハネワの外にヤトがあつた。ヤトの事は既に猪の項に說明した處である。それを燒畑などのワチの蔭に立てて、中に跳び込む鹿を刺し殺すのである。夏分蕎麥の種へ菜種や麥を混ぜて播くと、蕎麥を刈取つた後に、菜種や麥が靑々と伸びて居る。山が冬枯れるに從つて、この線に鹿が附いたのである。高く結つたワチに前肢をかけて、中へ跳び込むと其處にはヤトの尖が鋭く光つて居た。朝早く見廻りに

行くと、胸や腹を深く貫かれて息切れて居る鹿を見出す事は珍らしくなかつた。さうして一冬に一つ畑のワチで、七つも捕つた事があると、名も無い狩人の手柄話の種になつたのは哀れであつた。

一七　大蛇と鹿

大蛇が鹿を追つたと言ふ話がいろいろあつた。

瀧川の村から小吹川に沿うて、一里程山奥へ入込んだ處に、小吹と言ふ一つ家があつた。そこの山には大蛇が棲むと專ら言傳へたが、曾て鳳來寺村布里から、山越しして來た男は、行手に松の大木が倒れて居ると思つて近づくと、それが實に蛇の胴體であつたといふ話がある。或時瀧川の狩人が、朝早く其處へ引鹿を撃ちに行くと、見上るやうな高い崖の上から一頭の大鹿が轉がり落ちて來た。不思議に思つて崖の上をふり仰ぐと、今しも一匹の大蛇が、鎌首を差出して下を覗いて居るのに、びつくりして遁げて來たと、さういふ話もあつた。

伊那街道筋の双瀬にも之と略ぼ同じやうな話があつた。其處に高く切り立つた物凄い崖があつて、上の方が虛空に差出て居る場所ださうであるが、或時狩人の一人が其下に憩んで居ると、崖の上から何やらひどい音をさせて轉がり落ちて來た物がある。見るとそれは一頭の鹿で、前の話と同じやうに蛇に追はれて落ちたのである。之に似た話は他でも聞いた事があるが、たゞ八名郡石卷村の事實として語られてゐた話だけは、別に不思議な因緣談がからんで居た。

極く新しい事だと言うて、その者の名前迄聞いたが殘念ながら忘れた。某の狩人が朝まだ暗い内に起きて、石卷山に鹿撃ちに出かけて、山の中腹の崖の下に夜明けを待つて居た。その崖と言ふのは所謂懸崖で、高い岩が屋根のやうに差出して、崖の上は遙かに峯續きになつて居る。アギトと言うて、更に上には登る事の出來ぬやうな地形である。その岩の頭へ姿を見せる鹿を撃ちに行つたのである。すると夜の明方に思ひ

がけなく岩の上から、一頭の大鹿が轉がり落ちて來た。驚いて崖を見上ると、高い岩の上から、鎌首を差出して、二間もある恐ろしい大蛇が下を覗き込んで居る。びつくりして鐵砲を取直すと、蛇を目がけて擊つた。すると恐ろしい音を立てゝ蛇は手繰るやうに落ちて來て、えらい苦しみをして死んだ。狩人はそのまゝ鹿を引舁いで、どんどん家へ遁げかへると、戶口に女房が眞蒼な顏をして倒れて居る。散々のふしぎに直ぐ助け起して段々訣を聞くと、女房は夫を送り出して一眠りする中に夢を見たのださうである。その夢といふのは、女房が一匹の大蛇になつて鹿を追かけて行くと、その鹿が崖の下へ轉がり落ちたので、上から覗き込むと、下に狩人が居ていきなり鐵砲で擊たれた――、そこ迄は記憶にあるが、それからさきは夢中で、床を轉がり出して門口で倒れたらしい。段々の次第が、男が蛇を擊つた時刻と符合するのである。

この話には未だ缺けた點があるやうである。私が聞いたのは小學校へ通つて居る頃で、その途中であつたと思ふ。私よりも四つ五つ年上の子供が、昨夜中村（寶飯郡中村）の伯父が泊つて父に話したのを、脇から聞いた事だと附加へた。今ではもうその子供もその父親も死んでしまつて、詳しい事を問糺す術も無い。同じ八名郡の鳥原は、昔から大きな蛇が澤山居る處と傳へられ、或時鹿を啣へた大蛇が、山の裾を草を押分けて走るのを見た者があつたと言ふ。

一八　木地屋と鹿の頭

嘗て長篠驛から海老へ往く街道で道連れになつた男があつた。道々何かと世間話をする中に、北設樂郡田峯の者と知れた。その男から聞いた事であるが、田峯の奥の段戶山御料林中の、水晶山の木地屋部落へ入込んだ時、其處の有力者らしい家に、見事な鹿の角が二つ、頭づきのまゝ座敷に飾つてあつた。

何とかして一つ讓つて呉れぬかと、掛合つた末、三十圓迄出すと言うたが、遂ひ肯じなかつたさうである。其處は極く新しい木地屋部落で、以前は二三戶しかなかつた

のが、忽ち二三十戸に増へたのである。其地へ初めて木地屋たちが入込んだ頃は、附近の山中に、まだ十五六づゝも群をなして、遊んで居る鹿を見る事は珍らしくなかつたさうである。因に段戸山の鹿は有名なもので、次の話も同じ山中の話である。

某の杣が山中の小屋に働いて居た時の事、一日ひどく雪が降つて、仕事が思はしく出來ぬ處から仕樣事なしに小屋の前に立つて居ると、向ひの日陰山に鹿が二匹遊んで居るのが見える。某は退屈凌ぎに仲間を誘ひ合つて、其鹿を遠卷きにして追立てた。それと知つた鹿は一氣に峯を越して遁げ去つたので、一同笑ひながら小屋へ引返して來た。するとその途中の一叢伐殘した木立の中に何やらムクムク動く物がある。よくよく見るとそれは同じ鹿の群で、凡そ二十頭許りも集つて居た。尻と尻とを押合ふやうにして、木蔭に塊り合つて居たさうである。之も直ぐに追散したが、前に鹿を追つた時、どうして遁げなかつたものかそれが不可解である。

おそらく雪を避けて集つたものであらうといふ。それは日露戰爭の終つた頃の事で某は三十を少し出た位の年配であつた。

之も鹿の群の話で、私の村の山口某の實見談である。或年の夏急病人の飛脚を賴まれて段戸山に上つた。かなり道を急いだが途中の田峯村でもう日はとつぷりと暮れた。さうして奥の金床平へ差掛つた頃は、恰度舊暦八月十五日の月が、晝間のやうに明るかつたさうである。見渡す限り廣々とした草原を歩いてゆくと、そこに鹿が幾群となく遊んでゐる。宛然放牧の馬でも見るやうに、何十と數知れぬ鹿が、半身に月光を浴びて野面に散らかつて居るのは、薄氣味惡くはあつたが、見ものでもあつた。人間の行くのも知らぬ氣に悠然と歩いて居た。中には道の中央に立塞がつたり、脇から後を睨と見送つて居る鹿もあつたといふ。

目ざす山小屋へ着いた時は可成り夜が更けてゐたが、其處へ辿りつく迄の間、高原を出離れてからも、五つ六つ位づゝ連立つて通るものに、何回となく出つくはした。明治二十年頃のことで、山口某はその頃まだ二十五六の青年であつた。

一九　鹿の大群

今から五十年許り前のこと、段戸山中の、菅原の奥の中の河原で、川狩りの人夫達が材木を流して居ると、傍の深い萱立の野を、木の枝を振翳した裸形の屈強な男が、一頭の大鹿を追かけて來たのを見たさうである。その人夫たちが、段々材木を流して川を降つて、私の村に泊つた時に、その事を語つて聞かせた。裸形の男はおそらく山男の類ひであらうと言うた。

次の話は、その中の河原附近が、もう嘘のやうに木を伐り盡してしまつた後で、更に三里程奥に伐木作業をやつてゐた某の杣が現實に見た事である。

年次を繰ると明治三十年の冬ださうである。それは何時になく寒い年で、此模樣では雪も近からうから、山には居られぬだらうと語り合つてゐた。その時某は、仲間の八人と一つ小屋に寢起きして居た。前日迄に豫定の仕事が一通り終つたので、其朝早

く新たに各自の持場を決めるため、山割りの相談をはじめて、一同で小屋の前に立つて脚下の窪を見て居た。山の朝は未だ暗かつたさうである。

しかも其朝に限つて窪の底一帶に深く霧が立罩めて居る。某は仲間の者とは一人離れて立つて、窪を埋めた霧を茫乎見て居た。すると見てゐる間にその霧がモコモコと湧き上るやうに上へ上へと擴がつて來る。さうして雲のやうに近づくに從つて色が淡紅色に變つて來たやうに思はれた。さうかうする間に、アッと聲を揚げんばかりに驚いた。見ると今迄霧とばかり思ひこんで居たのが、それは何千何百と數限りない鹿の軀である。次から次へ湧いてゞも來るやうに、先登から脇の峯へ向けて、風のやうに一齊に走つて居る。その時は他の仲間もみんな氣がついて居た、が誰一人聲を立てる者もない。じつと突立つた儘、それ等の鹿が悉く通り過ぎる迄、何分間か立すくんだやうに見とれてゐた。

この事があつてから急に山が怖しくなつて、後一日働いて、悉く小屋を引拂つて歸

つてしまつたといふが、某はその時二十一か二の青年であつた。

鹿の大群の話は屢々耳にするが、かうした例は曾て聞いた事がない。遽かに信じがたい氣もするが、暫く話のまゝを掲げることにした。實はこれも獸たちの最後を飾る譚の一つであらうもしれぬ。

斷片的な、とりとめの無い話の續きが迷ひ長くなつた。極めて狹い、東三河の一小部分、僅か五方里に足りぬ地域でも其處に棲息する鹿は自づから區別があつた。北から南へ、垂直に線を引いた寒峽川豊川の右岸地帶に繁殖した鹿は、川の左岸の遠江の山地に居た物より遙かに長大であつた。前に言うた本宮鹿がそれである。これに反して遠江の山地に近づくに從つて、だんだん小さくなつて、俗に遠州鹿と呼んだ物は、雄鹿の三ツ又でも七八貫が止りであつた。山に岩石ばかりが多く食物が充分でない爲だと言はれてゐる。鹿の生活にも又地の利が影響したのである。

狸

一　狸の怪

狸と云ふ奴は、たしかに變な奴だと、始終狸を捕つて居る男が話した事があつた。未だ五年と經たぬ新しい話である。仲間と二人で村の池代(いけしろ)の山で穴を見付けて、いよいよ奥まで掘つて、枯葉を敷きつめた寢床迄掘り詰めたが、狸の姿は薩張り見えぬ。こんな筈はない、たしかに居る筈だが、何處か拔穴でもあるのぢやないかと掌で撫でるやうに探したが拔穴も無ければ狸も居らぬ。それにもう一面に岩が出てしまつて、これ以上掘つてゆく先とてもない。然も深い横穴で、中が暗くて仕方がない。蠟燭でも點して見たらと、わざわざ一人が里へ取りに返つて、中を限なく探したがどうしても居ない。穴の口の樣子では、二足や三足は間違ひなくゐる筈だが、それでは、今日

は穴の口に囲ひをして置いて、明日もう一度來て見ようと、その支度にかかつた處へ恰度見物に來た男があつた。そこでそれ迄の經過を話したところ、其男の言ふには、昔から狸は燻せば出ると言ふから、試しに燻し立てて見たらどんなものかと言ふ。何だか宛にならぬやうにも思つたが、他に良い方法も無いので、とも角やつてみることにした。早速枯葉を掻集め、上に杉の青葉を載せて、煙をどんどん穴の奥へ煽り込んだ。一方抜穴でもあつて、煙の出る道でもあるかと、一人は外で見張つて居た。すると物の二分間も經たぬのに、ひよつこり煙の中から狸が一匹跳出して來た。直ぐ用意の刺股で押へつけて摑まへはしたが、只不思議でならぬのは、それ迄狸が果して何處に隱れて居たか、いくら考へても判らぬと言ふのである。

同じ男が以前別の山で狸を捕つた時の話がある。凡そ六分通りも穴を掘つたと思ふ時分に、もう一疋跳出して來た。直ぐ持つて居る鍬で擲りつけるところりと死んだ。そこで肢を縛つて傍の木の枝に吊して置いて、未だあとに二疋や三疋はたしかに居る

26

と、更に穴を掘りに掛つたさうである。穴を掘りながら傍に吊してある狸を見ると、括つてある縄が切れさうで、危なかしくて仕方がない。そこで相手の男を顧みて縄を代へよと言ふと、諾と直ぐ狸を下して縄を解いた。代りの縄を取つてくれと言ふ儘に、鍬の手を休めて脇に置いてあつた縄束を投げてやつた。それを相手が手を伸べて受止める、そのほんの瞬間だつた。縄を受取る爲ひよいと手を伸した際に、死んで居た筈の狸がむつくり起上るが否や、手の下を掻潜つて走り出した。それつと慌てて追掛けたが、もう間に合はない。狸はもう何處ともなく逃げて了つた。それがほんのちよつとの隙で何としても諦め切れなかつたと言ふ。随分ひどく擽つて、たしかに死んだと思つたがやはり嘘死であつた。それにしても吊してある縄が頻りに氣になつたのが、そもそも怪しいと不思議がつてゐた。嘘死であるのか、それともほんとの假死か、何れにしても狸にはよくある事ださうである。

二　狸の死眞似

よく言ふ狸寢入りは、ほんとの狸には未だ聞いた事が無い。然し死眞似の方は、狩人に聞いても確かにあると言うてゐる。山で狸を追ひかけてドンと一發喰はした時、ころりと見事に引くり返つた時などは、なかなか油斷が出來ぬ。獵犬に追ひかけられた時でも、犬が追ひついて一嚙み當てたと思ふと、もうぐつたりと參る事がある。そんな時に限つて隙を窺つて居るので、犬でもうつかり遁す事がある。然し老巧な犬は、やはり其間のことをよく識つてゐて、決して油斷をしないと謂ふ。

鳳來寺村峯の、吾何とかいふ狩人だと聞いてゐる。或時分垂（ぶんだれ）の山から追ひ出した狸を田の中へ追込んでおいて犬を向けると、直ぐ啣へて來たさうである。其狸を家へ持つて來て、土間へ轉がして置くと、犬は傍を離れずに番をして居る。ちよつとの間背戶へ用達しに出て歸つて見ると犬が門口で狸と嚙合つてゐる。見る見る犬が啣へて嚙殺してはしまつたが、若しも其時犬が居なかつたら、その狸はとつくに遁げて了つたらうと謂ふ。

又同じ村の或る男は、擊つて來た狸を土間に置いて爐邊に坐つて飯を食つて居た。すると戶外に繫いである犬が頻りに吠え立てるので、格子の間から覗いて見ると、死んで居た筈の狸がそつと頭を持上げてゐる。此奴噓死だなと感づいて、エヘンと一つ咳拂ひをやると慌ててぐたりとしてしまふ。そして暫く經ち四邊が又少し靜かになると、そつと細目を開けて樣子を窺つてゐる。エヘンと又一つやると慌てて眼を閉いだと謂ふ。

又瀧川の狩人某は、椎平（しひだひら）の山で、狸が山の裾を遁げる處を擊つと、飛上つてころりと轉がつたさうである。それを家に舁いで歸つて、半日程土間の天井へ吊して置いてから、下して皮を剝ぎに掛つた。背中を半分剝ぎかけた時だつたさうである、急に何か用事が出來て、狸を其處へ置いたまま隣の部屋へ行つた。

するとその背中を半分剝がれた狸が、のそのそ這つて背戸口から外へ逃げ出した。其處へ折よく家内の者が來て、大騒ぎをやつて、やつと捉へた事があつたと謂ふ。

鼠などにはよくあつた。長押の上を走る處を、箒などで拂ふと同時にばたりと落ちて來る。尻尾の先を摑み上げ、表の端迄持出して、其處に置くか置かぬ間に、ちよろちよろと逃げて了ふ。これなどは、一時氣絕して居たと言へば言へるが、前の狸の場合のやうに背中を半分剝がされてから、始めて正氣づいたとしては少しく變な理窟である。さうかと言つてそれ迄死真似をして居たとすると、えらく辛抱强い事である。何れにしても、如何にも世間でいふ狸らしい遣方ではある。

三　狸の穴

狸の穴に注意して居る者は、山の外觀を一渡り見たゞけで、其處に穴があるかどうかゞ直ぐ判ると謂ふ。多く雜木山の、餘り深くもない、峰から少し降つた邊りが、狸の好く處だと謂ふ。

貉の穴などもさうであるが、狸の穴には必ず澤谷の水のある處へ向けて、細い徑が出來て居る。朝晩定めて通ふ訣でもあるまいが、其處は綺麗に叩き土のやうになつて居た。尻尾の箒木で撫でて通るなどとも言うた。かうして穴には水を求める徑の一方に便所がある。一口に狸の溜糞と言ふ位で、穴から數間離れた位置に、一ヶ所に夥しく積んである。時折位置を替へるらしく、古い糞の跡を其方此方に見る事があつた。果して居るか否かは、此糞の樣子からも判別したのであるが、時に依つて、二日三日位留守にする事もあるといふから、糞が新しいだけでは狸の在否は決められない。

穴は、入口から少しは入つた處が、最も狹いさうである。それからは段々奧へ進むに從つて廣くなつて、最後に枯葉や枯草を深く敷き詰めた一廓がある。こゝが寢床で大きい穴になると、疊二疊敷位は珍らしくない。或は又穴に依つて、寢床の奧に一段と高い場所がある。これは濕氣の多い時の用意であると謂はれてゐる。雨の劇しく降つた後な

どは、寢床に一面水が溜つて居る事もある。さうした時の爲に必要だつたのである。
狸の穴狩りは口元から縦に段々掘つて行つて、中から跳び出して來る處を、豫め用意した木の刺股で押へるのである。然し犬が居れば、中へ入つて啣え出して來る。此の場合には、大きな犬は駄目である。然し、一つの穴に二疋も三疋も居る時は、犬も容易に啣え出す訣にはゆかぬさうである。
狸の穴では、一つの穴に一疋と言ふ事は滅多に無い、大抵二疋以上は居る。多いのになると、六疋七疋も居た話がある。それが貉となると、遙かにたくさん居るさうである。マミツトーと言ふて、貉は一つの穴に十居るものだなどとも謂ふ。
狸は冬至十日前に穴へ入つて、八十八夜過ぎに穴から出ると言ふ。その期間なら間違なく穴に居たのである。然し穴狩りをする者は、入口に茅の葉など挿して置いて、その茅の靡き振りで、出入りの行動を測る事もあつた。
以前は狸の穴を見かけても、よくよく手輕にゆく場所でない限り、手を出さなかつたが、近頃では見つけ次第に、一日二日を費しても掘つてしまふ。岩窟などを利用した堅固な穴でも、ダイナマイトなどで砕いて捕つてしまふ。それで忽ち少くなつて近年では、年にたつた二疋か三疋しか捕らなんだと、村の狸掘りの名人も零してゐた。
私の家の近くの籔に、昔からあると言傳へる貉の穴があつた。車も通る程の街道の脇で、まさかもう居なからうなどと済して居たが、近所の者の談では、夕方など其處を通ると、時折見る事があると言ふ。狸ならよいが貉では、竹の根をわけて難儀して掘つても勘定に合はんなどと、村の狸掘りたちが言うて居たから、或はそんな事からまだ居たのかも知れない。

四　虎挾みと狸

狸を虎挾みで捕つた時代は、もう三十年も前に過ぎて居た。宛もない山へ何程かけて置いても、自體居なくなつたものが、やつて來て掛りやりはなかつた。それよりも

後を尋ねて出かけて行けば、間違ひ無かつたのである。一頃かんしやく玉といふのを啖ませて捕つた事もあつたが、警察が八釜しくて直ぐ駄目になつた。

それでも虎挾みで捕つた頃には、面白いやうに捕れたさうだ。背戸の山へ三つ掛けて、それがみんな外れて居た事もあつた。皮を剝いで軒に吊すか吊さぬ間に、もう皮買ひが來て買つて行つた。皮の値も今から思ふと其頃は嘘のやうに廉かつたが、それでも饂飩と百姓などするよりは割りが宜かつたと、之は北山御料林下の街道端に、茶店を出してゐた爺さんの述懷である。その頃は前の畑もたつた一枚しか作らず、後は全部草生にしてあつたものだ。それが狸や狐が段々尠くなるにつれ少しづつ擴げて行つて、十年この方は、麥も毎年何俵かとれるやうになつた。五六年前から、田も作つて去年は米が六俵もとれたと言うて居た。

然し盛んに虎挾みを使つた當時は、捕るにも捕つたが一方隨分馬鹿な眞似もして、飛んだ詰らぬ目を見た事もあつた。見事な狸が掛つて、後肢だけ挾まれて、ピョンピョン跳ねてゐるのを、見す見す遁がした事もあつた。今思ふと忌々しい話であるが、其時は遂ひ妙な氣が出て、折角生きて居るものを、直ぐ撲殺しては興味が無いから、一つ苦しむ處を見物してやれと、腰から煙草入を出して、傍に坐つて悠々と喫み始めた。その時罠に挾まれてゐる肢の肉が破れてしまつて、中から眞白い筋がはみ出してゐた。もう一本の筋だけが罠の鐵に引掛つてゐる危ない處であつた。狸がもがいて荒ばれる度に、少しづつ伸びるのが判つた。それでもまさか遁げやうとは思はなんだと言ふ。手前がいくら荒ばれても、もはや遁げられぬぞよと、呑氣に落づいたものだ。そのうち一段ひどく荒ばれたと思ふと、プスリと音がして、どんどん遁げて了つた。あまり馬鹿馬鹿しくて、遂ひ聲も出なんだと言うてゐた。筋肉を斷つてしまつたのである。藻拔けの殼の挾みを提げて、澁々歸つて來たさうであるが、後になつて其話を狩人の一人にすると、俺も狸ではそんな目に遇つたと、同じやうな經驗を語つたさうだ。さうすると狸には、間々ある事だつたのである。

五　狸を拾つた話

山の中で狸を拾つたからとて、格別珍らしい出來事でもなかつたが、實は狸一匹捕るにも容易でなくなつた頃だけに、話の種にもなつたのである。或時村の某が、朝早く山田へ麥播きに行くと、途中の田圃の中に、狸が一匹まごまごして居る。今頃狸の居る筈が無いがと、暫く立止つて見て居たが、紛れもない狸なので、直ぐ引捉へて撲殺してしまつた。見ると眼から眼を撃拔かれた盲目狸だつたのである。近所で撃ちもらした話も聞かなんだから、餘程遠い處からでも迷つて來たものであらう。話はたゞそれだけであつたが、實は其同じ場所を一足先きに通つて居る男があつたのである。拾つた男とは隣同志で、上と下の屋敷であつたが、どうした訣かひどく仲が惡くて、お互に何とか惡口の一つも言はぬと、氣の濟まぬ間柄であつた。然もそれが家ばかり

ではなく、田圃も隣合つて作つて居たのである。

それで拾つた男は、其狸を擔いで其儘田圃へ行つたが、自分の田へは行かないで、先に來た隣の男の傍へ行つた。さうして出し拔けに狸を手に吊して見せながら、次のやうな事を怒鳴つたと言ふ。「如何に田が可愛いとは言へ、朝も暗い内から起きて脇目も觸れずに來るから、こんな福が落ちて居ても拾ふ事が出來まい。道を歩くにも少しは氣をつけて歩け――」と。

あんな無法を吐く奴に遇つては叶はぬと、拾はぬ方の男がひそかに語つたものであつた。

如何にも論外の無法に違ひ無かつたが、田舍にはまだ斯うした感情の持主が居つたのである。極端に昔風の、物質に對して何の執着もない氣持から考へると、祭日にも隱れて働き度い位に、朝から晩まで仕事に熱中して、少しづつ家畜を增やして行く男の態度が、羨しいとか妬しいなどの氣持でなしに、度し難い馬鹿者のやうにも見えた

のである。まつたく狸一匹が、米一俵に近い相場のした年であつたから、折角先に通つても、福運を見逝すやうな者は、馬鹿者に違ひなかつたのである。

話がまた元へ戻るが、狸は時折人家の軒などへ、手負になつて迷つて來る事があつたさうだ。或家で早く戸を開けると、表の端に大きな奴が一匹よちよち歩いて居る。見ると犬にでも嚙まれたか體中血だらけにして、人が近づいても逃げる力も無かつたさうである。流石に其家では殺し兼ねて、折角の福を近所の若い衆に讓つてしまつた。

六　砂を振りかける

狸は人を嚇す場合に、尻尾で人の頭を撫でたり、後から砂を振りかけると謂ふ。鳳來寺道中の、追分を出離れて分垂橋の袂を通ると、狸が尻尾で頭を撫でると專ら言うた。それが或は事實であつたかど此の頃になつて思ふ事がある。橋の袂に赤松が五六本立つて居て、中に一本道の上へ幹の差出たのがあつた。もう三十年も前であるが、

村の某の狩人が暮方通りかゝると、犬が上を向いて頻りに吠え立てる。もう夕方が近いので、其まゝ通り過ぎようとしたが、犬の吠え方が劇しいので上を仰ぐと、横ざまになつた幹に、狸が一匹上つて居たさうである。直ぐ擊殺して提げて來たが、全く思ひ掛けぬ事だつたと語つて居た。

八名郡大野から遠江へ拔ける途中の、須山の四十四曲りの坂へは、狸が出て通る人に砂を振りかけると言うた。それで夜分など滅多に通る者もなかつたさうである。或時大野の者が、須山から日を暮してこの四十四曲りにかゝると、後から少しづつ砂を振りかけるものがある。初めは左程氣にもしなかつたが段々薄氣味惡くなつて、足を速めると尚盛にかける、果はおそろしくなつて、どんどん駈け出すと、駈ける程益々振りかける。夢中で坂を駈け崩れて來て、途中の人家へ飛込んださうである。後になつて考へると、自分の穿いて居た草履が跳ねる砂だつた事が判り、大笑したさうである。然しこんな話は別として、四十四曲りの或個所では、現に小石混りの砂を振りか

けられた者が確かにあつたと言ふ。又某の修驗者は、其處を通り狸に誑かされて、一晩中山の中をうろついて、須山の村で借りた提灯は骨ばかりになり、自分の着物も殆ど滅茶々々に引裂いて、體中を爪掻きにして朝になつて歸つた事があつたと言ふ。修驗者を誑かす程の狸なら、砂をかける位は朝飯前の仕事だつたかも知れぬのである。

七　狸と物識り

貉の皮を狸と間違へて買つた話がある。ひどい山の中などで、よくある手だと言うた。板に張つて吊してあるのを、何も知らぬ町育ちの行商人などが、何の皮だ成程こりや狸だねなどと、お愛想のつもりで言ふと、ああ狸だが幾何かに成らぬかいなどと空恍けて居る。何だ此貉狸の相場を知らぬのかと、遂ひむらむらと慾が出て狸でその値なら安い物だ、如何にもこんな山の中では、世間の相場は知るまいなどと一人極めして、慌てゝ金を拂つて擔いで來た。お前貉の皮を買ふかいなどと、途中で話しかけられて、ぎよつとしたと謂ふ。貉では狸の値の十分一にもならなかつたのである。何處から買つて來た、あゝ又彼奴に欺されたかなどと笑はれて、泣き出す者もあつたさうである。それでも未だ諦め切れないで、狩人といふ狩人の家へ、一々寄つて訊いたさうである。幾何でもいゝから、其處らに置いて買つておくれと、投げ出して行く者もあつたと言ふ。

貉と狸とは見た目で直ぐ判つたのであるが、それは狩人の話で、素人には容易に判別がつかぬ。さうかと云うて狩人でも判らぬ場合も亦あつた。

狸だ貉だと散々爭つた末に、村の物識りの處へ擔ぎこんだ話がある。その物識りと言ふのは盲目だつた。座敷に寢て居て言うたさうである。肢にあかぎれがあるかと、さう聞かれて見たら如何にも肢の裏にあかぎれがあつた。そんなら狸だぞよと、寢て居て見分けたなどと言うた。その變な物識りは、十七の年に眼を患つて廿歳の時には皆目見えなかつたさうである。それでゐて村の事なら何んでも識らぬ事は無かつた。

眼が見えなくなつても山の地境や地形、何處の山にどんな石のある事迄、不思議な程よく識つてゐた。あの人が眼が見えたらと、惜まぬ者は無かつたと謂ふが、晩年は殊に氣の毒な境涯だつたさうである。

女房に死別れてから、後添を迎へ、その間に娘が一人あつたが、間もなく後添は恐ろしい業病が出て、村で作つた山の中の小屋で死んだ。その後娘が十三の年に、罪業障滅の爲とあつて連立て廻國に出たさうである。四國八十八ヶ所から、奥州の鹽竈迄廻つたと言ふ。最後に村へ歸つた時は、江戸の雉子橋御門の長屋で、從弟に遇つて來たと言うて、ひどく喜んでゐたさうであるが、それから間もなく亡くなつた。その娘も業病の母を持つたために、可哀相な身の上であつた。ひどく親思ひの娘だつたといふが、十三の年から廻國をし通して、どうした事情であつたか、十七の年に美濃の岩村で、雪の中に凍えて居たと言ふ。それが廻國の姿であつた。助けられて家へは歸つて死んださうであるが、もう百年近くも前の事である。

八　狸の火

狸は矢張り火を點すと謂ふ。青いとも亦赤い色をして居るとも謂つて、定つて居ないやうである。然し一方には、狸の火は赤く、狐の火は青く、天狗の火は赤くて輝きがあるなどと尤もらしく語る者もあつた。山陰には入つても、木立に障ぎられても、同じやうに見える處に特色があるといふ。

長篠の醫王寺から、横山の方へ向つて山を越して來て、長篠の本街道へ出る辻のあたりは、よく狸が出て嚇す處と聞いたが、亦其處で火を點すとも言うた。

山路をだらだら降つて來て本街道の辻へ出ると、前が寒峽川の廣い谿で、谿の彼方に、大海や出澤の村の灯がちらちら見える。更に行手には横山の村の灯も見えた。狸や狐の火でなくとも、淋しい感じのしたものである。亦時とすると、遠くの雁峰山のあたりへも見える事があつた。私が小學校を卒業した年には、夜學に通つて毎夜其道

を通つたもので、坂を降つて來て向ふに灯を見て一瞬、ハツとした事はある。さうかと言うて一度もそれらしく思ふものを見た事はなかつた。

或は亦、丁度その邊りから、恠しい人影が後になり先になり隨いて來る事がある。こつちが止れば向ふも止り、急げば急いで、村の入口迄來て消えるなどとも謂うた。現にさうした經驗をした者が、私の聞いたゞけでも何人かあつた。某の男が出遇つた時は、村の入口の橋迄來ると、どんどん脇へそれて、川の中へは入つてしまつたと謂ふ。

私が子供の頃である。其處で恠しい者に遇つたと言ふ男が、夜中に大戸を叩いた事がある。近所の村の物持の主人だつた。何でも其處へかゝつた頃から、前に立つて影のやうに歩いて居る者があつた。村の入口へ來ても中々姿を消さないで遂にお宅の前迄來たと言ふ。これからまた山を越して歸る氣にはなれぬから、どうか泊めて貰ひ度いと賴んで居た。それも矢張り狸の惡戲ださうである。尤もさうした場合に、狸ならば最後に姿を消す時に、ひどい音をさせるから直ぐ判るともいふ。

九　呼ばる狸

正月薪刈りなどに行つて、山の上で一人働いて居ると、何處ともなくホイと呼ぶ聲がするさうである。雨にでもなりさうな、とろんとした溫かい日などに多かつた。亦女が一人で居たりすると、きまつて呼ぶと云ふ。

ホヲイと、氣の所爲か、出ない聲を無理に絞り出して居るやうにも聞えるといふ。こちらが鉈でタンタンと木を伐ると、向ふも同じやうな音をさせる。ザーツと木を倒すと矢張りさせる。明るい日がかんかん照つて居る時刻だといふ。誰だと呼んでも返事はなくて、暫くすると亦ホイと呼ぶ。果は氣味が惡くなつて歸つて來たなどと言ふのである。

さうかと思ふと、一人で炭を燒いて居る時などに、間近の山の蔭から、笛の音や太

鼓で、如何にも賑やかに囃し立てゝ近づいて來る。今一息で、あの曲り角を出るかなどと思ふ間に、ふいと消えてしまつたりする。之もみんな狸の惡戯だというて居る。

狸は人を呼びかけて、それをきつかけに段々呼交して、相手が負けたら喰はうといふ。それで夜中にうつかり返事は出來ない、返事をしたが最後何處迄もやらねばならぬといふ。夜中に一人で居る時に、迷ひ騙されて返事をしたばつかりに、自在の茶釜を飲干しても未だ足らなんだなどと言ふ。長篠村吉村の寺屋敷の裏では、家内三人で代る代る返事して、やつと負けずに濟んだ。或は返事の代りに木魚を叩いて夜を明したが、朝見たら軒下に恐ろしい古狸が、腹を上にして死んで居たといふ話もあつた。

瀧川の奥の大荷場の一つ家では、近くのむくろじ谷に棲む狸が、毎晩惡戯をして仕方がない。そしてシンゾの藤兵衛ボットボトと云うてからかつた。藤兵衛も負けては居らず、さう吐くお主もボットボトというて、一晩中呼ばり通して、朝見たら軒下に大狸が死んで居たと言ふ。此大荷場は一つ家で、然も藤兵衛が一人者の處から、狸と呼ば

り合つて暮して居るげななどと、惡口をいふ者もあつた。

鳳來寺の奥の院などで、夏分雨乞ひのあつた後には、夜になつて定つて同じやうな笛太鼓の音がしたと言ふ。此方は狸とは言はずに天狗の所爲だというて居る。雨の降る晩などに、ポトポトと聞えたのが、同じく狸の腹鼓であつた。そんな晩に坂を登つて行くと、御坂の脇で彼方でも此方でも、ポトポトやつて居たといふ事である。

一〇　眞黒い提灯

狸の話では、何と言うても化け話が多かつた。

錢龜　東鄕村大字出澤字錢龜）の行者下へは、毎度狸が出て、人を嚇すといふ噂があつた。縣道に沿つた僅かな家並で、籔蔭の陽もろくろく當らぬやうな處であつた。居酒屋が一軒あつて、近所の者がよく酒を呑んで居て、夜遲くなつてから、谿を隔てた私の家などにも、酔どれの唄が聞えたものである。

其處の家並みから、一町程離れると昔の村境で、道上の岩の頭に、榧か何かの大木が道に被さりかかつて、根元に行者の石像があつた。馬頭觀音や六地藏なども祀つてあつた。道下は眼の下に寒峡川の急流を覗く凄い場所であつた。

これは現に生きてゐる某の話で、某が四十五六の折の逸話であつた。或晩其處を通りかかると、向ふから眞黑い提灯が一つ來たさうである。その提灯と摺れ違ひざま、ひよいと先方の顔を見ると、白髪頭のひどい婆さんである。ハテ見た事も無い人だがと思つて、直ぐ後を振返つて見たが、もう提灯も婆さんの姿も見えなかつた。その時は身内がゾクゾクしたさうである。すると今度は行手の道に、長々と寢てゐる獸があつた。犬のやうでもあり亦、狐だか狸だか薩張り得體が判らない。不思議な事にその獸が、餘り大きくもないのに道一ぱいになつた事である。跨いで通るのも氣持が惡いので暫く立止つて思案したが、結局尾の方をそつと通り拔けた。すると急に四邊が眞暗になつて一歩も前へ進めなくなつたさうである。うつかりすれば、一方の谷へ落ちる心配があるので、仕方無く度胸を据ゑて其處へ踞みこんだ。さうして腰から煙草入を出して一服喫ひかけたといふ。その間に行手の方を見るともなしに見ると、どうやら白いものがぼうつとある。眤と見て居る中に氣が付くと、それは行手へ續いた街道であつた。空を仰ぐと星がからりと出て居る。遠くの山も見えて、川瀨の音も聞える。まるで夜が明けたやうな氣分で其儘家へ歸つたが、それからは何事もなかつたさうである。

二十年ばかり前の事である。之も狸の惡戲というて居るが或は幽靈だとの說もあつた。村でたしかに死んだ筈の人が、其處を通つて行く姿を見たといふ者もあつた。或は九十幾つで死んだ婆さんが、杖に縋つて來たのにたしかに逢つたと言ふ話もあつた。それこれ考へると狸の惡戲といふのは、狸の爲には寃罪であつたかも知れぬ。然し又一方では、此處から山續きのフジウの峯の狸が、數町離れた算橋の鈑下へ、時折出張るといふ說もある。

算橋は家が二軒しかない部落で、道下がずつと田圃になつて居た。其處へも矢張り婆さんに化けて出ると言ふ。或夜更けに出澤の者が飛脚に行くと、前に立つてゆく婆さんがあつた。眞暗い夜にも拘らず、着物の唐棧の縞柄がはつきり讀めたと謂ふ。それが瀧川の入口の、大荷場川の橋の袂まで來ると、其處から川の中へ、跳び込んでしまつたさうである。

この話は狸でない事は判つて居るが、以前近くの淵で、砂利運びに雇はれて居た女房が、乘つて居たカモ（筏の一種）から落ちて溺死した事があつた。その女房が溺れた時の姿で、忙しさうに田圃を道の方へ來る姿を、時折見かけたといふ者もあつた。乳呑兒を遺して氣の毒だと專ら噂のあつた際だつたから、或はさうした幻影を見たのであらうが場所は矢張り同じであつた。

一一　鍬に化けた狸

私が未だ五つ六つの頃であつた。街道端に茶店を出して居た一人者の婆さんが、或雨の降る晩に追分から家へ歸る途中、北山御料林下の土橋から、下の谷へ轉がり落ちて死んだ事がある。おきよ婆さんとか云つて相當小金も貯めて居たと言ふ話であつた。傘を差したまゝ死んで居たさうである。狐が突落したとも、また近くの盗人坂の狸の仕業とも言うた。

盗人坂は追分の村端れであつた。どうしてそんな名をつけたか知らぬが、村を出離れて北山御料林の、暗い森の中へ掛らうとする手前で、今は道路の改修で無くなつたが、以前は崖に沿つた嶮岨な坂で、かつて馬方が落ちて死んだ事もあつたりして、狸が出なくても、充分淋しい處であつた。日暮れに其處を通ると、きつと狸が出て惡さをすると言ふ。村の某の男であつた。暮方通りかゝると未だ人顏の判る時刻であつたが、道のまん中に大男が立つて居て、それがどつちへ廻つても通れぬやうに邪魔をする。大抵の者なら怖れて逃げるのだが、血氣盛りの剛膽者だけに此奴と云ひながら、

力任せに胸元を突退けた。すると男の姿はフッと消えて、何物かカタリと音がして倒れた物があつた。氣がついて脚下を見ると、銃が一挺倒れて居たと言ふ、大方誰かゞ置忘れたのであらうが、それを狸が利用して人間に見せたのだらうと言ふ。

これは其坂が無くなつた後の、明治四十年頃の話である。追分の某が、他所村へ田植の手傳ひに行つた歸りにそこの手前迄來ると、何處から出たか一つの怪しい人影が先に立つて行く。變な事だと思つて居ると、木立を出離れる處で立止つて動かなくなつた。某も少し氣味が惡くなつて、其處に止まつて暫と樣子を見て居ると、その怪しい影が段々山の方へ寄つて行つて、最後に崖へはり附いてしまつた。それでやつと歩き出したが、傍を通る時見ると、もうその姿は無くなつて何か黑いものが、氣の所爲か見えたと言ふ。之も人顔の判るめそめそ刻だつたさうである。其時直ぐ後からやつて來た者があつたので訊ねて見たが、怪しい者には一向氣づかなかつたと答へたさうである。勿論此話は、狸とも何とも言ふ訣では無かつた。

盗人坂の狸は、夙くに撃殺してしまつて、今はもう出ぬとも謂うた。某の狩人が煮て喰つたが、古狸で肉がこはくて薩張り美味くなかつたとも言ふ。肉がこはくて美味くなかつたとは、古狸を退治た話に、必ず附いて廻る文句であつた。何處其處の狸を撃つて煮て喰つたが、おそろしく肉がこはかつたなどと、よく言うたものである。

一二　狸か川獺か

狸が出たからとて、必ずしも其處に棲んで居るとは決つて居なかつた。私の村の上の端れへ出る狸は、山續きの倉木の山から通つて來ると謂うた。化けた話は餘り聽かなかつたが、時々えらい音をさせて通る人を嚇すと謂ふ。

村端れだけに、街道脇に張切りの松といふのがあつて、赤松が蛇のやうに街道の上へのたり掛つて居た。傍には馬頭觀音や道祖神などの石像が並んで居て、道の下手に

辨天を祀つた小さな池があつた。夏分は其處で雨乞ひなどしたものである。或時某の男が夜遲く通りかかると、竹を一束擔いで來て直ぐ脚下へ投げ出したと思ふやうな、ひどい音をさせたと謂ふ。男はそれに驚いてそのまま引返して來て、その夜は私の家へ泊つていつた。

或大工は、黃昏時に弟子と二人で通りかかると、張切りの松の上から、眞白い獸が道下へ向けて跳び下りた。すると續いてえらい音がしたさうである。誰でも此處へさしかかると、頂がぞくぞくすると言ふ。村の物持の某は日が暮れるともう其處を通れなかつた。その爲生涯通らずに終つたとも聞いた。村の者ばかりでない、反つて他所の者が氣味惡がるとも言うた。誰の話を聞いても、此處で嚇されたのは、定つてえらい音であつた。それでどうも狸では無いらしい、川獺では無いかといふ說もあつた。辨天の池から山を少し下ると、寒峽川の鵜の頸といふ淵がある。其處から川獺が上つて來て遊んで居るのが、人の通りかかつたのに驚いて、池の中へ跳び込む、その音で

はないかと言ふのである。

何にしても氣味の惡い處であつた。或男が日暮方に通りかかると、道の脇の石に腰をかけて居る人があつた。傍へ寄つて見たら、それが男だか女だか、又前向きだか後向きだか薩張り判らなかつたさうである。

何も此處に限つた譯ではないが、眞夜中などより却つて日暮方の方が氣味が惡いといふ。ぼんやり人顏の見える時刻に、兎角不思議な事が多かつたらしい。

一三　娘に化けた狸

鳳來寺村門谷の高德の山に、杣が小屋を差して居た時の事だと謂ふ。その小屋には三人泊つて居たさうであるが、或晚一人が山を出て門谷の馴染の女の許へ寄つて遊んで來た。すると其翌る晚三人が爐に向つて居ると、だしぬけに小屋の垂莚を上げて顏を出した者があつた。見ると若い女で、而も一人が前夜會つて來た女であつた。へゝ

と笑つて居たさうである。どうも怪しい、これはてつきり狸の悪戯に違ひないと覺つて、それでも面白半分にからかつて見た。お前はどこだいと言ふと、俺や門谷の田町だと答へた。田町の誰だいと言ふと、へゝゝと笑つて口を押へて居る。丁度その時皆なして鳩を燒いて喰つて居たので、喰はんかいと言うて一串差出すと、默つて受取つて喰つてしまつた。それなり娘は歸つて行つた。其翌晩も同じやうにやつて來たさうである。三日目の晩に小屋の入口へ鳩の肉を餌にして虎挾みを仕掛けて置くと、翌朝一匹の古狸が掛つて死んで居た。それ以來娘はもう來なかつた。後で其狸を煮て喰つたが、矢張りこはくて美味くなかつたと言ふ。

娘に化けた訣ではなかつたが、鳳來寺村長良の村端れの谷に出た狸も、狩人の掛けた虎挾みに掛つて以來出なくなつた。それ迄は崖の上から砂を振りかけたり、石地藏に化けたりして、通る者を惱ましたものと言ふ。

狸が石地藏に化けた話はまだあつた。化けたと言ふよりも、使つたと言ふ方が適當かも知れぬ。出澤の村から谷下へ越す山の途中に、村雀と言ふ神樣があつた。その傍に鉢冠り地藏と言ふのがある。その地藏が時折化けて通る人を嚇すのは、矢張り狸の仕業と專ら言ふ。或月夜に村の讃原某が通りかかると、地藏がゲラゲラ笑ひ出したさうである。豫て覺悟をして居たので、腰の刀を拔くや否や斬りつけて、其儘歸つてしまつた。翌朝行つて見ると、地藏が胴を眞二つに斬られて居た。そのまま今に胴中から二つに割れて立つて居る。それ以來もう化けなくなつたともいふ。

別の話では、これは狸の仕業でなくて、地藏自身が化けるのだとも言ふ。たしかに俺が化けたと名乘る訣でないから、遽かにどつちとも決められない問題である。

一四　狸の怪と若者

私の村の池代の山の大森には、えらい古狸が棲んで居て、地續きの深澤の橋へ出て、

通る者を嚇すとは専ら言うた事である。恰度村の中程で、上と下の組の間の谷に架つて居た橋である。もう二十年ばかり前であるが、橋の近くに住んで居た某の男が、夜更けに一人歸つて來ると、橋の欄干に坊主が一人凭れて居たが、それが見る見る大きくなつたのに、膽を潰して遁げて來たと言ふ。

五十年許り前のこと、村の某は夜分此處を通りかかつて、狸に嚇されたのが因で死んで了つたといふ話がある。未だ宵の口であつたさうであるが、橋の近くにある家へ血相變へて駈込んで來たといふ。よくよく物の怪を見たと見えて、戶口でハアッと言つたぎり、土間へ倒れてしまつて、後は口一つ利けなかつた。其夜は其處へ寢かして、翌日家へ連れて行つたが、四五日して息を引取つたさうである。病んでゐる間も、絕えず怖がい怖がいと言ひ通したさうであるが、果してどんな怪を見たことか、家人が堅く秘してゐて、一切他人には話さなかつたといふから判らない。未だ二十かそこいらの若者で、極く實直な男であつたが、何でも下の村の女の許へ、通つて行く途中で

あつたとも言うた。

三州橫山話に、老婆を殺して山へ持つて行つたといふ話も、同じ狸の仕業と言ふ事である。深澤の橋にはクダ狐も出ると言うた。或は又其處で幽靈に遇つたと言ふ者もあつた。極く新しい話で、近くの家に葬式があつて、暮方村の者が橋を行つたり來たりして居た。そこへ一人が橋の袂迄來ると、土手に男が凭れかかつて此方を見て居たが、通り過ぎて振返つて見ると、もう影も形も無かつた。大方幽靈だらうと、大騷ぎをやつたさうである。

村を出離れて、長篠へ越す途中の馬崩れの森は、田圃を三四町過ぎた處に、一叢大木が茂つて居て、日中でも薄氣味の惡い處だつた。此處からずつと長篠の入口迄山續きになるのである。其處にも亦惡狸が居て、通る者を時折嚇すと言うた。或は又山犬も惡い狐も出る、その何れにしても問題の場所だつたのである。私などの此處を通つた經驗でもさうであるが、暮方など未だ明るい田圃道から、暗い森の中へ足を運んで

行くと、地の底へでも入るやうで自づと心持が滅入つて來た。又反對に暗い森の中から、田圃道へ出るとほつとするが、それだけに何だか後から引張られでもするやうな不氣味を感じたものである。そんな訣か田圃の手前の、村の取付にある家へは、以前は夜分異者になつた男が、時折驅込んで來たさうである。

或男は暮方森の手前に差しかかると、一町程前を、太い尻尾を引ずつて、狸が歩いて行くのを見たが、道の中央でくるくる廻り出した。そして道下へ跳び込んだと思つたら、娘になつて上つて來たなどと、狐にでもありさうな事を言うて居た。某の修驗者は、夜更けて一人歩いてゐると、行手に豆絞りの手拭で頰被りをした男が、鼻唄で行くのがどうも樣子が怪しいと思つて、一心に九字を切ると、果して道下の池へ跳び込んでしまつたと、眞面目に語つたものである。

これは私の祖母の話であつたが、父が未だ少年の頃、夜遲く二人で通りかかつた時、恰度森の中程で何か怪しいものを見たさうである。大方狸の惡戯だらうと云うたが、何を見たのか、それ以上聞いても話さなかつた。

一五　塔婆に生首

狸が出たといふ場所が、申合せたやうに、村端れや境で、道祖神や六地藏を祀つた地であるのも少し氣になり出した。この話もさうした場所での出來事である。

長篠の醫王寺の近くにあるノタコルの山は、以前から古狸が棲むとて評判の處だつた。水上（ミヅガミ）の部落と、長篠の本郷とを境した、ちよつとした窪合の峠で、道路が三叉になつて居る。暮方其處を通ると、道に何やら汚ない袋のやうな物が落ちて居るが、うつかり拾つてはならぬ、狸に化かされるなどと聞かされたものである。道を挾んで古木が茂つて居て、其處に石地藏が立つて居た。

近所の若い衆が此處の山續きで狸の穴を見つけて、遊び日に掘つて居ると、其處へ醫王寺の和尚がやつて來て、皆の衆ご苦勞と言うて去つた。それは實は穴の主の狸が

化けたので、何時か拔穴から這出して、若い衆をからかつたのだと言うた。或は亦その折好い天氣だつたが、急に雨が降つて來て、皆が濡れしよぼれて掘つて居る處へ、和尙が傘を差して來て嘲つた。村の某は其時居合せた一人だつたなどと、眞しやかに聞かされたものである。

私には祖父に當る人の事であるが、或時長篠の本郷から日を暮して此處へ差しかかると、どう道を間違へたのか、醫王寺の方向へ降るのを、どんどん脇へ外れて行つて氣が附いた時は、山續きの村の卵塔場へは入つて居た。前に新佛の墓があつて、白張の提灯と新しい塔婆が立つて居る。見るとその塔婆の尖端に、男の生首が突通してあつて、目を開いたと思ふと、クスッと笑つたさうである。祖父は平素から剛膽な質だつたので、それを見ると、直ぐに狸の惡戲と氣がついた。何だ手前の相手などして居られるかと言置いて、其儘後も見ずに卵塔場を出て來たさうである。それから家へ歸り着く迄、もう何事も無かつたと言ふ。此話は祖父が若い頃幾度も物語つたさうである。之は祖父の妹に當る人から聽いた話である。

ノツコシの峠近くの部落では、夕方狸に化かされて、此處の山へ連れ込まれる者が度々あつたと言ふ。そして又夕方などに其處を通りかかると、何處からともなく、負んでくれ負んでくれと呼ぶ聲がするとも言うた。內金の左官の某の男は、或晩醫王寺の方へ向けて峠を越して來ると、突然闇の中から負んでくれといふ聲がして、何やら背中へ負さりかかつた物があつた。某は怖ろしさに夢中で其まゝ馳け出したが、醫王寺の明りが見える處迄來ると、ふつと背中が輕くなつたと言ふ。

此處の狸は、もうとつくに狩人が擊殺してしまつて、其後出るのは、山續きの吉村から通つて來るのだともいうた。さうかと思ふと、いや未だ居る、現に誰それが化されたなどと言ふ。さうかそれぢや擊たれた奴は別の狸かなどと、話が又新しくなつて來た。すつかり噂が根を斷つて終ふのは容易ではないのである。

長篠の本郷と內金との境にある施所橋の上へは、晩方に狸が化けて出ると專ら噂が

高かつた。雨の降る晩に傘を差して先へ行く男のふいと後ろを振返る顔を見たら、三つ目の大入道だつたとか、又或男が夜更けて通りかかると、橋の欄干に寄掛つて居た男が其儘下へ飛下りて行つたとも言うた。然も此橋などは橋の袂近く人家があつて、狸の出る噂の場所はほんの五間か七間の處であつた。狸が出るには、必ずしも人家を離れた事を必要條件としなかつたらしい。

一六　絆の衣を纏つた狸

三河の伊良胡岬の丁度中央頃、赤羽根と伊良胡村の境に聳えてゐる越戸の大山は岬中での第一の高山である。

此處に程近い大久保の谷には昔から悪い狸が棲んで居ると專ら言傳へられてゐた。未だ古い出來事ではないと聞いたが、近くの者が朝早く山を越して仕事に出ると、定つて行衛が判らなくなる。それが村の者だけではない、旅商人などで日を暮して通りかかつた者も皆目行衛が知れなくなる。又葬式歸りの和尚と小坊主二人が、日暮に山に掛つた儘で還らなかつた。それが或時、行衛の判らなくなつた者の持つてゐた手拭が、血に染つて山の木の枝に引掛つてゐた事から、山中に棲むものに嫌疑がかけられた。それで村中評議の上山狩りをする事になつて、その中の一隊が、大久保の山深く入込んでゆくと、一ヶ所未だ誰も知らぬ岩窟があつて、その奥に大きな狸の穴を發見した。然もその手前に、嘗て行衛を失つた者の履物が片方落ちて居た。愈々此穴が怪しいとなつて、穴の周圍に矢來を結つて置いて掘りにかゝつた。おそろしく深い穴で、三日續けて掘つてやつと奥に辿り當てたと言ふ。中は廣さ八疊敷程もあつて、その奥に更に一段高い處がある。見ると絆の衣を纏つた大狸が、人々の立騒ぐのを尻目にかけて、端然と坐つて居たさうである。村の者も一度は驚いたが、此奴遁すものかと寄つて集つて撲殺した。然し狸は觀念した樣子で、些しも荒ばれる事は無かつたと謂

ふ。傍にはそれ迄狸の餌食になつた人々の、衣類や骨の類が堆く積んであつた。狸の着けて居た緋の衣は、例の葬式飾りの和尚の物であつたと言ふが、それ以來大久保の山には、何の禍ひも無くなつたと謂ふ。此話は豊橋の町の或婆さんから聴いたが、本人は土地の者から直接聞いたと言うて居た。緋の衣は着て居なかつたが、狸が人を殺して喰つた話は、他にも聴いた事がある。私達が子供の頃などは、狐と狸と何れが恐ろしいかなどと言うたもので、どちらも人を喰ふと信じられた。その頃聞いた話に八名郡鳥原の山でも、狸の餌食になつた者があつたさうである。

狸が人を取り喰らつた話の一方には、女を誘拐して女房にして居た話もある。寶飯郡八幡村千兩の出來事であつた。娘が家出して行衞が知れなくて、方々探して居ると近所の病人に狸が憑いて、俺が連れて行つて女房にして居ると言ふ。場所はこれこれと、村の西北に聳えて居る本宮山の裏山に在る事を漏したので、人を雇つて山探しをすると、果してひどく嶮しい岩の陰に居た。其處は雨風など自然に防ぐやうに出來て居る場所であつた。後になつて様子を問ひ訊すと、狸か何か知らぬが、山の木の實や果物の類を、時折運んで來て食はして呉れたと語つたさうである。その娘は平生から、少し足りぬやうな様子があつたと謂ふ。私が十二三の頃鄰村の木挽が語つてゐた。

一七　狸依せの話

以前は村の若い者が五六人も集ると、狐狗狸だの西京鼠其の他狐や狸を依せて、慰み半分に遊んだものであつた。其中でも狸依せは最も早く亡びて、後には滅多にやる者は無かつたが、格別方法が面倒と言ふ訣でもないから、時折行ふ者もあつて矢張り流行もしたのであらう。

依せる方法の大體を言うて見ると、目隠しをさせたり、白紙を仕扱いて幣帛の代りに持たせる事などは、他の神寄せ狐依せの類と變りはなく、唯呪文が少し異つたゞけ

である。試みにそれを掲げて見る。

ナンエトロトロ、ナエトロミロ

アナヤマハヤマ、ハグロノゴンゲン

一、ダイミヤウジン

オイナメ、メナレ　オイナメ、メナレ

唯これだけの文句を依る迄は何回でも繰返すのである。狸が人に憑く迄の前後の状況を言うて見ると、最初被術者の顔色が、段々蒼白くなる。續いて呼吸が急しくなるにつれて今度は顏色が次第に上氣して、殆ど眞赤になる。さうなると體中が劇しく震へて時々坐つた儘踊り上るやうになる。此時は狸が道中を急いでやつて來る處だなどと謂ふ。其處を過ると、再び顏の血の氣が段々と薄らいで行つて、最後に眞蒼になると體が急に落込んだやうに、少さくなつてしまふ。斯うなるともう狸が憑いたのであるから、そろそろ問答を初めてもよいのである。勿論これは村の若い衆のやつた方法で、

或時旅の行者が行つた時は、呪文や作法が全然異つて居たさうである。

憑いた狸を歸す時は、背中に犬の字を書いて、最後の點を強く打てば、それで好いのであるが、此方法を怠つたり、或は目隱しの手拭が自然に解けたために、離れた時などは、後になつて近所の子供や老人に憑いて困つたさうである。それに付いて或老人の談に據ると、事が了つてから、自分の子供に憑くらしく、夜泣をして仕方がなかつた。抱いて居ればさうでもないが、床に寢かすと、體が急に强直して火のつくやうに泣き出す。來る晩も來る晩も、女房と交る交る抱いて居て夜を明した。さうさう家の中にも居られぬので、外に出て子供を揺り揺り歩いて居たが、或時などつくづく狸など依せるものでないと後悔して、歩きながら子供と一緒に泣いてゐた事もあつたさうである。其間には種々な魔除けの方法などもやつて見た。短刀をそつと枕邊に置いて見たり、神社の御符を布團の下に敷いて見たり爲たが、一向効めは無かつた。その中ふッと思ひ出して、山犬の上顎で造つた根附を取出して來て布團の下へ入れると、

それなり嘘のやうに夜泣きが止んでしまつたと謂ふ。以前は山犬の上顎を乾上げた物で、根附を作つて魔除けとして持つて居る者がよくあつたのである。顎の内部を紅く漆塗りなどにして、腰に下げて居る人を、時折は私なども見た事があつた。

狸依せなども盛に方々でやつて居た頃は、訣もなく依つたさうであるが、一度流行しなくなつてからは、容易に依らなくなつたとも謂ふ。狐狗狸などもさうであつた。流行した居た頃は、面倒な手数を掛けないでも、酒の席で戯半分に箸を三本結へて立て、上に皿を冠せて唱へ言をすると、それでもう膳の上をヨチヨチ動き出したさうである。あのよく依つた時分には、狸なども其處いらにどれ程でも遊んで居て、こちらが招くのを待つて居たのかも知れぬなどと、眞面目になつて話した老人もあつた。

一八　狸の印籠

狸から福分を授かつたと謂ふ類の話が、極く僅かではあつたが遺つて居た。長篠村大字富榮字富貴の某家には、むかし諸國行脚の狸から譲られたと謂ふ一個の印籠があつた。諸國行脚の狸はちよつと怪しいが、大方僧侶に化けた狸の事でもあつたらうか。その爲家が永く富み榮えて、家數三四戸しかない部落を、富貴と呼んだのも、その家に依つて出來た名と謂うた。その印籠が轉々して今は近くの村の物持の家に秘藏されて居る。從つて代々の持主であつた家も、もう昔の面影が無くなつて居たのは是非もない事であつた。その印籠は、ふとしたことから私も一度見た事がある。黒塗りの中は粗末な梨地に塗つてあつた。惜しい事に蓋は久しい前に失つたとかで見當らなかつた。打見た處では、格別狸が與れたらしい形跡もない唯の印籠である。

妙な事にその印籠の由來について、別に柳生十兵衛が武術修行の折に、遺品に置いて行つたとも言うて居る事であつた。狸と柳生の剣術使ひと、何の縁故も無ささうであるが、どうしてそんな說が出來たかは判らない。

富貴の村から、谷一つ越えた長篠村内金には、これは亦文福茶釜を持傳へると言ふ

家があつた。

街道からは山寄りの、村人が入りと呼ぶ家で、正福寺と謂ふ古い禪宗の寺の門前に屋敷があつた。つひ先代迄は村一番の物持で、豫て村の草分けでもあつた。文福茶釜の由來として言傳へて居る處では、先祖が正福寺のずつと以前の和尚から讓られたもので、その茶釜がある爲に、永く福運が續いて來たと言ふのである。昔話にあるやうに、狸が化けた類の話は私は未だ聽いては居ない。從つて正福寺に狸の和尚が居たとも何とも言はぬ事である。どうも話が幾通りもあつて煩はしいが、別の話では、その茶釜は天正時代、長篠の城にあつた物で、城主が國替への折遺して行つたもので、從つて此家は祖先が武士であつたと言ふ。

もう十年程前になるが、その茶釜を見せて貰ふ爲わざわざ訪ねた事がある。以前の屋敷跡の傍に、今は小さな構へを結んで居た。五十恰好の、何處か暗い感じのする内儀が一人居て、詳しい話をしてくれた。二十年前迄は此處の爐に掛けて使つて居たが

もうありませんとの答であつた。尤もその前から、蓋と取手は別物だつた。或時鑄掛師に持たせてやると、蓋と取手を失くして來たのださうである。それ以來取手は唯の針金で間に合せて居た。その後引續く不運に、茶釜迄も幾何かの代に親類の者に持つて行かれてしまつたのださうである。今は其處に飾つてある筈、何なら其方へ行つて見てくれるやうとの挨拶であつた。其折の話の模樣では、肌が赤味を帶んだ鐵で、離れて見ると陶器のやうに見えたさうである。一方に鐵瓶のやうな口があつて、口の附根から、鼎の角の恰好をした三つ叉の脚が出て居たと言ふから、茶釜としては風變りな物であつた。

あの茶釜だけは家の寶だで、何としても手放すまいと思つたがと、そつと目を拭いたのに、思はずつり込まれて悲しくなつた。未だ他に系圖と立派な腰の物もあつたが、悉く失くしてしまつたと、散々情ない事を聽かされて歸つて來た。後で聞いた話だつたが、その茶釜は、持つて行つた親類の男の手から、昔話以上に諸方を渡り步い

たさうで、豊橋から名古屋東京と、實は思惑で持廻つたのだが、男の思ふやうには金にならなかつたと言ふ。仕方なく再び持歸つて藏つてあるとの話である。とすると昔話の文福茶釜共儘に、再び元の家の爐口へ還るやうな日が無いとも言へぬ。

一九　古茶釜の話

文福茶釜の話の次手に、狸とは直接縁を引いて居ないかも知れぬが、唯の農家の爐口に吊してあつた茶釜の話がある。話の端が幾分でも狸の問題に觸れて來ればめつけものである。

この近在で使用して居た茶釜は、多く寶飯郡の金屋で出來たものと謂ふ。霰形で紙に疣が三つ出て居て、肩の處に蔓が附いて居た。別に丸形の中央が膨れて、腰鍔のある茶釜をば文福茶釜と呼んだのである。文福茶釜を使つて居る家は滅多になかつた。爐に掛けるのに工合が惡いからであらう。

前にも度々語つた追分の村の中根某の家は、家としても古かつたが爐に掛つて居る茶釜がおそろしく古い物であつた。形は尋常で心持ち丸形である。天正時代から天下の三茶釜の一つで大した物と謂うた。近頃になつて、其家の主人が時々思ひ出したやうに、其の茶釜を流しに持出して磨いて居るといふ噂を聞いた。今に三百兩位で何處からか買手が出て來るだらうなどと、一人極めして居たさうであるが、此頃では矢張り爐に掛かつて居るといふ。

私の家の近所にも、古いと言はれる茶釜を持つて居る家があつた。爐に吊してある處を通りかゝつた棒手振が見て、これなら五兩迄買ふと保證したとかで、大切にして居た。それは、格別變つても居なかつたが、底に疣のないのが普通の茶釜と異つて居た。

長篠村西組の赤尾某の家は、さして立派な暮しもして居なかつたが、長篠戰爭時代

から續いた舊家と言ふ。此家の爐に掛かつて居た茶釜は、戰爭當時用ひた陣茶釜であると傳へ、極く小形のもので、如何にも唯の茶釜で無い事は肯かれた。然し永い間問題にもならずに來たが、家が不如意になつて狹苦しい處に住むやうになつてから、近くの醫王寺の和尙が目を附け出して、大變な執心で遂に主人を口說落して、永代祠堂金の代に寺へ引取つて行つたと謂ふ。和尙はそれを、前からあつた長篠役の遺物の中に加へて、來客に茶を立てたりして珍重して居たが、明治三十幾年醫王寺の出火に遇つて、殆ど形ばかりに成つてしまつた。寺へ遣つたばかりにあんな事になつたと、元の持主の老人が、話して居るのを聽いた事がある。

長篠城の倉屋敷の跡に住んで居た林某の家の茶釜も、珍らしく古い物で、此家で家財整理をした折に、買取つた者が意外な金儲けをした噂があつた。林某の家も舊家で、長篠合戰の勇士の後裔であつた。

八名郡山吉田村新戸の某の家の茶釜も、古い物だといひ、珍らしく大きな茶釜だつたが、形は變つては居なかつた。湯が沸いて來ると、釜の肌色が赤味を帶んで來て、何とも言えぬ光澤が出て來るのが不思議であると言うた。後に主人が床の間に持込んで花を活けてあると云ふ話を聞いた。

斯うして竝べて見ると、古い茶釜を持つ家が、どれも舊家であるが、何れも家運が以前程でなくなつて居たのである。勿論不如意になつてこそ、自在鍵に掛けられた茶釜も問題になるのであるが、別に茶釜と家の福分とを、結びつける何物かがあつて、斯樣な話も出來て來るのでないかと思ふ。茶釜の中には福の神が居ると言うて、私なども幼少の頃は八釜しく言はれたものであつた。三州横山話に書いた村の長者の家は、主婦が誤つて茶釜に錐を當てたために、家の福の神が遁出して、忽ち沒落したと傳へて居る。今一段と資料を集めて行つたら、福の神の正體が意外な姿を顯はして來さうにも思はれる。

二〇　古い家と昔話

鳳來寺村峯の某の家は、おそろしく古い家で何代前に建てた事か想像も出來ぬ程、煤に埋もれて居たと謂ふ。どうした譯か此家には、昔から狸が棲んで居るといふ噂があつた。姿を見せるとは言はなかつたが、夜など客が爐に向つて主人と話して居ると時折バサリと變な音がして急に燃火が暗くなる事がある。その時は自在鍵の上から、何やら箒のやうな物が下つて居る。それが狸の尻尾だとも謂うた。それで居て格別惡い事をするとも聞かなかつたが、或時若主人が、近所の噂を氣にして、狸退治をする事にした。爐に青杉の葉を山と積んで、どんどん燻し立てると、流石の古狸も閉口したと見えて、壁から壁へサッと尾を打つけては、天井から天井を遁げ廻る音を聞いたが、遂に取押へる事は出來なかつたさうである。然し其事以來狸は屋敷を遁げ出して行つたとみえ、後には怪しい事もなかつたと言ふ。或は尙居るともいうたが十數年前家を取毀してしまつたさうであるから、何れにしてももう何處かへ宿替へした事であらう。

北設樂郡本鄕在の某といふ酒屋の土藏にも、狸が棲んで居ると謂うた。永い事酒を呑んで、腹のあたりが赤い色をして居る。それでその土藏を取毀した時には、澤山の同類と共に、次から次へ遁げて出たとも謂ふ。

長篠の城跡の近く、寒峽川と三輪川の渡合にあつた長盛舍といふ運送屋の荷倉にも狸が棲んで居ると專らいうた。其荷倉は久しい前に取毀してしまつたが、おそろしく長い建物で、中へは入ると、一方の端が見かすむ程だつたと言ふ。如何にも狸が棲みさうだと感心してゐた者もあつた。其處の狸が時折近所へ出かけて、人を化す事もあつたが、時折倉の中で亂痴氣騷ぎをやつて、太鼓や笛の音が、川を越した乘本や久間迄手に取るやうに聞えるさうである。

此の荷倉の話にしてもさうだが、古い大きな建物の形容に、狸が出さうだとは一般

にいうた事である。

　これで狸の話も略ぼ村料が盡きるから、八疊敷の昔話をしてそろそろ終りとする。私等が聽いた昔話の中で、狸を扱つたものは、文福茶釜にカチカチ山位なものであつたが、別にきんたま八疊敷と謂ふのがあつた。此話は二通りあつたやうで、子供の頃度々聽かされたものであるが、話が下品とでも思つたせいか、詳しく記憶しなかつたのは遺憾である。

　昔或處に一人の博奕打があつて、どうかした訣で狸の化けた賽ころを手に入れる。その賽ころは男の言ふ通りに目が出るので大分工合がよい。それでいろいろな物に化けさせたが、或時隣家に婚禮があつて、何か祝物をせねばならぬが生憎何も無い。そこで賽の目に鯛と出ろと言ふと、見事な赤鯛になる。男がそれを持つて隣家へ招かれて行く。鯛は一同から譽言葉を受けて、軈て臺所へ下げられ料理の段になつて俎に載せられると、急に跳ね出して遂々床下へ逃込んでしまふ。そんな訣で男が無理な註文ばかりするので、狸が愛想盡かしをして、別れる段になつて八疊敷を見せることになる。そして立派な疊を敷き詰めた座敷になるが、男が見惚れて煙草の吸殼を落すので、ジジと音がして座敷は忽ちに消えてしまひ、博奕打は一人廣い野原の眞中に坐つて居たと言ふやうな筋であつた。

　今一つは、一人の小僧が道で皺くちやになつた袋のやうな物を拾ふ。觸ると溫かで柔かでもぢやもぢやしたものである。その袋が、前の話と同じやうに小僧の言ふ儘いろいろの物になつて見せる。最後に小僧が八疊敷と言ふと、見事な座敷になつたが、中に一ヶ所變な括り目のやうな處がある。小僧がそれを氣にして、針の尖でチョイと突くと、ジジと音がして元の毛だらけの變な物になつてしまつて、もう役に立たなかつたと謂ふのである。

二一　狸の最後

村の狸の話もはや末であつた。屋敷近くの森や藪に居た狸は、村の者との呼くらべに負けて、軒下へ來て仰向けになつて死んで居た。その他の古狸の多くも大方は狩人に鐵砲で撃殺されたり、カンシャク玉を嚙まされて、口中を打割つて死んでしまつた。さうして煮て喰つたが肉が恐ろしくこはかつた位で簡單に結末が着いて居た。昔て多くの物語を遺したものの末路としては、あつ氣ない最後であつた。それからもう一つ、呼び負けたり鐵砲で撃たれたで無く、稍狸らしい最後を遂げたものがある。

明治三十幾年であつた。豊川鐵道が初めて長篠へ通じた時である。川路の正樂寺森の狸が、線路工事の爲に穴を荒された仕返しに、或晩汽鑵車に化けて走つて來て、此方から行く汽車を驚かした。初めの時は汽鑵手もうつかりして、慌てゝ汽車を止めたが、次の晩には、向ふも同じやうに警笛を鳴したが、構はず走らせると、その汽鑵車はフッと消えて、何やらコトリと轢いたと思つたが、唯それだけでもう何事も無かつた。翌る朝見ると線路に古狸が一疋轢かれて死んで居た。それを線路工夫が拾つて煮て喰つたげな、あの川路の停車場から少し長篠寄りの、山をえらく掘割つた處だなどと、尤もらしい話であつた。

それ以來正樂寺の森へは、ちつとも狸が出ぬと言ふ。

妙な事に此話の生れる前に、同じ類の話を私なども既に聽いて知つて居た。話は川路よりは遠かつたが、初めて東海道へ汽車が通じた時だと言ふ。寶飯郡の五油と蒲郡の間のトンネルで、古狸が汽車に化けて轢かれたと專ら言うた。トンネルが出來て穴を毀された恨みと言ふのも前の話と違はなかつた。汽車が第一に運んで來た土産だつた事はよく判る。如何な狸の奴でも、汽車には叶ふまいなどと、感心したものであるが、一方から考へると狸にとつての汽車は、トンネル工事で穴を毀される以上に、憎い憎い敵であつたかも知れぬ、さうして結果は狸が負けて亡びて行つたのである。

トンネルの事からもう一つ連想する話があつた。明治の初年、長篠の湯谷から、川傳ひに牧原へ越す峠を、獨力で以てトンネルを開鑿した者がある。その後其處の山の狸が、穴を荒された腹癒せに、毎晩出て惡戲をする、日が暮れると、マンボ（トンネル）の中程に傘をさして立つて居て嚇すと言うた。

穴を荒した主で無しに、通行人に仇をしたのは聞えぬ訣合だつたが、此方は汽車で無かつたゞけ狸の方は太平樂でヤつて居て、結局通行人が永い事迷惑したのである。然し其處の狸は格別殺された話も聞かなかつたが、近年人道の下を更に汽車のトンネルが通じたから、或は又變な眞似をして轢殺されたか知れぬ。或はとくに何處かへ安住の地を求めて去つたものか、もう大した噂も聞かなかつた。

半殺しの狸ではないが、未だ言殘した事が一つある。横山から東へ、遠江引佐郡別所の、本龍寺と云ふ古寺では、夜になると狸が雪隱に來て惡戲をすると謂ふ。或時寺に居た娘が用足しに行つて靑くなつて逃げて來た。寺婆が檢分に行くと白髯のすごい爺が中に踞んで居たと言ふ。明治初年の事で其婆さんから直接聞いた話が傳つて居た。又狸が雪隱の戸を鳴す噂も聽いたものである。誰も居ないのに、ギーと音がするのは、狸だなどと言うた。此話と關係があるかどうか知らぬが、山小屋などでも狸が雪隱について困ると言ふ事を度々聽く。しかし之は餌を求めて來るまでで、他意あるものではなかつたらしい。

えて冬に有がちな天候であつた。夏分にある油日と云ふのとも異つて、どんより落付いて晴れとも曇りとも、境目の判らぬやうな空合である。かうした日に限つて、ものの陰がくつきりと浮いて、遠くの山の木の葉も、一枚一枚算へられる。大小様々の恰好をした山の嶺に囲まれた村の中は、まるで水の底のやうな靜かさを保つて、次の瞬間に迫るであらう何事かの現象を待受けてでも居るやうである。かうした折であつた。體中の血も暫く流れを止めたやうに懶くて、肉體が表面から段々ぼかされ溶かされて、まわりの空氣から土の中へと、滲みとほつてでもゆくかと思ふやうな一刻である。しづかに、何處からか――それは地の果からでも湧いて來るやうな、幽かな喧噪に似たものが次々に迫りつつある。さうしたものが一度、肉體の何處かに觸れたと思ふと、人々の心の絲に、にはかに異常な緊張が蘇つて來た。それがどういふ性質のものか説明も出來ない中に、ア、、何處かで猪を追つて居る、と口の端へはもう出て來たのである。眤と耳を澄ますと如何にもとほくからホイホイといふ聲が聞えて來る。つづいてキヤンキヤンと鋭い犬の鳴聲がする。なる程猪追ひであるらしい。軈てそれ等の響が、次々にはつきりして來る。恰も風が峰を渡つて來るやうだ。

狩人が猪を追つて、山を越えて近づきつつあるのだ。鐵砲の音がする、矢聲が續けさまに響く、猪追ひは今正に酣であつた。それと知ると畑に働いて居る者も、路を歩いて居た者も、もう眤として居られぬやうな焦燥を感じた。何處だらうと、仕事の手を休めただけでは濟まされない、思はず宛もなく走り出す者もあつた。人々の胸には、猪の走る姿が、明らかに映つて居たのである。

村の人々にとつては、猪追ひそのものが、單なる興味ばかりでなかつた。別に何物か嚴しく心を惹き捉へずには措かぬものが、肉體の何れかに未だ失せきらずに潜んで

居たのである。

かうした村の人々が、獸の話に興味を抱き、好んでそれを物語つたり聽かうとしたのもどうやら肯かれるのである。狩りの話が面白くて忙しい仕事も忘れて、畑の隅に蹲んだまま、半日潰して了つたなどの事も、其處ではちつとも不自然なことではなかつたのである。

○

猪・鹿・狸と、山の獸の名が麗々と竝んで居ながら、獸そのものの話が、至つて尠かつた事は、語る者としても誠に不本意である。獸の殊にその生態に關する話の尠い理由は、また別にあつたのであるが、實は此處に擧げた話の全部が、本來「三州横山話」と一緒に語らる可き性質のものであつた。從つて話の範圍も、横山の村を中心とした、僅か數里に亘る地方より以外には殆ど及んで居なかつた。悉く其處で生れて成長したものでなくば、保存されたものである。それで「横山話」とは絕えず觸合つて居ながら、どちらか一方に纏めて、筋目立てる事の出來なかつたのは、歯痒い限りである。

私にとつて横山は祖先以來の地で、生れて十幾年間を殆ど一歩も外の地を踏まずに育ぐまれて來た因緣の土地である。境遇も感情も、ただの村人に成り切つて居たであらう。もともと農家に生れて、村一般の仕來りの中で育つたのだから、當り前の事である。話にしても、村の人が興味をもつて語る事を、そのまま素直に享け入れたまでである。あまり村の人そのままである事に、今でも驚いてゐる位である。然し假りに此物語の內容に、村の人らしくないところがあつたとすれば、それは東京に十幾年暮して來てこの話をする現在である。その爲なまじい都會人らしい常識と批判が加はつて居たとしたら、話そのものの爲には、まことに本意ない缺合である。然しその事はどうとも致方ない、どうやら横山に咲いて、小さいながらも、實を結んだのが東京であつたとするより詮ない事である。

○

獸の話が尠なかつた一つの理由は、蒐集が不充分であつた事にも據るが、それよりも横山附近の土地が、渠等獸にとつて、既に足跡のあまり濃い地方で無かつたのである。地勢から言つても、環境から見てもさうではないかと思ふ。假りに足跡が濃厚であつたとしても、それはもう久しい以前のことで、近世では、渠等の爲に一箇所取遺された偶然の場所に過ぎなかつた、そんな風にも考へられるのである。斯う言ふと話の内容と、大分矛盾する點もあるが、渠等が土地から姿を匿したのは、村の人々が信じて居た如く、三十年四十年程度のもので無くて、その間に、もつと大きな隔りがあつたのではないかと思ふ。それで話そのものは正に盡きんとする燼の榾火が、炎に變る前の最後の輝きを見せたやうなものである。或は永訣を別つべく遠くからの渠等の相圖にもひとしい。話の一つ一つを克明に辿つて見ると、さういふ事が感じられるのである。

勿論程度の問題であるが、例へば明治三十年頃の段戸山中に現はれた夥しい鹿の群なども、久しい言傳への幻影であつて、事實は嘗てある時代に、渠等は夙くに峯から峯を越えて、霧の如く消え去つてゐたやうに思はれる。

私の此判斷が誤つて居たとしても、四周の狀況は、何處迄も話の儘を事實として主張し切れない氣がする。

今一つの理由は横山の地勢であつた。山村とは言ひ條、一方外界との交渉がはげしくて、靜かに話を繰返して居るには、餘りにも忙し過ぎた。早くから汽車の汽笛を聞くやうになつた爲に、獸以上に話を亡びさせたと思ふことである。

○

横山は東三河を縦貫した豐川の上流で、遠江國境には三四里の路程にある一寒村である。村から言ふと西南方即ち豐川の下流地方と、北東山地との境界に當つて居た。東海道筋からは入つて、豐川の流れに沿つた七里の路は、稍平坦な丘陵を縫うて走つ

て居たが、此處から急に山が高くなつて、路は山また山の間を、信濃に向つて辿つて居たのである。それから先は所謂北三河の山地卽ち現今の北設樂郡で、昔の振草の郷であつた。段戸山をはじめ、月の御殿山、三つ瀨の明神山など、三河の代表的深山で其處は未だ文明の光も透さぬ天狗・山男の世界の如く永い事信じられて來た土地である。從つて山稼ぎを職とする杣木挽の類も多く入込んで居た。その連中が次から次に話を運搬して來てさうして、この平地との境に散布したのである。私などはたまたまそれを拾はされて來た一人であつた。

猪、鹿を初め多くの獸の本據も亦其處にあつて、村が山續きにそこに續いてゐるやうに、獸も亦其間に連絡があると信じてゐた。例へば家の表口と背戸口のやうに、表の方は東海道筋の明るい交渉を受けてゐるが、一度背戸口に廻れば依然として昔の儘の山の生活がつよく根を張つてゐた。さういふ環境に置かれたのが、横山の村だつたのである。

然も村の人達が、渠等獸たちの本據の如く考へて居た地も、最早今日では話の內容と多分の隔りが出來てゐた。今年の正月に北から南へ昔の振草の郷を步いて見ると、私が見聞した範圍では、猪、鹿の類もとくに姿を消して了つてもう二十年も經つてゐた。猪などは反つて、私の在所の方が本據のやうにさへ思はれた。

實のところ私などが以前から信じて居た獸の世界との交渉は、其處とてもとつくに斷たれて居たのである。さうして見れば横山の猪なども、全く孤立した山蔭に取遺された一つに過ぎなかつた。それも、僅かな數であつた。一個の獸の影を、地を替へ人を代へて、幾つにも見た程度のものであつたかも知れない。

こゝに集まつた話が恰度それであつた。山蔭に取遺されたもので、とくに消えて居た筈のものである。それだけに、內容の無い影の淡い話ばかりであつた。其上にも話の一つ一つが、何年前の事、何處の出來事として、その折々に呱々の聲を擧げたものばかりでなく、話が生れると同時に、もう久しい傳承の衣を着けて居た事も爭へな

い。

獸ばかりでない、猪、鹿、狸に絡んだ人間のことや家の物語がさうであつた。一々正確な事實の傳承とばかりは決められなかつた。例へば鳳來寺行者越の一つ家の話にしても、そんなに古くも無い事だが、すでに幾通りにも語られて居る。えらい劍術使ひの又藏老人が死んだのは、明治になつてかららしいが、相貌の說明にも二通りあつた。一眼で小男であつたと言ふ一方に、いやさうで無いと、反對の特徵を言張る者があつた。いやたしかに眼は一つであつた。現に一つは弓術の遺恨から、大野町の某に何處かの祭りの矢場で欺討にされて潰されたと言ふのである。然し斯うした問題はまだ始末がよいが、四尺幾寸の小男であつた事は確であるらしいのに、立派な體格であつたなどと、途方も無い事を語る者もあつた事である。斯うなると、話も何を的に聽いて宜いか判らなかつた。話手の心理狀態から檢討して掛る必要も生じて來る。然しそれは今は到底不可能な事である。

せめて話手の姓名や年齡から、出來れば性質を何かの栞りにと擧げて置く程度である。殊に性質は未だしも姓名と年齡は是非共言はねばならぬが、それが多くの場合不充分であつた。實は大部分は判つて居るのであるが　いろいろの筋合から、わざと省いた場合も尠くない。それには話の煩はしさを考へた爲もあるが、もつと大きな理由はその人々への氣がねである。讀者には誠に相濟まぬ次第であるが、かうした類の話の種になつた事を、何か馬鹿にでもされたやうに考へようとする人がありはしないかとの老婆心が働いたのである。勿論その人々の悉くがさうした感情を抱くとは信じないが、さうした心遣ひから、手加減を加へざるを得なかつた。

○

この話が世に出るについて、第一に思出さねばならぬ事がある。東京の山の手の、樫の木立に圍まれた家であつた。其處は外濠に近い高臺の屋敷町で、東京の街中で居

ながら電車の響も大分遠かつた。西向に庭を控へた部屋の、片隅に置かれた椅子に腰を下すと、硝子戸越に、うつすりと青苔を被つた庭土が見えた。恰度その中央あたりに、櫻桃が一株不調和に枝を伸して居て、それと向ひ合つて、古いどうだんの株があつた。庭の行詰りは、高く伸びたかなめの垣で區切られて居た。今思ふと、その間もう幾年かになつた。その部屋を訪れる度に、次から次へ、きまりもなく語つた話が、いつとなしに溜つてしまつた。たとへ塵芥にしても、之丈になつて見れば、此儘更に谷や川へ持出して捨てて了ふのは惜しい、何とか成らぬかと言はれるまま、思ひ切つて似よりのものだけを、又小分けに拾ひ上げてみる事にした。それが此處に集めたものだつたのである。考へると可成り永い間であつた。或時は櫻桃の花がもう散りかけてゐた。それが實を結んで、幾度か花を持つたのだ。かなめの葉が、一枚一枚陽に輝いてはつきり讀まれる日もあつた。寒いみぞれの來さうな日に、鹿鶫が一羽何處からか迷ひ込んで、頻りに苔をついばんで居た。暑い夏の日盛りを白い猫が、靜かに飛石の間を歩いて行つた事もある。

今思ひ出しても恐縮する程、よくも愧面なく横山の爐縁を持出したやうな話を續けたものと思ふ。さう言へばあの椅子の前に在つた四角な火鉢臺が、さしづめその爐縁の役目をしたのである。さうしてみると語手の私は横座に向つた木尻の客でもあつたのである。假りに火鉢臺に心があれば、そんな呑氣話を此處でされてはたまらぬと、さう言つてたしなめたかも知れない。その間に、部屋の長押に掛つて居た、むつかしい維新の元勳の書が、いつか横山の山を描いた、額に變つて居た事も考へやうではふしぎである。

木尻の客は、話が濟み腰を上げて、暇乞ひして玄關を出るとほつとした。何かしら口に言現はせない、體中汗ばんだやうな興奮があつた。外には明るい都會らしい陽が照つて居た。足を電車通りの方へ運ぶ間名殘りの夢でも惜しむやうに、暫くは村を思ひつづけた。さうして昔て語つてくれた村の人々の顔が、何の屈托も無ささうな眼付

がしきりに胸中に去來するのを感じた。

その人々の中には、語り了つた時、眼を眞赤に泣腫して居た人もあつた。遇つたら話さうと、忙しい仕事の間にも、忘れまいと心掛けて居てくれた人もある。ほんの子供の頃聽いた話を、何十年か胸に藏つて忘れてゐたのを、問はれるままに、思ひ出したといふ女もあつた。その人々の顔付だけ思ひ出しても、語り了つた時にはこの私と似た心持であつたらう事が想はれる。よし明かに意識はしなくとも、尠くも話して居た間だけでも、話さぬより幸福だつたであらう。

中には、もう死んで了つた人もある。一度は語つたものの、仕事や境遇に追はれて、再び思ひ出さぬ人もあるであらう。

このまま放つて置いたら、何れは何處とも無く水泡のやうに消えてゆく運命である。さうして見ればこの小篇は、それ等の人々や、或ひは又山陰に最後の孤影を守つて、淋しく亡び去つた猪や鹿や狸を懐ふなつかしい紀念であつて、さうして千匹猪の塚ならぬ供養の塔であつた。形はよし拙なくとも、建てたその者は因縁が薄くとも、永く山口の草に埋れつつも殘るであらう。斯う考へれば、あの横座の主に迷惑を掛けたのも、火鉢臺に退屈さした事も、共に縁りの並々ならぬものを感ずる。從つて吾一人の問題では無かつた。私の後から多勢の人達や澤山の獸達の姿も見えるやうである。さうだそれ等の人々や獸達に代つて、溜息を吐く程の大きな感謝を、あの横座の主に捧げねばならぬ。さうして今一人、決して忘れてはならぬ恩人があつたことを特に書きそへておきたい。

大正十五年十月

早川孝太郎

昭和十七年三月一日印刷
昭和十七年三月五日發行

著者　早川孝太郎

發行者　森下文一郎
東京市芝區白金三光町五二

印刷者　椎名昇
東京市芝區南佐久間町二九

發行所　文一路社
文協會員番號　一二八〇七一
東京市芝區白金三光町五二
事務所　麻布區古川橋（小川書店）
電話（三田）四四三　振替東京一三六

（定價二圓五十錢）

配給元　日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ七

（二葉印刷　長谷部製本）

近刊豫定

續古代村落の研究（山村編）　早川孝太郎著　B六判　定價未定

鹿・猿・狗　早川孝太郎著　B六判　定價未定

搗衣隨筆　宮本勢助著　判型定價未定

既刊書目

琉球の研究　加藤三吾著　早川孝太郎校訂　A五判　四〇〇頁　八百部限定　定價參圓五拾錢

古代村落の研究（くろしま）　早川孝太郎著　B六判　四二〇頁　五百部限定　[illegible]